

困難を感じた。ことに、パレスチナにては、『モーゼの律法によりて割禮を受くるにあらずば、救はるることなし』と云ふ原理を眞向にふりかざす固陋派があつた。

ユデアから、無割禮者の中心だつたアンチオキアに下つて來たのは、かゝる輩の教人であつた。彼等は、バルナバとパウロとの教説を批難して、此の兩人は、多數の信者を作る爲、即ち、安直に異邦人をひき入れる爲に、眞正の教説を棄て、顧みないのだと主張した。(註二)使徒等は、この宣傳を重大視した。異邦人に悉く割禮を要求するのは、とりも直さず、彼等に律法の全體の遵守を強ひる事である。若しも、律法が救靈に必要であり、且、充分であるならば、キリスト・イエズスに於る信仰は何の役に立たう。其の位ならば、ユデア教に止つてゐて、ユデア教の傳道をした方がましである。又、それならば、キリストの受難は無益であり、世を救ふ爲の御血は空しく流れた、と云はねばならぬではないか。その家、律法は『誼の軛』(ガラチア書、三ノ二〇)であるのに、今日まで之を知らざりし人々の頸に、何故、これを懸けようとするのか。

パウロとバルナバとは、靈示により、又、過去の經驗によつて、全力を盡して、この保守論と戦つた。しかし、アンチオキアのユデア人は、ユデア教的正統派の狂信を支持し出した。會堂シナゴグが教會を捉へて、滅し盡すを得ざるまでも、之を併呑しようとしたのである。パウロは、僞兄弟に、一步も譲ること

を欲しなかつた。論争は、かうして、益々深刻化していつたが、パウロはやがて心の裡に、エルサレムに上つて、教會の中心の『柱』なる、ペトロ、ヤコボ、ヨハネの裁斷に訴へ、彼等の口から、此の陰險極まる宣傳を否定してもらはねばならぬ、と云ふ啓示を聞いた。しかし、彼は、此の企に、アンチオキア教會の同意を欲した。さうすれば、彼は、エルサレムでアンチオキア教會の代表者として、正式に決定を聞くことが出来る。此の考で、彼は、バルナバと數人の弟子と共に行に上つた。其の中には、チトと云ふ無割禮のギリシヤ人もゐた。(註三)

一行はフェニキアとサマリアとを經由した。さうして、行く先々の教會で、彼等の教説、異邦人への布教の事情、『彼等と共に』神のなし給ひし奇蹟等を物語つて、倦むこともなければ、又、格別誇る氣持にもならなかつた。何故ならば、その光榮は彼等のものでなく、彼等を導き給ふ靈のものであつたから。

かくて、聖都に這入る前から、すでに各方面の同情が彼等を集つた。エルサレムに入るや、パウロは、まづ、此處の教會の『著しき人々』(ガラチア書、二ノ六)を各別に訪問した。此の際にも、彼は敢て自分がうけた神の啓示には誇らず、無理に所信を主張せず、反つて、彼等に『嘗て走りし事の空しからざりしや』否やを尋ねるのであつた。(ガラチア書、二ノ二)彼は、競走場裡に榮冠を贏ち得んが爲に疾走

する選手に好んで自己を譬へた。此のギリシャ風の比喻は、すべての外國のものを憎む固陋の輩には悦ばれなかつたけれども、ペトロ、ヤコボ、ヨハネは、彼の明瞭な思想を歓迎した。ことにペトロは、ヨッペに於る異象、及び、コルネリオの改宗以來、既に新思想の所有者であつたのである。

しかしながら、ユデア主義者等は、アンチオキアでの攻撃を繰返へして、『柱』たる人々に、『異邦人は割禮を受けざる可らず、又、命じてモイゼの律法を守らしむべし』との彼等の説を支持するやうに要求した。

ペトロは、長老會議を召集して、パウロの主張に、最も明白な賛成の意志を表した。

『兄弟たる人々よ、久しき以前に、神我等の中より選みて、わが口を以つて異邦人に福音の言を聞かせ、これを信ぜしめ給ひし事は、汝等の知る所なり。且、人の心を知り給ふ神は、汝等に賜ひし如く、彼等にも聖靈を賜ひて證明し給ひ、信仰によりて彼等の心を潔め、我等と彼等とを聊も隔て給ひし事なし。然るを、何すれぞ、汝等神を試みて、我等の先祖も、我等も、負ふ能はざりし軛を、今、弟子等の頸に負はせんとする。我等の救はるゝは主イエズス・キリストの恩寵によれりとは、我等の信ずる所にし、彼等も亦然るなり』と。

ペトロは、パウロとの會見によつて、ユデア人と異邦人との間に、神は何等の差別をも設け給はずと

の確信を益々堅固にしたに相違ない。しかし、彼にとつては、それよりも、主の御言の記憶が、なほ貴かつた。彼は、イエズスが『我は、又、此の檻に屬せざる他の羊を有てり』(ヨハネ一〇ノ一六)と曰うたことを忘れない。又、主が、ファリサイ人の誤れる傳統論、狡猾な偽善を劇しく批難し給うた事をも思出した。「マテオ二三ノ四以下参照」しかしながら、彼は、敢て、律法を批難せず、又、判然と、割禮を却けもしなかつた。彼は、何よりも平和裡に於る教會の一致を欲して、漸進的態度をとつた。彼の選んだ、進取的と云はんよりも寧ろ保守的態度は、既にカトリック教會内に於て、ローマ教皇のとりべき中庸、折衷の精神を現はして居た。

それまでは、會場も何となく騒然としてゐたが、彼の演説でそれも静まり、バルナバとパウロとが、自己の所信を披瀝する言を傾聴するやうになつた。彼等が行つた奇蹟は、その布教方法が正しくして、主の彼等と共に在す事の證據ではないか。寧ろ事實を重んずる聴衆は、やがて深い感動に打たれた。此處に語る人々が、キリストの爲に死生の巷に出入して、傳道に盡力したことは、會衆の熟知する所である。どうして、彼等の模範の權威を否定することを得よう。

此の時、反對論者を驚かさやうな決定的の干渉があつた。

ヤコボが起立した。ヤコボはイエズスの近親で、義人と仇名されてゐた。麻の長衣をまとひ、長髪、

長髯、恰も、エゼキエルが、救はるべき人の前額に、神祕の「T」字を印するを見た、異象裡の白衣の翁の風采があつた。「エゼキエル、九ノ二一六」彼は嘗て、イエズスの御死去の前に、「我は、主の杯を飲みてより、彼が死者の中より復活し給ふを見るまでは、敢てパンを食せじ」と誓つた。主は御復活日の朝、彼に現はれて曰ふらく「兄弟よ、汝のパンを食せよ。蓋し人の子は死者の中より復活したればなり」と。(註四)彼は毎日神殿で祈禱し、常に長時間跪いてゐた爲に、その膝が駱駝の膝のやうに堅くなつた人である。彼は律法に忠實なりしキリスト教徒であつた。さうして、人々から正統的傳統の擁護者を以て擬せられてゐた。

そのヤコボが起立して、主要なる點に於て、バルナバとパウロとに賛意を表したのである。彼の理由は「神が既に異邦人の中より、己が名を尊ぶ民を取り給うた以上は、異邦人より神に歸依する人々を煩はしてはならぬ」と云ふのであつた。

『彼等を煩はしてはならぬ』とは、割禮を強ひてはならぬとの意味である。しかし、彼は、同時に、實際的智慧を以つて、

『但し、偶像に捧げられしものと、私通と、絞殺せられし獣の肉と血とを戒むべし』と云つた。

此の要求は、一見如何にも奇異に思へるが、しかし、決してさうでない。ユデア人と異教より改宗し

た人々とは、同一の食卓に連り、アガペに與らねばならぬ當時の實情を知る者は、容易くこれを首肯するであらう。異邦人出身の新信者は、絞殺せられた獣の肉を食することを、何とも思つてゐなかつたが、ユデア人にとつては、それこそ、言語同斷の事であつたのだ。其の事が、たゞに、モイゼの誠に背くばかりではない。獣の血を食すると云ふ事は、たとひそれが他の食物と共に調理されてゐても、血の中に動物の魂が潜んでゐると信ずる彼等にとつては、此の上もない汚はしい事であつた。又、偶像の前に具へられた肉、偶像を祀るに用ゐた酒は云ふに及ばず、此の酒を容れた容器、或は、此の酒の飛沫をあびた果實等に至るまで、ユデア人には嚴禁されてゐたのである。

しかしながら、異邦人出身の新信者は、これらの厭惡を知らなかつた。それで、ヤコボは、彼等がモイゼ以來、否、むしろ、ノエ以來、常に嫌つてゐたことをしないうらにと要求したのである。割禮は受けなくともよいが、其の代りに、モイゼの誠の或點に於て、信者のイスラエル人と同じ規則に従つてもらひ度い云ふのであつた。

私通を禁ずべしと云ふ、非特殊的事柄が、食物に關する規定の中に挟んであるのは、少しく不似合にも思へるけれども、此の私通と云ふのが、既に自然法によつて禁じられてゐる、普通の意味の私通であるかどうかは問題である。シリアやフリジアで、アスタルテやアティスなどの偶像の祭禮につきもの

の、所謂宗教的姦淫をさすのではない事も無論である。いやしくも、キリスト教の志願者たる者、信者たる者は、かゝる行爲の禁じられてゐる事を熟知してゐた筈である。ヤコボの意志は、舊約聖書のレビ記に禁じてあるやうな婚姻を信者の間に禁じようと云ふのであつた。例へば甥と伯母との婚姻、義理の兄弟姉妹間の婚姻、或は、後にパウロがコリント教會に咎めたやうな婚姻、即ち、或人が、亡父の妻繼母を迎へること〔コリント前書五ノ一―五〕等であらう。

かくの如き事柄の禁止は、ユデア的傳統を支持すると共に、教會内の道德的標準を向上せしめる事になるから、パウロも、双手を舉げて、ヤコボの提議に賛成した。

長老等にも無論異議がなかつた。さうして、これを總會の席上で、正式に決定すると、早速、書簡に認めて、アンチオキアに送ることゝなつた。此の書簡の差出人は、エルサレムの教會で、文體は命令體ではないが『聖靈と我等とは……宜しとせり』と權威的に書いてあつた。パウロとバルナバとは、アンチオキアの信者に此の書簡を持參する爲に指名せられた。しかし、なほその重要な事を裏書する爲にエルサレム教會の重立ちたる數人が、二人に同行することにきまつた。ことに、其の中のシラと云ふ人はアンチオキアに留つて、後年、パウロの有力な助手となつた。すべて、これは、ユデア主義的キリスト信者が、決議に對して、不平をとらぬやうにする爲だつたのである。

かうして、パウロは、自己の主張の眼目を、一般に認めしめることを得た。ユデア人は、古來の自國の傳統に従はうが従ふまいが、自由である。しかし、異邦人が、キリスト教徒になる爲に、割禮の刃は、全然、不要になつた。これより五六年の後、彼は、ユデア主義者に煩はされたガラチア人に、次のやうに書を贈つてゐる。

『柱とも見えたる、ヤコボと、ケファ（ペトロ）と、ヨハネとは、我に賜りたる恩寵を辨へて、一致の印として、右の手を、我とバルナバとに與へたり。是、我等は異邦人に到り、彼等は割禮ある人々に到らん爲なり』と。（二ノ九）

使徒行録に記されたペトロの演説はパウロの此の言と矛盾する、何故ならば、ペトロもまた、自分が異邦人の使徒なることを公言したではないか、と云ふ者がある。如何にも、その通りだが、然し、パウロも、『地は皆汝の前にあり、汝もし右に行かば、我左に行かん、又汝もし左に行かば、我右に行かん』とロトに告げたアブラハムのやうに、自分達の仕事を、全く別個のものとしたのではない。ペトロも異邦人に傳道したが、パウロもユデア人に傳道した。パウロは常に排斥されるまで、どの町でも會堂で説教した。しかしながら、大體に於ては、ペトロ、ヤコボ、ヨハネは、割禮あるユデア人、及び、割禮を厭はざる異邦人に、主として布教し、パウロは、割禮を受けぬキリスト信者を、自由に作ることに

なつたのである。但パウロと雖も、父としてギリシヤ人を、母としてキリスト教に歸依したユデア婦人を有する、弟子のチモテオに割禮を施して、其の地方のユデア人の悪感情を避けた事がある。

後のエピオン派異端は、割禮を受ける事を信仰箇條とまでしたが、使徒等は、各異る道をたどりながらも、聖靈に導かれて、從順にその靈示に従ひ、主イエズスの御國を作ることをつて、唯一の目的とした。

それ故、パウロはエルサレムを去るに際して、『其の著しき人々は何事をも我に加へざりき』(ガラチア書二ノ六)と云ふことを得たのであつた。

エルサレムで、パウロは特に貧者を顧ることを依頼された。彼の地の聖徒等は、いまだに劇しい窮乏の裡にあつた。故にパウロは、到るところの布教地で、彼等の爲に、金錢を乞ひ、衣服や日用品までも募集した。此の施與は、母教會と、新に生れた各地の教會との間に、兄弟的愛の連鎖となつて、微妙な効果を擧げる事が出来た。

さて、パウロとバルナバとは、アンチオキアを始め、全シリア地方で、エルサレム教會の決議を説いて廻つたけれども、それ位のことでは、ユデア主義者の攻撃は、仲々、鈍らなかつた。僞兄弟等は、絶えず、彼がキリスト・イエズスに於て有てる自由を探り、『彼を奴隷とせん事を』はかつた。(ガラチア書

二ノ四) その中に、間もなく、使徒行録に書いてない一事件が起つた。此の事件は僞兄弟等の爲に、どれだけ教會の一致が危険に瀕したかと云ふことを、最も雄辯に物語るものである。ガラチア人に、此の苦しい過去の出來事を語らねばならぬと信じたのは、パウロ自身であつた。

『ケファ、アンチオキアに來りし時、咎むべき事ありしかば、我は面前まのあたり之に反對せり。其は、或人々のヤコボの許より(彼等はさう自稱した)來るまでは、彼、異邦人と共に食し居たれど、彼等來りしかば、ケファは割禮ある人々に憚り、扣ひかへて異邦人を離れ居たればなり。他のユデア人、此の懸行かくだてに同意せしかば、バルナバも、亦、彼等より、其の懸行に誘はるゝに至れり。

かくて、彼等が福音の眞理に従ひて、正しく歩まざるを見て、我、一同の前にてケファに謂へらく、汝、ユデア人の如くにせず、異邦人の如く行へるに、何ぞ、異邦人を強ひて、ユデア人の習慣に従はせんとはする。我等は、生來、ユデア人にして、異邦人より出でし罪人にはあらず、然しながら、人の義とせらるゝは、律法の業によらずして、唯、イエズス・キリストに於る信仰によるを知るが故に、我等も律法の業によらず、キリストに於る信仰によりて義とせられん爲に、キリスト・イエズスを信ずるなり。其は何人も、律法の業によりて義とせられざればなり。

もし、キリストに於て義とせられん事を力めて、尙罪人とせられなば、キリストは、罪の役者なるか。

否々。もし、我すでに毀ちたるものを再び建つれば自ら詐譎者いつはりものとなるなり。されば、我は神に活きん爲に、律法に死し、キリストと共に、十字架に釘けられたるなり。それ、我は活くと雖も、最早我にあらす。キリストこそ、我に於て活き給ふなれ。我、肉體に活くと雖も、我を愛して、わが爲に己を付し給ひし神の御子の信仰に於て活くるなり。我、神の恩寵を棄つるに非ず、もし、義とせらるゝこと律法によらば、キリストは徒に死し給ひしなり」と。「ガラチア書二ノ一一一二」

如何にも、雄勁な文章で描出された割しい光景である。もし、パウロが、此の調子で、簡単な自叙傳を綴つて置いてくれたならば、と残念に感じられる。

アンチオキアの教會を、危ふく分裂させようとした、ユデア主義者の行動は、よく理解する事が出来る。彼等にとつては、割禮、及び、安息日の誠と共に、食物に関する律法の規定は、神聖にして犯す可らざるものであつた。それ故、彼等は教議會で決められた妥協案では満足しなかつたのだ。元來、ユデア人は、潔き動物、及び不潔なる動物の區別を、神とその選民との間の契約の徴となし、これを一の特典なりとして誇つてゐた。さうして、なほ、これらの傳統的規定の周圍には、奇妙な象徴的理由が時と共に附加されてゐた。例へば、レビ記には、兎は、爪先が分れてゐないから食してはならぬとある。「一一ノ六」しかし、ラビ等は、此の獸が恥づべき習性を有するから、汚れてゐるのだと云ひ傳へた。

『バルナバの書簡』第十章』それ故、ユデア教出のキリスト信者は、異邦人出身と同じ食卓に連つて、兎肉が供せられると、非常な厭惡を感じる譯であつた。

しかしながら、ペトロは、さきの日のヨッペに於る異象の中の主の御言によつて、アガペの時には會衆と同じ食卓に座し、同じ食物を食し、さうして人々に、神の造り給ひし一切はよいものである事、あらゆる動物、あらゆる國民が、みな悉く神に祝福されたものなる事を教へてゐた。

此の時、エルサレムから、ヤコボの使者と偽るユデア主義者がやつて來た。ヤコボは、其の右の手を、バルナバとパウロと共に與へ、又絞殺された動物の肉のみを避くべしと云つて、エルサレムに於る争論を、好意的に解決した人である。だから、此の際、彼が眞に干渉がましい行動をとつたとは信じられない。恐らくは、ユデア主義者が、彼の權威の背後に隠れて、保守思想の宣傳に來たのだと解してよい。此の人達は、ペトロの態度を、劇しく批難した。ペトロは、彼等を躓すことを恐れ、逡巡狐疑の末、遂に、異邦人等と共に食することを廢した。ユデア主義者は、得たりとばかり、ペトロを籠絡し、益々自説の宣傳につとめたので、バルナバまでも、ペトロを眞似るやうになつた。

かくの如き行動は異邦人にとつて二重の躓であつた。何故ならば彼等を敬遠するのは、つまり、彼等を教會の内部に於る特殊部落とする事になり、又、同時にエルサレムでの教議會の重要な決議を無視す

る事に當るからである。『わが羔を牧せよ』との主イエズスの御言を聞いたペトロが、元に戻つて、ユデア風の生活を営まねばならないならば、信者一同、完全なキリスト教徒たる爲には、みなユデア人とならねばならないのであらうか。

パウロは、茲に、敢然として起つた。此の際、抗議する人は、彼を措いて他にない。勿論、ペトロを辱めるのが目的ではない。しかしながら、使徒の首領のつた妥協的な態度は、教會の不和をなだめるどころか、反つて、その分裂を招き、此の後退は、最も危険な結果を生むと感じたからである。

最も効果のある方法を選んできると云ふよりも寧ろ咄嗟の思付で、感情の迸るまゝに、彼は満座の中で——恐らくは、アガペの間であつたらう——ペトロに詰問した。彼は、ペトロの仕方を隠行だと罵つた。しかし、此の語は同時に、ペトロと彼との間に、根本的思想の點では、何等の乖離のなかつた事を示すものである。ペトロも、パウロと同一の原理を奉じてゐたのだ。

兩人共、同一の靈に導かれ奉る以上、これに些の不思議もない。たゞペトロは、ユデア人に對しては舊慣に妥協してやる方がよいと信じ、パウロは、その不可なるを指摘したばかりであつた。

パウロは、彼の演説の冒頭に於て、ユデア人の優れたるを認めてゐる。彼が『我等は生來ユデア人にして、異邦人より出でし罪人にあらず』と、異邦人の前で公言したのは、傲慢でも、何でもない。パウ

ロは、自分が、神の選民より出でしものなることを、片時だに忘れない。さうして單純素朴なる古人に相應しく、異邦人等自身の前で、自己の信するがまゝに之を云ふ方がよいと考へたのである。彼は自分が賣國奴だと思はれたくなかつたのだ。彼は、ユデア人を『犬』と呼び、その割禮を『偽の割禮』とまゝに痛罵する時にさへ、『フィリッピ書、三ノ二』なほ愛國心を失はない。但、彼は、イスラエル人の特權を高唱する際にも、人間的の光榮に眩目せず、排他的偏狹心を超越して居た。彼にとつては、キリストの智識、信仰の賜に比べる時、肉に於る高貴の如きは、大に投げ與へてよい代ものである。

彼は、晃々たる燭火の如く、敢てペトロの抗争することなき眞理を掲げて立つた。もし、律法の業にして人を義とするに足らんか、キリストの受難は何になる。キリストが我等の爲に贏得給ひし信仰による義は、偽の義となり、キリストは『罪の役者』となるではないか。使徒の聖愛の激するところ、往々にして奇矯の言となる。さうして『それ我は活くと雖も、最早我にあらず、キリストこそ我に活き給ふなれ』の一句に於て、萬丈の光芒を放つのである。

パウロに於て、此の崇高なる感情を激發したる、ペトロの誤謬は幸なる哉。パウロは、此の時（かく呼ぶ事が許されるれば）、キリスト教的感情の發作を起したのである。彼の言は慷慨に燃え、あらゆる反對論者を壓倒する強烈なる氣力を現はして、『我獨り正し』と宣言して、他人を挑むかと思へば、一轉し

て、『我は、キリストと共に、十字架に釘けられたり』との無上の謙遜、完全なる忘我の言となる。高さと低さとの不思議なる混交よ。『我』は一方に於て、最高の程度に主張せられ、又、同時に他方に殉教者のやうな自己否定の極に到る。彼が外觀的に一致を破つたのは、一致を救ふ爲であつた。さうして、ペトロを諫めた時に於てすら、聖パウロは後世の異端者とは正反對に、ペトロの首位を尊敬した。ドイツの聖書學者、及びルナンは、聖パウロとルーテルとの相似を説いたけれども、それには何の據處もない。ペトロは彼の攻撃を聽いて、如何なる態度をとつたか。我等は、ペトロの單純にして善良なる偉大な靈魂を識つてゐる。彼が先づ驚き、次で謙り、席を離れて、パウロに馳せより、喜悅の涙にむせんで彼を抱擁したことは、想像するに難くない。

キリスト教の將來が、食卓の如き、些々たる問題に關してゐたやうには思へない。しかし、非常な相違が些細な誤謬に端を發することもある。福音の教が世界に傳播する事は必然の勢であつたが、それはユデア教的律法の規定の廢棄を要したのである。一粒の芥種より芽生えた木は、空の鳥を悉く宿すに足る大木とならうとしてゐた。しかし、ユデア人は、空氣もろくに通はぬ、せまくるしい神殿の苑これを育てようとした。パウロはその障壁を破る天職を有した。神が彼等の手をかりて崩壞し給ひし此の障壁を再び建立する權利は、ペトロにもバルナバにも、否、何人にもなかつたのである。

(註一) これについては、聖アウグスチヌス『神の都』一六ノ七、テルチユリアン『對ユデア人論』第一章、及び、聖トマ・アキナス『ローマ書註釋』を参照するがよい。

(註二) これは後半、パウロがガラチア書で辯駁した譏誣である。

(註三) 此の事實はガラチア書二ノ一―三に於て、パウロが親しく述べる所である。使徒行録には、單に數人とあるのみで、名を載せてゐない。

(註四) 小ヤコボについては、イエロニモの『聖會記者傳』を参照するがよい。

10. 西に向ひて

ガラチアに於けるパウロ

パウロが如何に矯激の辭をつらねたと云へ、理は正に彼にあつた。バルナバとても、ペトロの如く彼を許さざるを得ぬ。

しばらくして、パウロは『いざ我等後戻りして、曩に主の御言を宣傳へし凡ての市町を巡回し其の安否を問はん』とバルナバに云つた。

これは如何にも唐突に聞えるけれども、單に非妥協的の自身と、アンチオキアのユデア主義者との衝突を迴避する爲に、居を移さうと云ふのではなかつた。新らしく建てた教會を巡回するのは、彼の方法であり、又、一般に、あらゆるキリスト教の布教者の方法であると云ふ事は、既に述べた通りである。使徒等の生涯は、此の意味で、各所に於る平和、規律、奮發心を維持する爲に、管下の修道院を常に巡回する修道會の管區長の生活に彷彿たる所がある。

パウロはバルナバと一緒に、またクプロ島に渡り、次で再びパンフィリア、リカオニア、フリジア諸州の各教會を訪ねたいと考へた。さうして、パウロは更に、なほ遠く、ガラチア州の北部ビニチア、ミジア州にも行きたいと欲した。『此の道をとれ』或は『其處に行くこと勿れ』と語りたまふ靈の、謬る事なき御言を聽いて、それに従ひさへすればよいのである。

しかし不幸にも、其の時、妙な感情の行違が兩人の間に生じて、旅程に上る事が妨げられた。と云ふのは、バルナバの従兄弟に當るヨハネ・マルコが、エルサレムからアンチオキアに來たのでバルナバは彼をも同伴しようとしたが、パウロはどうしても此の青年を連れることを欲しない。第一回の傳道旅行に際して、ヨハネ・マルコは途中で引返して『共に働かざりし者なれば』これを承容れてはならぬと考へた。それは憎惡ではなかつた。しかし、パウロが、此のやうに嚴格な態度をとつた、眞の理由は不明である。

それでバルナバは少し氣を悪くして、なほも自説を固守した。パウロも所信を枉げなかつた。兩人は遂に衝突した。恐らくは、この意志の疎隔には、まだ其の他にも原因があつたであらう。しかし、彼等の反目は長く續かなかつた。その證據には、パウロがエフェゾからコリント人に書簡を贈つた時には、すでに、バルナバを仲間のうちに數へてゐる。(註上)

かういふ譯で、今回は、バルナバはヨハネ・マルコを連れて、別に出發してしまつた。彼等はセリユキアから乗船して、クプロ島に渡り、パウロと共に始めた布教事業を發展させた。他方に、パウロはシラを同行者としてアンチオキアを發して、シリア、シリシアを廻つた。かくて主として、パウロの努力によつて、此の二洲にも所々に教會が出来た。

彼等はタルソからリカオニア州を志して、タウルス山脈を越えた。

火焰のやうな空を區劃する連山の麓、幾星霜を重ねた昔から雨にうたれ、風に削られて來た斷崖絶壁の間を、とぼくと歩を運ぶ使徒、並にその同伴者の姿を想像することが出来る。暮色が迫ると、彼等は隊商と共に、泉の傍、或は一本の木蔭にある旅宿に泊つたであらう。今日も此の地方に見られる低い入口の小舎や、屋根の下の廣間は、當時と少しも變らない。荷を下された驢馬や、駱駝や、山の小馬などが入り亂れて、自由に秣を食んでゐる。何處かで小鳥がけたましく鳴き叫ぶ。馬子共は鞭鳴らしながら聲高に罵り合ふ。宿屋の亭主は、目ぼしい客人を木蔭に招じ、小さな木製の足臺を持つて來て、客が其の上に足を乗せると、それを泉の水で滌ぐ。パウロは、或は行く先の模様を亭主に聽きたゞしたり、或は行商人のユデア人、兵卒、駱駝牽き等に神の國の事を語つただらう。

當年のローマ帝國の國道は、トルコ領となつた今日のなかば崩壞した道路よりも、遙によかつたに相

違ない。しかしながら、涼々、轟々の響を發して落下する溪谷に沿うて迂曲する點に於ては、同一であつた。時には、小逕は、谷底に下りてゆく。すると渴と疲とを醫す爲に、岩石の間の清流を手にすくつて飲むことも困難ではない。De torrente in via bibet; propterea exaltabit caput (かれ、道のほとりの川より汲みてのみ、斯てかうべを擧げん)。キリストの生涯に現はれた深甚の屈辱、並に至高の光榮、この大なる『謎』は、神の御手によりて作られたまゝの、原始的溪谷の自然に反映する。脚下には、陰翳があり、被造物の不斷の勞苦の呻吟がある。頭上には、照り輝く高峰が永遠の沈黙を守り、其處彼處には、槍の穂先のやうな形状をした松の樹が、太陽の中に突き刺さつてゐる。悠々と流れる白雲の下には、山鳥の叫喚が響き渡る。

路の兩側の絶壁が、互に相近づいて、閘門を鎖したやうな處にさしかゝつた時には、パウロは人間の前途を塞いで、遁路もないやうに蓋ひかぶさる律法の象徴を、これに發見したであらう。しかしながら一行は絶えたるが如く見ゆる所に一條の細逕を求め得て、なほ上方、『光の子』の自由なる領域に登れば、やがて眼の下に『善牧者』の牧場のやうな、春の青々とした野が展開する。そこを、幾條かの淺い流れが、日光に閃々と輝きながら灌流してゐる。

彼はデルペン、リストラ等のリカオニア州の教會を訪ねて、リストラで、後に彼の『信仰上の實子』

「チモテオ後書、一ノ二」となつた一人の若い弟子を獲た。チモテオは、ギリシヤ人を父としたが、祖母ロイス、母ユニケは共にユデアの婦人で、パウロの第一回傳導旅行中に、キリスト教に改宗した人々であつた。チモテオは幼少の時から、祖母と母とに聖書を教へられた。「チモテオ後書三ノ一五」パウロの書簡の暗示する所によれば、彼はおど／＼した、物に感じ易い、繊細の心情、最も愛すべき靈魂を有つてゐた。

少年チモテオは、まだ割禮を受けてゐなかつた。ユデアの婦人より生れた彼は、當然それを受けてゐねばならぬ筈である。パウロは、『其の地方なるユデア人に對して、『使徒行録一六ノ二』彼に割禮を施すことに定めた。パウロはチモテオを傳導旅行に伴はうと欲した。それに、過去の經驗によれば、此の地方のユデア人は、甚だ頑固で、その爲に現に危く彼の事業は破壊され、彼自身の生命すら脅かされた記憶を有したからである。彼は彼等の無用の反感を回避する心算であつた。且、たとひ彼がユデア主義者と全然正反對の主張を抱く者であつても、決して、律法を自身を、輕んじてゐるのではないと云ふ事を示したかつたからである。

行き廻る町々で、彼は、エルサレム會議の決議をユデア教出身、及び異教徒出身の信者の間の平和條約のやうに彼等に示した。この『條約』は實際、數世紀に亘つて、アジアのキリスト教徒にとつて貴い

憲法であつたのである。リオン及びヴェンナ教會の書簡と云ふ有名な古文書に、如何に此の規定が尊重されてゐたかと云ふ事を示す次の逸話が載せてある。ピブリスと云ふ一人のアジア婦人が苛責の苦痛に堪へかねて一旦棄教したが、更に勇氣を振り起して、異教徒等に叫んで云つた。

『獸の血をすら食することを禁じられる人々が、何ぞ小兒を食ふことを敢てせんや』と。

イコニウム、ビシチアのアンチオキアから、パウロは北上して、ピチニア州へ志した。彼はガラチア人の土地を過ぎた。ガリア人の血をうけたケルト族の蠻民が、キリストの死後二十年にして、始めて信仰の啓示に接した機縁はこれであつた。

ガラチア人は、元來南ガリア、ガロンヌ河の流域に棲んでゐたのであるが、その後冒險的精神に驅られてテッサリア州まで進出して來、こゝでテルモピレの險によつて支へられて、方向を一轉し、海上に浮んで小アジアの沿岸を掠奪した。小アジアに上陸してから、彼等は内地に侵入し、アンキラ、ペシヌス等、フリジア地方の町を占領し、次でサンガリウス河の彼方に土着した。彼等は、此處でも、ガリアに於る故郷の舊風を守つて、三種族に分れて部落を作つた。パウロが布教したのはトルステイボルジ族 Tolstibolges であつて、彼等の町の一はペンヌスの南にあつてトロンコリオ Tolosichorion と云つた。

これは、今日のフランスのトゥルーズ市 Toulouse と同一の語原から出た名稱である。後に、ローマの

アウグスト帝は、北ガラチアとフリジア及びリカオニアを併合して、行政上の一縣とした。ガラチア人の地方にも、他處と同じやうに、ユデア人の植民が散在してゐた。

ガラチア人は、自己の宗教的傾向と一致する、一種の神秘的宗教をフリジアの地に發見した。フリジア人のジベール女神の祭典は、愛の昂奮の極度が狂氣じみた血腥い犠牲となり、ペシヌスに於る女神の神殿に禮拜する人々は、舞蹈し叫喚した末に、遂に自ら傷くる事をしたものである。それ故、後にユデア主義者が、ガラチア人に、自ら割禮を施すべき由を勧め込んだのも、深く怪むに足りない。

パウロの雄辯、並に、彼の教は、彼等を驚かした。さうして、熱情的なガラチア人は、相次いで改宗した。パウロは此の地に逗留する心算でなく、單に通過するだけの豫定であつたところ、不圖疾病に冒されて、ガラチア人の手厚い看病を受けるやうになつた。パウロは、後に感謝の念を以つて、彼等に書贈つた『我が初め福音を汝等に述べし時、身體の虚弱を以てし、其の身體汝等の試となれるを、申しむことなく嫌ふこともなくして、我を神の使の如く、キリスト・イエズスの如くにさへ承けたりき……我、汝等の爲に證明す、爲し得べくんば、汝等己が目を抉りて我に與へしならん』と。〔ガラチア書四ノ一三—一五〕

此の書簡の誇張に基いて、パウロは劇しい眼病を患つたのであらうとの説を爲した學者がある。しか

し、東方諸國にては、眼病は日常甚だ多い疾患であるから、そのやうな事では、ガラチア人にとつて『試』になるまいと思へるのである故に、それよりも、寧ろ劇しい熱病、それも、恐らくは痘瘡のやうな、發疹性の猛烈な傳染病を患つたのであらうと想像される。

パウロは一生涯、ガラチア人の親切を忘れなかつた。しかしながら、彼等の輕佻は彼を苦しめた。彼等は彼の教に心酔したけれども、後に間もなく、ユデア主義者が此の地にやつて来て、パウロの福音を曲げた時に、また容易くその欺く所となり、チモテオの實例の如く、パウロが彼等にも割禮を命ずるものであると誤信した。使徒は憤激した。『愚なる哉、ガラチア人よ、誰か汝等を蕩して眞理に背かしめしぞ』と。〔ガラチア書三ノ一〕パウロのこの言葉は、空間と時間との距離を飛び越して、現代人を以て自ら任じ、饒舌にして虚偽の禮儀を重んずる今日のフランス人に對して語られてゐるやうではないか。

(註一) コリント前書、九ノ六『又、たゞ我一人とバルナバとのみ勞働せざる權なきか。』

フィリッピにて、鮮血による證明

パウロは、ビチニア州に教會をたてる心算でガラチア人の地を通つたのだが、聖靈はこれを阻み給うた。この地方を教化すべき使徒は他にあつた。それは當時より約六十年をへだて、此の地方の總督と

なつたプリヌスが、トラヤヌス帝に上書して『この迷信は(キリスト教を)たゞに都會のみならず、村落にも田舎にも、擴まりたり』と云ふの止むを得ざりしによつても明である。

パウロは西に方向を轉じて、ミジア州より、スカマンデル河の溪谷に入り、雄大なるイダ山脈の鬱葱たる連山を見ながら海に出た。

彼はトロアス港、即ち、トロアデのアレキサンドリアに一まづ旅装をといた。こゝはスエトニウスによれば、ユリウス・セザルが、その發祥の地に戻る爲に、帝國の都を遷さうと計畫したと云ふ市である。『セザル傳。』セザルは、不朽の靈的ローマ帝國が、古代文明の母なる東邦より出現すべきを確信してゐたのだ。

トロアスに滞在してゐた間、パウロは、後に第三回傳導旅行に際して、其の家に外套を置き忘れたカルポと云ふギリシヤ人の許に宿つたのかも知れぬ。(註一)

此の地點から、彼は二の途の一を選むことを得た。或は、小アジア州の町々を経て、エフェゾ、ミレトに向ふか、或は、流に浮んでギリシヤに渡るかである。彼はとるべき途を示し給はんことを主に祈つた。さうして、異象の中に御告を得た。彼はある夜、夢に一人の人を見た。此の人は短い上衣を着、鍔の廣い帽子を被り、一見して、マケドニア人の風采をしてゐた。彼は乞ふが如く『マケドニアに渡りて

我等を救へ』と云つた。パウロは眼がさめてから、此の夢を伴侶の人々に話したがマケドニア人に布教すべくキリストの召したまふのであるとの解釋に、皆一致した。

これでもわかる通り、パウロは其の傳道旅行の行程については、豫め嚴重な計畫をたてゝゐなかつた。即ち、彼は道路の便宜に従ひ、成功の機會を窺ひ、ことに彼の前に行く、見えざる案内者の御蹤を慕つて進んだのである。

パウロがアンチオキアから連れて來た一名の同伴者が、使徒行録の中の『我等』と云ふ代名詞と共にトロアスに於て、物語の中に姿を現はしてくる。(註二)此の同伴者は、即ち『至愛なる醫者ルカ』(コロサイ書四ノ一四)で、パウロのローマに於る牢獄生活に至るまでの、忠實な友であつた人である。ルカはパウロに親炙すること長く従つてパウロの傳を草するに最も適任者となつた。何故、彼が物語の大部分中、影にかくれて、しかも時々『我等』なる代名詞を使用しつゝ之を裏切るかとの疑問は、到底とくによなき謎である。『我等』なる語は、パウロがトロアスを去る時に始めて現はれるが、しかし、その現はれ工合によつて、記者が以前からパウロに同伴してゐたと推定することが出来る。此の語は一頁の後に消えてなくなり、再び第二十章で、パウロがまたトロアスに行く時に現はれ、それからエルサレムへの途次、引つゞいて存在する。さうして、最後にローマへの航海、マルタ島附近に於る難船の物語に出て

くる。その状態は、恰も記者が、時々航海日記、即ち彼自身の當座ノートを利用して、しかも、これを充分に整理し、他の文獻と共に、融合させる暇のなかつたかのやうである。

トロアスの埠頭——いまだに階段が遺残してゐる柱廊の下——から、パウロの船はヨーロッパを征服しに錨を上げた。船は順風に追はれて走る。

たゞ一日にして、船はサモトラキア島の島蔭に來た。「註三」此の島の西北には、數條の溪谷に沿うてカピリーの神々の社があつた。こゝでは恐ろしい奥義授與式が行はれたのだ。パウロ及びその弟子等がもし此の事を思ひ浮べたならば、彼等は悪魔の姿を見たかのやうに、不快と憎惡との念に身ふるひをしたであらう。

次の日、ネアポリス港（今日のカヴァルラ）に安着して、一行は再び陸に上つた。ローマ國道、ヴィア・エニアシアは、アドリアチック海の沿岸にあるディラキウムに始り、イリ、クム、トラキア、マケドニアを貫通して、此の町に終つてゐた。

パウロはパンゲウス山の彼方で、凡そ三里半をへだつるフィリッピに向つた。道々、彼は、原始的で、信念深く剛直なるマケドニアの農夫牧人と知り合になつたであらう。ルナンに云せればマケドニア人は『小兒らしい素朴さを有して、福音を受くるに自然に適してゐた』相である「聖パウロ傳」しかし、舊慣

を忠實に墨守するかくの如き勞働者は、過去の風習に反し、且、超人的の理想の遵守を命ずる新宗教を歓迎する筈がない。福音の急速なる成長は、決して『人間的に避け難い事』ではなかつた。新しいキリスト教の原理が、古い神々の宗教、ことに所謂『密義教』との競争に直面して破れなかつた事は、むしろ不思議であつた。キリスト教の勝利を密義教によつて人心が準備されてゐたからだと解説する學者がある。しかし、密義教は、人々に、より高い道德と救靈との幻影を示し、且、祕密集會の魅惑を有して、むしろ、新宗教の成功を阻む原因、或は、その教義の墮落を誘ふべき理由となる筈であつたのである。マケドニア人が、オルフェウス教の中心たる數々の神殿を有し、サバジオス神を禮拜してゐた事が、十字架上のイエズスが、他の神々を追ひのけて、惡むべく卑しむべき外來神と見られない事に成功する原因となつたであらうか。

フィリッピは、アウグスト帝時代より、退役兵士の植民地となつてゐた。それ故、パウロはラテン語を話す人々の間で、彼の公民権を利用する事も出來たのだが、しかし、慣例によつて、まづイスラエル人の間に聽衆を求めた。

ユデア人は、淨めの式に水が必要な所から、河、又は海の近くに、靜な場所を選定して簡單な垣根を廻らし、これを祈禱所とする習慣があつた。かゝる野外の祈禱所を、プロシック (prosenché) と稱し

た。

安息日に、パウロは、シラとルカと共に、町を出で、ガンガス河の堤防の上を歩みながら、何處かに祈禱所らしいものはないかと探してみた。すると果して、其處に、名ばかりの園かきがあつて『神を恐るゝ人々』ことに婦人達が詩篇を唱へてゐた。パウロ等はその傍に坐して、やがて神の國について語つた。婦人の中に、小アジアのリヂア州なるチアチロ町の生れで、紅色染料を手廣く商賣してゐたルチアと云ふ人があつた。パウロの言を聞くや、彼女の心はその教に開け、單純な、不思議な歡喜にみたされた。彼女は『其の一家と共に』即ち、召使や奴隸等に至るまで、みな洗せられんことを願つた。洗禮が濟むと、彼女は使徒等に云つた。

『汝等、我を主に忠實なるものと思はゞ、我が家に入りて留れ』と。

パウロ等は一旦辭退したが、懇請を斥け難く遂にルチアの家に客となつた。

かくの如くにして、紅色染料商の店が、ヨーロッパに於る最初の教會となつた。紅色は光榮ある鮮血の色である、而してフィリッピに於て、パウロとシラとは、ヨーロッパの土地にて、最初の鮮血の獻物をキリストに奉ることゝなつた。

數日の後、彼等が再び祈禱所に赴かうとするその、途中で一人の若い女に出逢つたが、此の女は一行

を見るや否や、なかば狂亂した狀で兩手をうちふりつゝ

『此の人等は最高き神の僕にして、汝等に救靈の道を告ぐる者なり』と叫びだした。

狂氣じみたこの讚美に少からず迷惑して、一行は歩を早めて通りすぎたが、彼女は跡を追ひながら狂ひまはつた。彼女は千里眼であつた。遠距離のものを透視したり、將來を語つたりして、しかもその豫言は的中した。人々は彼女を『ピトン』に憑かれてゐると云つた。彼女は二重人格を有つてゐて、二様の音聲で物を云つた。數名の人々は『靈媒』を金儲けの種子として、これを利用して甘い汁を吸つてゐた。

其の後、パウロとシラが通りかゝる度毎に、彼女は同じやうに叫び出した。パウロは、遂に、彼女が惡魔憑きであつて、その惡魔が、曾てイエズスの前で『我、汝の誰なるかを知れり、即ち、神の聖なる者なり』(ルカ、四ノ三四)と云つたやうに、今や使徒等の使命を認つたのであると悟つた。

その叫聲に惱まされること一方ならず、且、惡魔の口より主の讚美を聞くの冒瀆を怒り、又、或は、少女が彼に救濟を請ひ求めてゐるのかも知れぬ、と思付いたパウロは、ある日、少女の顔をぢつと諦視し、凄まじい聲音で『イエズス・キリストの御名によりて、汝に此の女より出づる事を命ず』と命令した。

惡魔は即時に少女を離れたが、同時に少女も神通力を失つてしまつた。主人等は間もなくこれを發見した。少女は事の顛末を告げねばならなかつた。主人は大に怒つて、パウロとシラとを待伏せし、躍り

かいつて兩人を捉へ、罵詈譏を極めた上で、法廷に引きづつていつて、官吏に差出した。しかし、ローマの法律は、妖法を行ふ者を厳しく取締つてゐたから、彼等は眞の事情を訴へる事が出来ず、他に口實を設けねばならなかつた。

『此の人々はユデア人にして、我等の市中を亂し、ローマ人たる我等の受くべからず、行ふべからざる慣習を傳ふる者なり』と。

彼等はキリスト教徒とユデア教徒とを混同した、或は、わざと混同した眞似をしたのかも知れぬ。ローマ人はユデア人の宗教に深く干渉しなかつたが、しかし、東洋人が他國人にまで宗教を宣傳をするのを、一般にあまり喜ばなかつた。ローマ皇帝の中でも、特にクラウディオ帝は、自分が帝國の神々に忠實な事を誇つてゐた。

間もなく、群衆が法廷を取巻いて口々に使徒等が新しい迷信を教へてゐたと證言した。兩人の『犯罪』は最早隠すことが出来なくなつた。官吏等は被告を尋問する事さへしなかつた。パウロも、弟子も、沈黙を守つてゐたらしい。シラもパウロと等しく公民権を有してゐたから、シラのラテン風の別名、シルヴァヌスが其の證である。此の際、『我等はローマ公民なり』と云ふことも出来た筈であるが、兩人とも、むしろ、キリスト・イエズスに背り奉らんが爲に、甘して刑罰を受くるを欲したのである。

兩人は、やがて刑吏に引渡された。刑吏は兩人の繻袴を裂き、彼等の背中を所嫌はず笞で亂打し、皮肉悉く破れて鮮血淋漓たるに至つた。さうして、血まみれの裸體の兩人は牢舎に連れられ、深い窖の中に入れられた。彼等の兩脚は縛られたまゝで、大きな木製の桎をはめられてしまつた。

牢獄は、ローマの習慣通り、天井が低く、窓が一つもない、じめじめした極めて不潔な小房で、パウロとシラとは、恰も死刑の宣告を受けた者のやうに、其の中に抛り込まれたのだ。蜘蛛や、鼠や、其他の氣味の悪い動物がこそこそと周囲を這ひ廻つた。しかし、その眞夜中に、兩人の上や、或は、隣の監房に入れられてゐた他の囚人等が、不思議な聲音を聞きつけた。

窖の中に入れられた二人が、歌を唱つてゐるのである。きゝすますと、その聲は底力がある靜な祈禱で、一種、説明する事が出来ないやうな喜悅が、その中に流れてゐた。暗黒裡の二人は如何なる神を呼ぶのであらうか。此の時、突然、地がはげしく震れて、建物の基礎まで動揺した。すべての監房の扉は自然に開けて、あらゆる囚人の鎖は外れた。パウロもシラも、ひとりで足桎がゆるんで、其の場に立ち上つた。二人は階段の所まで出た。監房には、みな錠が下ろしてあつたので、看守は安心して自分の部屋に寝てゐたが、地鳴りと震動とにあわて、飛び起ると此の騒である。監房の扉があいてゐたので、彼は、囚人が逃げてしまつたと思込んで、絶望のあまり刀を抜いて自殺しようとした。すると、その傍

で、不意に『自害すな、我等、皆此處にあり』と喜ばしげに、力を込めて云つた者があつた。それはパウロだつた。

看守はすぐに松火をともし、牢獄の内部に馳せ入つてみると、鎖から放れた二人の囚人は両手を高くのべて祈禱をしてゐた。彼は、奇蹟が行はれたのだと知つて、戦きながら、神々を拜むかのやうに二人の脚下に平伏した。天來の光明が彼の心にさしたのである。さうして、意味もよく解らぬ、不思議な感情の命ずるがまゝに行動した。彼は兩人を監獄の外に導き出で、『君等よ、我何をなしてか救靈を得べき』とたづねた。

『主イエズスを信仰せよ、さらば、汝も家族も救靈を得べし』と使徒等は應へた。さうして、彼と其の一家の人々にむかつて、神の御言を説教した。

監獄の中庭に、泉があつた。看守は其の水でまだ血に塗れてゐた使徒等の手足を洗つた。パウロとシラとは、彼と、彼の妻と、子供等との額に、すべての罪の汚れを滌ぎ去る洗禮の水を注いだ。次に一同は階上につつて、食卓に對した。彼等は、必ずやこゝで、活けるパンを共に擘いたことであらう。看守も、一家の人々も、眞神を信じ得た幸福に酔つた。

しかしながら、看守に累を及ぼすを恐れて、聖徒等は監房にもどつた。しかし、前晚、パウロの友人等が、官吏に手を廻して置いたに相違ない。拂曉になると、官吏は監獄に刑吏を遣して『昨日の囚人等を救せ』と命令した。

看守は喜び勇んで兩人の囚人に此の吉報を齎して『今は出で、恙なく往け』と云つたが、パウロは刑吏に向つて『彼等は我々を公に鞭うたせ、ローマ公民たるものを裁判なくして監獄に入れたるに、今苟に我々を追出すか、然あるべからず、彼等來りて自ら我々を出すべし』と應へた。これは、夜中の奇蹟に續いての意外の驚愕であつた。

官吏等は二人のローマ公民を浮浪者の如く扱つた由を聽いて非常に恐れた。何故ならば、それはポリシア法令によれば、正に死に當る罪であつたからである。彼等は急いで、兩人の許にいつて謝罪した。さうして、パウロとシラとを出獄させ、同時に此の市を去らんことを乞うた。また再び騒動の起ることを危惧したので。

パウロとシラとは、即座に市を離れよとの請求には従はず、一旦、ルジアの家に戻り、兄弟等に別離を告げ、種々の訓戒を與へた上で、此の市を去つた。

パウロが、フィリッピで迫害を受けた事實に、疑を挿む歴史家は一人もない。使徒は其の後、フィリッピ人に書簡を贈つて『汝等の遇へる戦は、曾て我に於て見し所に等しきものなり』(フィリッピ書、一

「三〇」と云ひ、萬人が其の名譽を知れる、老兵士の如き口吻を洩らした。「註四」
しかし、地震、及び、奇蹟的に鐵鎖の解けた物語は、もとより主理主義的批評家の看過し得ざる所である。ウエルハウゼンは、眞夜中に、パウロと他の囚人等とは醒め、看守のみ眠つてゐたとは、什麻何事ぞと冷笑した。しかしながら、此の事はよく考へて見れば、決して不可能事ではない。足極をはめられて、じめ／＼した鋪石、或は泥の中に、鼠や蜘蛛と一緒に横つてゐる囚人にとつては、不安な眠は來ること遅く、又、少しの音響によつても夢は破られがちであつたであらう。又、ロアジーは、監獄の中心に泉があり得ることを忘れて、看守が使徒等の創を滌つた其の水で、使徒等は看守の一家族を洗したのかと訝つてゐる。

かくの如き兒戯に類する不審は、すこしく眞率な人ならば、直ちに是を解くであらう。しかし其の他にも不明の事がないでもない。一般の囚人は、鐵鎖の解けしを知り、最初の驚愕が過ぎ去つた後に、何をしたか。逃れんとして、或は、夢中になつて、周章で、外に飛び出さなかつたらうか。本文を見ると看守が一向彼等に無關心であつたやうである。又、パウロは暗黒の中で、看守が絶望のあまり自刃せんとするのをきゝつけ、それを止めて我等はみな此處にありと云つたが、どうしてさう云へたのだらうか。

記者は、極めて簡単に、重要事件のみを書いて、すべて他を略してゐるのである。天井の小窓から淡

い月光が牢獄内を照らしてゐたと假定しても、まだ充分に説明が出来ぬ。其處に或神祕的の分子、眼に見えざるものゝ存在を考へなければ謎はとけない。天使が居たのである。しかし、天使は、ペトロの禁錮の際に於る如く、パウロとシラとを外面に連れ出さない。彼等は、他の囚人等に劇しい驚怖を抱かせて、一人も逃亡の念を起さないやうにする。さうして、パウロは凡ゆる出來事を超自然的に知つたのだ。しかし、此の際の奇蹟には、むしろ、象徴的の意味があつたらしい。鐵鎖の解けたのは、信仰によつて人々が罪より解放せられる事を表はし、看守の突然の改宗は、神の下僕等の耐へ忍んだ苦痛の超自然的効果を證明する。洗禮、及び其の後の事柄は、ルジアが使徒等に邂逅して、直ちに、彼等を己が家に招いたのと同じの單純質朴の心のあらはれである。

前日には一言をも云はなかつたパウロが、傲然として刑吏に對して、そのローマ公民たるを告げたのを訝つてはならぬ。パウロは、型に嵌つた行動をせず、最大利益を目標とした。今日の東邦人、及び當時のローマの法官の氣風を識る人は容易く彼の行動を理解することが出来る。裁判官が、抵抗力の無い二人の旅人を亂暴に取扱ふのは、彼等にとつて、日常茶飯事にすぎない。その結果、如何なる責任を負はねばならぬかを知るに至つた時、彼等は、掌を反すが如く、追従これ足らざる態度を示したのである。パウロとシラとは、此の際、官吏を相手どつて、訴訟を提起することも出來た。しかし、謝罪によ

つて、それは解決された。パウロが謝罪を要求したのは、異邦人間に始めて生れた新教會が、不正の看過によつて躓かざらん爲であり、又、自己將來の布教の爲であつた。

今や、パウロは、自家の經驗によつて、ローマ人の殘忍酷薄なるを知るやうになつた。彼は、これから、敵意の人の地に行かうとしてゐる。その故に、彼は、此の際、身邊の危険に對する、一種の安全手形を得て置くのである。彼は、勿論、危急の場合に立ち至らねば、之を利用しない。彼が誇とする眞の國籍は、ヘブライ人たることである。しかし、ローマ公民たる事は何處に於ても忘れられたくない。

彼は、フィリッピに於て、刑吏の笞の下に、殉教の第一歩をふみだしたのである。『我は答るゝこと三度』と、彼は後日コリント人に書贈つて云ふ。フィリッピに於る笞刑は、此の三度の中で、使徒行録に記載されてゐる唯一回のものである。傳説によれば、彼は此の三度の他に、尙一度笞刑を受けた。即ちローマで斬首される前に答れたと、舊記にあるそれであるが、これが、ローマ公民たる彼の稱號に對する、最後の皮肉であつたのである。

(註一) 『汝來る時、我がトロアデにてカルボの家に遺置きたる上衣を持來れ』チモテオ後書、四ノ一三。

(註二) ルカはアンチオキアに生れた。ルカがパウロに此の市から同伴して來たと云ふ假説は、信を措くに足る説である。

(註三) 週回十里、山の高き千六百メートル。

(註四) 『汝等の知れるが如く、我等は曾てフィリッピに於て苦められ辱を受けた、勇しも云々』テサロニケ前書、二ノ二。

一、パウロとテサロニケのユデア人

パウロは、シラと其の他の伴侶等と共に、フィッピを後にして、共和黨員に對する勝利を記念する凱旋門をくゞつて、エニアシア街道を西に向つた。永遠の世界に憧憬れる使徒にとつては、既に八十八年の昔と過ぎ去つた此の戦争の紀念に對して、何等の感慨も湧かなかつた。真正の平和は、セザルの興ふることを得ざるもので、それは、彼が主イエズスの御名と共に人々に頌たんが爲に、齎してゆくそのものではないか。

彼等はストリモンの流に臨むアンフィポリス、ボルベ湖の傍なるアポロニアをすぎた。舗装された街道は、平野を貫き、灌木の密生する谷間を横ぎり、風雨に曝されて崩れかゝつた崖の下を廻つて通じてゐた。スタジラの町に差し掛る時、一行は、此處に生れたアリストテレスを想起したらうか。それは非常にありうべき事である。パウロは、この哲人の名を知り、また、その質料マテリアと形相フォルムとに關する學説を知つてゐたから。

一行はテサロニケの背後にある、今日では樹木が一本もなく、極めて殺風景な觀を呈する丘陵に上つ

た。(註一) 此處からは、一目で、市がよく見えた。その庭園も、寺院も、バジリカも、また兩側の峭角に抱かれてゐるやうなその港も。さうして、海の彼方には雪を戴くオリンポス山の嶺が――過去の神々の爲に空中の墳墓となるべき――雲間に聳えてゐた。

テサロニケは、當時、マケドニア州の首府で、ローマに隸屬してゐたものゝ、尙、自由市の面目を保有してゐた。テサロニケなる名稱は、アレキサンドル大王に次いで、マケドニアを統治したアンチパトロスの子、カッサンドロスの寵后にして、大王の義妹なりしテサロニケに因んで付けられたのだ。今日は、名をサロニカと變へたけれども、昔も今も、ありとあらゆる宗教、人種の相混交する都會で、地中海沿岸の最も賑かな港である。此の市での有力者は、何處でも同じやうに、富裕なギリシヤ人とユデア人とであつた。ユデア人の貧乏な多數の人達は、――今日もなほ然るが如く――小工業を営んでゐた。その職業の中には、機業もあつた。

パウロは、暫く此處に逗留しようとして考へて、まづ仕事を求めたが、それは容易く、必要以上に求め得られた。彼の家主は本名をイエズスと云ふユデア人だつたが、似通つたギリシヤの英雄の名をとつて、ヤソンと通稱してゐた。彼は、パウロがローマ書の末尾に書いたヤソンと同一人か、或は、その親戚だつたかも知れない(ローマ六ノ二一)

テサロニケのユデア人は、大きな會堂を有してゐた。(註二)パウロは、安息日に、此處に説教をしに行つた。彼は聖書の深義を説明し、豫言者の言を引用して、キリストの苦しみて、死者の中より復活すべかりし事、彼の眞のメシアたる事を證明した。イスラエル人の中にも、少數は信仰したが、パウロは一神を信するギリシヤ人、並に、貴婦人等の中に主として、歸依者を得た。

ピシディアのアンチオキアでもフィリッピでも、又、其の他の都會でも、最初に信仰するのは、無智な民衆ではない。キリストの教は、まづ教養ある異教徒、繊細な心をもつ上流の婦人等をひきつける。是等の人々は、心を傾けて愛し、愛さるゝ、幸福にして英雄的な生命の理想に憧憬^{あこが}れる。次で、彼等は、使徒の愛徳に勵まされ、使徒、及び、その教ふる神、イエズスの模範にならつて、貧者を顧み、貧者の裡にイエズス・キリストの御像を觀て、これに食を與へ、衣服を給し、次で、彼等の救靈の喜悅を頌つ。兄弟の中、最も貧しきものも、パンを擘く儀式に列り、すくなくも、此の時ばかりは、信者の間に貧富の區別がなくなつてしまふ。

美の女神、アフロディテに隨喜し、貨殖の慾望の裡に我を忘れる、賣女と商人とよりなる此の市で、淫蕩を却け、財貨を輕んずることを教へる事は、到底繼續的の成功を收め得ざる愚擧と云はねばならぬ。不思議なるは、かゝる環境の裡に於て、教會が續存し、聖徳に成長したことだつた。

コリントから贈られたテサロニケ前書は、使徒等の驚くべき活動、彼等が凌いだ迫害、その温情、他人を惹付ける能力を示す。

彼は、口を以つて福音を説教するに止まらず、生活を以つて之を示した。何人をも煩さざらん爲に、『晝夜』勞働し、機を織る小舎の中で、梭を動かしながら主の道を傳へた。質朴なる徒輩に解せられん爲には、平易なる言を用ゐた。彼は、また『恰も乳母が其の小兒を愛育するが如く』〔テサロニケ前書、二ノ七〕新しい信者を別々に教へた。彼は彼等の靈魂の爲には、己が生命をも敢て惜まざりし故に、彼等に何事をも告げ、又、彼等の信仰より何事をも期待するを得た。彼が語る言は彼自身のものに非ずして、神の御言であつた。彼は、或は、病者を醫し、或は、信者に與へらるゝ聖靈の賜によつて之を證した。

彼は、一同に迫害を凌ぐ用意をさせた。しかしながら、間もなく、彼自ら之に耐ゆるを知るの實例を示す機會が生じた。

不信のユデア人等が、彼の教を忌み、教會に多數の異邦人の集るを妬んで陰謀を廻らしたのだ。彼等は、波止場や廣場にゐる乞食や、仕事にあぶれた人足共、一言にして云へば、どの港町にも多い、喧嘩と騒動とが何よりも好きな無頼漢を煽り立て、ヤソンの家に殺到した。一同は、パウロとシラとチモ

テオトを探したけれども、幸にして、使徒等は其處に居合はせなかつた。ユデア人等はその理合せに、ヤソンと通りかゝりのキリスト信者數名を捉へて、市の吏員（これをポリタルクと云つた）の許に引きづつていつた。

『天下を覆したるかの人々、此處にも來れるを、ヤソンが承容れて、一同にイエズスと云ふ王、別になりと稱へ、セザルの勅令に逆ふなり』と暴徒等は口々に叫んだ。

ユデア人等は、パウロの弟子に對して、嘗てイエズスに用ゐて成功したと同一の讒言を構へ、彼等を皇帝の冒瀆者、反逆者なりと稱して、中央政府に迎合する地方吏員を恫喝したのである。ポリタルク等は非常に當惑した。滅ぶことなき王國の王、世界を審判せんが爲に來る勝利者とは、一體、何を意味する事なのか。

しかしながら、ヤソンは、平和を愛する正直な一市民として令名があつた。それに、また巧に辯解したので、ポリタルク等は、彼及び一同を放免した。それでも、念の爲に、保證金を差出させて置いた。これで、パウロの敵が、屏息する筈はない。躓きとなる彼の教を止めるには、彼を暗殺するに若くはない。その模様が見えたので、信者等はパウロに出發を請うた。パウロは悲哀に堪へなかつたが、ユデア人の頑な心を知る彼は、遂に弟子等の意に従つた。家の周圍を徘徊して、行動を窺ふ者があつたので

彼は數名の兄弟の護衛の下に、夜陰に乗じて、シラと共にテサロニケを立去つた。

彼等はウルダール河を渡つて、山路にさしかかつた。急湍を涉り、崎嶇たる間道を歩むこと二日にして、彼等が到着したのは、ベレアの高原である。ベレアは瀑布と森林とに富む高原で、數條の水道が横斷する平野を俯瞰する美しい土地である。

パウロの忍耐、執着力は、驚嘆に値する。ベレアでも、彼は、また會堂シナゴグに入つて、聖書の豫言がイエズスを示すことを告げた。今回は、徒勞でなかつた。異邦人、ことに、異教の墮落に愛想をつかしたギリシヤ貴婦人ばかりでなく、かなり多數の誠意あるユデア人が、彼の言を聽いて、虚心で豫言者を研究し、使徒の説が果して聖書と一致するかを調べた。エデア民族の盲目は、彼等が豫言を解せんと欲せず、苦楚を甜めて罪を贖ふメシアを承認せざるの一點に係つた。今日に於ても、またさうである。（註三）イザヤ、ザカリア、及び、その他が、明瞭に『悲哀の人』の姿を描いても、ラビ等は、これをイスラエルの受ける種々の災禍の象徴としか解さなかつた。

ベレアのユデア人の態度は、テサロニケに於るユデア人の頑固かたくを悲んだ。パウロの心を慰めた。しかしながら、幾程もなくして、テサロニケ人等は、ベレアに盛なキリスト教會が出來て、ユデア人も多數信者となつたと聞いて、急いで此の地に煽動者を送り、讒言蜚語を流布せしめたので、やがて騒擾が起り

さうな形勢となり、再び石刑、或は暗殺の危険がパウロの身に迫つた。それでベレアには、奇蹟的に始められた事業を繼續せしむべく、チモテオとシラとを残して、彼は單身此の地を逃れた。

彼にとつて最大の苦痛は、キリスト教徒、ことに洗禮を受けたユデア人等が、テサロニケに於て、ユデア教徒側の猛烈な迫害を受けてゐる事實だつた。彼が彼等に書贈つた書簡に、この憤激の情が、まざまざと現はれてゐる。

『ユデア人は、主イエズスをも、豫言者をも殺し、又我等を迫害して、いま尙神の御意に適はず、衆人に敵對し、我等が異邦人に救を得させんとて語る事を拒み、斯の如くにして常に己が罪を満たす、然れど神の御怒は彼等の上に及びて其の極に至れり。』〔テサロニケ前書、二ノ一五—一六〕

彼は、此の時、エルサレムの滅亡に始り、長い世紀の間に、頑な此の民族の上に落ちかゝる天罰の數を豫見したであらうか。彼は、勿論、イエズスの豫言を知つてゐた。しかし、今、彼の念頭にあつた罰は、靈的の排斥、即ち靈的事物に對する盲目——世の終に始めて除かるべき——であつたのである。

世の終は何時來るだらうか。彼は、衷心より、その日を望み、その日を待つてゐた。彼は、恐るべき明白さを以つて——彼もまたそれを體驗した所の——萬事の示さるべき日を、全世界の爲に冀つた。然り『主イエズス、其の能力の天使等を隨へて、天より顯れ給ふ時』は何時であらうか。此の時にこそ、

彼は『福音に従はざる人々に報い給ひ……其の聖徒によりて光榮を受け給ふべけれ。』〔テサロニケ後書一ノ八一—〇〕

キリスト再臨の時期について、パウロの知る所は、唯『主の日は夜中の盜人の如くに來るべき』〔テサロニケ前書、五ノ二〕事のみであつた。しかしながら、使徒時代の教會は、その日の前兆のいくつかを知つてゐた。それ故、パウロも、この大なる玄義に關して、教會の聖傳として聞いたところを教へた。

〔テサロニケ後書、二ノ一四〕

『まづ棄教の事來りて、『罪の人』即ち亡の子顯るゝに非ずば、主の日は來らじ、彼は反對して、一切の所謂神、又は禮拜物に激しく立逆らひ、神殿に坐して自ら神たるが如く己を示すにすら至るべし。』〔註四〕

此の『罪の人』の活動を止めてゐる目に見えぬものがある。しかし、止むる者は、一時の間取除かれ、不義者は不義の誑惑の爲に、一切の異能の業と偽の奇蹟とを以つて人々の前に出現すべく、主イエズスが再臨の光榮裡に彼を殺し給ふは此の時である。〔註五〕

パウロも初代のキリスト教徒の如く、又、聖シブリアン時代の人々の如く、〔註六〕又、その以後の人人の如く、キリストの再臨の間近き可能性を信じてゐた。ユデア人の記憶には、エヂプトで過越の夜に出現した死の天使のことがどうしても消えなかつた。彼等は、メシアもまた此の夜を選んで來り給ふだ

らうと考へてゐた。キリスト教徒も、ユデア人より此の期待をうけついで。聖イエロニムスによれば、『聖マテオ福音書二五ノ六についての註解』 過越祭の夜には、信者等は、教會に集つて、眞夜中までメシアの出現を待つてゐた。不熱心な信者は希望の代りに不安に戦慄した。苦惱と罪惡との終局、神の沈黙の終局、また地上の歡樂の終局は今宵に迫つたか。さうして、眞夜中が過ぎると、彼等は『まだだつた』と云ひ合つて、復活し給ひし主の祝日の爲に、楽しく準備をしだすのであつた相である。

迫害の最中に、正義者の勝利も程遠からじとの思想が、殉教者の忍耐力を増すことは非常であつた。裁判官は信者の審問に際して、皮肉の問をした。

『イエズスが復活したならば、公衆の前に出て來さうなものではないか』と。

『もう、ぢきに御歸りになる。あなたもそれを御覽になるでせうよ』

と、信者等は之に答へた。

聖ヨハネは『聖にして眞實にて在せる主よ、何時までか審判し給はずして、地に住める人々に我等が血の復讐を爲し給はざる』〔黙示録六ノ一〇〕と云ふ聲を聞いた。イエズスを證するが爲にその生命をすてた、すべての死者の叫聲であつた。

しかしながら、その中に、之に關する重大な謬説が信者の中に流布されて、心ある人の警戒を招くや

うになつた。饒舌な狂信家が、世の終は明日にも迫つたやうな事を云ひ觸らしたのだ。テサロニケでも、パウロの出發の後に、使徒の言、或は書簡として、種々の虚偽が云ひ傳へられた。〔テサロニケ後書、二ノ二〕怠惰漢は袖手して冗話むだばなしに時を費し、他人に食を乞ふに至つた世界が滅ぶならば、働いても何にならう』と云ひ合つた。幻影を見たとか、何とか稱するまやかし家が、益々、種々の噂を立てた。キリストの再臨の時期に生きてゐた者はどうなるだらう、死者に先立ちて神の國にはひれるであらうか。パウロは、後にコリントで、かくの如き人心の動搖を耳にして、急いでテサロニケ人に書簡を贈つて嘗て教へた眞理を想起させる。

しかしながら、今のところでは、彼はベレアを遁れてアデンスに到る途上に居る。彼は布教せんが爲にさまよふユデア人だ。彼の敵は、彼を、追ひ立て、追ひ立てするが、福音はそれで擴まる。テサロニケと、ベレアとの教會は滅びずして、新にコリント教會が生れ出ようとしてゐるのである。

海路をとつてアデンスに行つたか、否かは、明でない。彼は一旦海岸に出た。しかし、それからテッサリアの山路にかゝつたかも知れぬ。(註七)『パウロを案内せる人々はアデンスまで送り行きしが云々と本文にあるが、海路をとつたとすれば、此の語はすこし變である。』

私は、ある秋の日に、テルモピレを越えた。その時、私は、或は、使徒も、歴史的に有名な此の隘

路を通過したかも知れぬと思つて、無量の感慨に充たされた。この景色は、パウロの生涯の二方面を遺憾なく現はしてゐた。脚下には、夕暗の漂ふ黒い山の峽に、溪谷の河床がある。その上は、切り立つた絶壁、繁茂した灌木の叢で、その間を、燃えるやうに紅葉した樅樹が點綴してゐた。なほその上は、人の登攀を許さぬ、鷲の棲む高峰。私達の頭上を蓋ふ空は、海まで續いて蜜のやうに朗な美しい黄金色の薄暮であつた。一時的の劇しい闘争と、神の御許の平和との象徴。

(註一) 聖パウロがこゝに來た記念として、ギリシャ教の小禮拜堂が今でも残つてゐる。

(註二) 一九一七年の火災で焼けた下町の古い會堂の地下禮拜堂が、パウロが説教した地點にあつたと云はれてゐた。

(註三) ラグランジュ『ユデア人の間に於るメシア思想』二三六―二五一頁。

(註四) パウロはその名を云はぬが、これが即ちアンチキリストである。

(註五) 今、不義者の活動を止むるものは、テルチュリアンによれば、平和と秩序との支持者なるローマ帝國であり、ローマ帝國の滅亡後は、その繼承なるローマ教會であると。しかし、パウロは、ある人格者を意圖してゐるらしい。それ故、それは教會の保護者なる一個の大使、ことに聖ミカエルを指すのであらうと解する人がある。此の解釋は巧なりと雖も、單純に、吾人は謎を解く鍵を未だ所有しないと云ふに若かないであらう。

(註六) 聖シリアンの『殉教のすゝめ』の冒頭に次の語がある『迫害と苦楚とが汝等に及ぶ時、世の終とキリストとの再臨とはすでに近し』と。

(註七) これはクナウエンパウエルが使徒行録の註解中に主張した説である。

一一、アレオバグに於ける説教

若しも、パウロが、或人々の云ふが如く、ギリシャ崇拜家であつたならば、ギリシャの土を踏み、ギリシャ文化の中心に分け入つた時に、驚異と衷心の満足とを感じた筈である。しかし、實際はその正反対で、アデンスは非常に不快な市であつた。彼は悲み、且憤慨した。「使徒行録、一七ノ一六」

最初、パウロは單身敵地に居た。「テサロニケ前書、三ノ一、二」チモテオはベレアから間もなく此處に來たが、テサロニケの信者の受けつゝある迫害を聞いた時に、パウロは、『耐へ得ずして』再び弟子を最愛のテサロニケ人の許に遣はした。親しく彼の地に行けぬことを遺憾に思つたが、チモテオが彼等を慰め、希望と愛との一致を保つてくれるであらうと希望した。

パウロは、チモテオの歸還する迄は非常な不安、苦痛を経験した。彼は、自分で之を言明してゐる。それは何故であつたか。今や、パウロもすべての聖者等が、より深く謙遜し、より強く信頼する爲に通過せねばならぬ道程なる、かの倦怠、煩悶の危機に直面したのではあるまいか。彼の努力に對して、外觀的には、如何にもみじめな成果しか現れない。彼は、生れ落ちるや否や、充分に教育することも出來

ず、見棄てて來ねばならなかつた、各地の教會のことを思ひやつて戦慄した。彼はテサロニケ人に云ふ、

『或は、誘ふ者の汝等を誘ひて、我等が働の空しくならんことを恐れたり』と。「同上、三ノ五」

アデンスの孤獨は、一層彼の不安を増した。彼は、今までの何處の町に於てよりも、此の市で、異教の抵抗の重量を感じたのである。此處には無数の偶像が、恰もパンテオンの神殿に於るが如く、主人顔に、靜に、勝利を楽しんでゐた。城門よりセラミクスに到るまで、街といふ街、柱廊を云ふ柱廊には、あまたの神殿があり、數知れぬ神像があつた〔註一〕。ゼウス、パラス、バックス、アフロディテの數々。セラミクスの上には、ヘファイストス（ヴルカヌス）の神殿があり、其の傍に、フィディアスがパロスの大理石に彫刻した、アフロディテ・ウラニアの神殿があつた。『鼎の町』には、プラクシテレースのサティール神があつた。劇場の傍にもバックスがあつた。劇場からアクロポリスへ行く道には、エストラプス、デミス、ゲー・クロトロフォス、デメテール・クロエの神々が祀つてあつた。其の他、ありとあらゆる半神、英雄、象徴神があつて、アゴラには、諸國民中、アデンス人のみが拜禮した女神『愛憐』に獻げた祭壇もあつた。

此の女神に對してのみは、パウロにも、やや宥恕の感情が起つたかも知れぬ。しかし、それにしても

憐れなものだ。永遠の生命に近づき、あらゆる理念の源泉に於て活き、萬物『彼に於て造られ、彼の爲に造らるゝ』そのもの、神にして人なるキリストを、己がうちに宿し奉り得る時、一の理念に過ぎざるものを拜禮するのは、やはり、神に背いて暗に止るのである。

アデンス人が偽の神々の神話、彼等の華麗なる祭式にいたく愛着し、従つて改心の見込の稀薄なるにパウロは心をいためた。町々を練り歩く行列、盛大な祭典は、彼の眼の躓きであつた。フアリザイ派の嚴格なる一神教觀を有せし彼は、『偶像の影の影』だに憎み嫌つた。諸神像の曲線美は、虚偽を眞理に似たる外形に包むが故に、パウロは、一層之に對つて憤激した。彼にとつて被造物の美は、御父の像、眞の神、彼が、人としての御姿を仰ぎ見るの幸福を有した、キリストに肖奉る所にあるのみであつた。しかし一日、アレール港か、或はムニキア邊に行つてみた時に、彼は『知られざる神に』と銘が彫つてある石の祭壇を發見した。(註二) ギリシヤ人等は、ある不明の神の好感を買ふ爲に、其の名を知らざるにも拘らず、之に種々の物品を獻げて、誰も他人が注意しない、隠れた能方ちからの怒を和げようとしたのである。

パウロの考では、是等の偶像教徒は、知らず識らず、彼等の靈魂の要求する唯一の眞神を認めてゐるのだ。而して、彼等の靈魂の之を要求するは、神が彼等を招き給ふが故ではないか。

此の發見は、争闘の中での希望であつた。それまでにも、彼は、異教が、その最も純粹なる形式に於ては、天啓なくしては認るに難き不明なる、あるものに向ふ、一の運動なるを知つた。しかし、今や、彼は、混沌たるギリシヤ哲學の努力が、キリスト教的規範の下に、何を與へ得るかを悟るに至つた。ギリシヤの使命は明だ、即ち、人々を超感覺的の唯一神の追求に導く事である。彼はアデンスと和解することは出来なかつたが、しかし、希望を以つて説教した。

最初は、安息日毎に、會堂の中で語るだけであつた。アデンスのユデア人は、あまり勢力がなかつたから、例の騷擾を起すことは出来なかつた。しかし、説教の効果は、殆ど現はれなかつた。そこで、彼は、直接に異教徒に語りだした。

アデンスは、數世紀前より、あらゆる政治的野心と、藝術に於る創造力とを失ひ、過去の光榮の追憶に生きるだけで、當時は、ローマ帝國の青年子弟が、型通りの教養を完成する爲に來り學ぶ、大學の市となつてゐた。其處には文法學者、修辭學者、哲學者が居た。彼等、蓋然論者プロバビリスト、犬儒派、エピキユリアン、ストイック達は、頹敗的デカダントディレクタンティズムの環境の裡に仲よく棲んでゐて、あらゆる確信を冷笑するのが通であつたのである。

アデンス人は、今も昔も相變らず、陽氣な、好奇心のつよい、理解わかりの早い人達で、珍らしい出來事、

耳ざはりのよい言葉を好み、騷擾は起さないが、彌次馬的な気分があり、愛國者ではないが、稚氣に富んだ國自慢をする風があり、眞率な宗教心を有せずして、偶像に信心をこらす習慣がある。デモステネスの時代から、移りやすい、刺戟を好む彼等の精神は、絶えず『新しいもの』を探し求めた。暑い眞晝を除いては、閑暇で、饒舌を愛する市民等は——即ち、殆どすべての市民等は——柱廊の周圍や、又は市場ポリアに集つて、時間をつぶしてゐた。パウロは、この處で、哲學者や知名の人々と論じ合つた。彼は福音の教の精髓、イエズスと復活について説明した。彼の風采はもとより揚らない。しかしながら、彼の語る『御言』の能力により、又彼の教説の耳新らしい爲に、人々の注意が喚起されて、其處に一團の人が集まつた。通行人も『この轉人ササリテは何を云ふ者ぞ』と云つて問ひたゞした。

幸福な自尊心を有する學者等は、彼を、敷石の上を飛び、通行人の落した食物の屑をあさる小鳥、市場の殘物を拾つて糧とする浮浪人、あちらこちらで聞いて來たおどけ話を四辻でくり返す雄辯家の儔たぐひだと思つたのである。すると、他の者は

『彼は新しき鬼神デモン、イエズスとアナスターシスとを告ぐる者の如し』
と、さげすんだ口調で答へた。

アナスターシスとは復活の義である。アナスターシスを女神の名と解したのは、一の皮肉だつたであ

らうか。アデンス人は『淫猥』の女神に祭壇を備へたのだから、『復活』を女神の名と解したのは、まだよい方だつたかも知れない。

彼等は、短軀のユデアの説教家に冷笑を浴せかけたが、同時に彼を面白い奴だと思つた。彼等の耳に今迄知らぬ話や言葉を聞かせるので、よい慰みになると思つたのである。

彼等の一部の人は、もつと詳しく彼の話を聽かうと思つて、當座の思付きで、公衆の前での演説をすゝめた。さうして彼に熟考の時間を與へずに、無遠慮に彼を引張つて、アクロポリスの西の方に當るアレスの丘に連れていつた。此處は、語る方にも聽く方にも、極めて都合のよい場所であつた。〔註三〕パウロもこの不意の出來事を神の思召によるものと認め、且、人々の靈地と信じられてゐた此の場所で多神教の迷妄を破り、偶像に向つて『汝等は存在せず』と叫ぶ機會を捉へ得たことを思つて、敢て人々の情を拒まなかつた。〔註四〕

石磴の上から彼は、此の丘陵にある數々の神殿、脚下に横はるアデンス市、遠く連る山と海とを一目に見渡した。一團の聽衆は、彼に對して、思ひ思ひの姿勢で腰を下し、アレオパグの柱廊の壁から反射して來る彼の強い聲を聽いた。

彼の演説は、キリスト教とギリシヤ思想との最初の交渉を示すものとして極めて重大な意義があ

る。破壊的批評學者は、此の演説の史實性を、全然否定しようと努力した。しかし、ハルナックはその史實性を主張した。此の演説の内容を、使徒の根本的思想と照らし合せ、且、時と場合との要求を省る時に、我等は之を肯定せざるを得ないのである。

記者は勿論枝葉を省いて、大體の談話の筋を書いたのである。もしも、彼が修辭學者であつたならば歴史家リヴィウスのやうに、傳來の材料を利用して、模範的の説教を作り上げたことだつたらう。聴衆の一人が、パウロの言に甚だ感動して、大體の思想と二三の辭句とを記憶に止めたに相違ない。ルカは、此の人からか、然らずば、直接聖パウロから聞いた所を書き認したのである。

最初には、キリスト教の宣教師が、偶像禮拜を攻撃する度毎に、繰返へす常套の言がある。

唯一の眞の神が、宇宙とそこの中にある萬物を創造し給うた。彼は天地の主宰に在す、故に、彼は人の手にて造りし神殿に棲み給はず、(ステファノも、また嘗て是に似た論法を以つて、衆議所の議員を説破した)又、萬物に生命と呼吸とを與へ給ひし神は、何等かの乏しき所あるものゝ如く人手にて事へられるものではない。

パウロは教養あるギリシヤ人の解し易い理由をつらねて、彼が後にローマ書の冒頭に於て、更に新しく反覆すべき、偶像教の否定を試みた。ユデア人が偶像に對して發した古來の呪咀は、例へば詩篇百

十三にある。『彼等は口を有すれども物言はず、眼を有すれども見るることなし』と。又、智書は「二一三ノ一一一九、一五ノ一五一一九」

『自ら死すべきものにありながら、其の不義の手を以て死者を造る。彼は、己が拜禮する神々の嘗て活きたることなきに比べて、生ける者たるに於て勝れり。』

と、人に似たる神を造らんとする彫像家の愚を嘲笑する。

パウロは、偶像を攻撃するだけではない。神にして靈ならば、我等は如何に之を禮拜すべきか。我等は神が御自身に似せて造り給ひし、唯一の人より生れ出た。即ち、我等は『神の裔』である。蓋、彼にありてこそ、我等は、且活き、且働き、且存在する。神は彼の存在を知つて其の恩恵を讃へしめんとして、彼を索むる爲の徴を宇宙に置き給うた。パウロがこれより導き出す決論は、主がサマリアの女に曰うたが如く、御父を『靈と眞理とに於て禮拜する』事であらねばならぬ。

『蒙昧の時代』は知らずして、此の神を看過した。今や、彼は『人に向ひて、何處にても悉く改心すべしと命じ給ふ。蓋、日を期し給ひて、其の日、自ら立て給ひし一個の人、即ち、之を死者の中より復活せしめて、萬民の前に保證し給ひたる一人を以つて、世界を義に従ひて審かんとし給ふなり。』

これが、パウロの演説の大要であつた。吾人は、十九世紀間のキリスト教的教養を経て、其の意味を

解するに苦しめない。しかし、アデンス人にとつては、それは如何にも新奇な説で、承認するどころか其の眞意を捕捉するにも骨が折れた。

しかしながら、こゝに眞理を説く際に、彼が巧妙に、慎重に、聴衆の理解力に應じた言を用いた點は感嘆に餘りあると云はねばならぬ。彼の説教は『知られざる神』に始つて、恰も、アデンスに生れ出た思想を説明するかの如き概があつた。彼は、知らずして、眞の神を拜禮するのだと云つてアデンス人の敬虔を讃へた。彼の説教の中には、神を不可知の存在としてない。反つて、使徒は、彼等の理性の光明が、彼等を神の發見に導く筈だと云ふ。彼は、後年、『其の見得べからざる所、其の永遠の能力も、神性も、世界創造以來造られたる物によりて悟られ、明に見ゆ』(ローマ書一・二〇)と教へるが、此處にては、彼の語る土地から暗示された、一の思想を中心にして、歴史哲學的の考察が述べられるのである。彼は語る、『神は一人よりして、地の全面に住まふまでに人類を造りなし給ひ、季節と住居の界とを定め給へり』と。

眼下に横はるアティカを前にして、明に神殿を建てんが爲に準備されたアクロポリスに立ちて、パウロは、ヘラスも亦、ユデアの如く、獨立的の民族の將來の爲に豫定せられてゐると考へた。エルサレムを除けば、土地と其處に棲む國民の使命との間に存する豫定された階調を、此處よりもなほ明に示す土地は、他になかつたであらう。『神を金、或は銀、或は石、即ち、藝術及び人の想像によれる彫刻に似たるものと思ふべからず』。この感想を彼の裡に起させるに、此の地より尙適切な所は他になかつたであらう。彼はこれをパルテノン、パラス・クリスエレファンディネ、他のパラス——その前の聖燈火は一年に一度油を注ぐだけで燃えてゐた——アレオパグのアテーネ・アレイアの諸神像を前にして、セムネー(エリニエス、復讐の女神)の神殿、プルトー、ヘルメス及びゲアの傍近くで、憚ることなく云ひ放つた。

神々に對するかゝる不敬を、黙して聽いてゐたところから推測すれば、聴衆は主として哲學者や懷疑家等であつたに相違ない。パウロは、自分の相手が、何人なるかを知つてゐた。彼の説教には、國民的多神教の信仰を失つたストア哲學者の氣に入るやうな文句が混つてゐた。それは、かの有名な

『我等も亦彼が裔なり』

との句の引用でもわかる。この句は、シリシアの詩人アラストより出たのであるが、又、ストア哲學者クレアンテスが大神ゼウスに獻げた詩の中にも存する。『彼にありてこそ、我等は且活き、且動き、且存在するなれ』との一節も、また汎神論者なるストア哲學者の耳に、親しみ深いものであつた。但、パウロは、この言に新しい意味を含ませた。彼は、次で説明しようとして欲した眞理に向つて、聴衆の心を除

に導かんが爲に、之を利用したまでである。恰度、川を越えんとする人が、一株の樹幹をその上に渡すやうに、彼も、自分も聴衆との間に、折よく其處にあつた橋を架けたのである。哲學者等は、宇宙と神との關係を正しく説明しようとする苦心したが、一人としてその眞の解答を得たものはなかつた。神は人格神にして、すべての被造物を絶對的に超越し、無限に自由にして、しかも、被造物なる人間と全く一致し給ふ事、我等は神と相交りて神祕的生命の裡に眞に活き、眞に呼吸する事、此の神が死し、且、我等の爲に復活し給ひ、又、我等を活かさんが爲に肉となり給ふ事を、知る哲學者は、一人もゐなかつた。或る用語、或る思想が、たとひ異教的哲學の所産であつても、これをキリスト教的精神に従つて用ゐることは、必らずしも不可能でない。パウロは、少しも躊躇することなく、是等を利用した。(註五)

それならば、彼は、哲學者として、茲に語つたのか。否。彼は使徒、豫言者として、啓示による確信と權威とを以つて告げたのである。

『我、汝等が知らずして尊べる其の者をば、汝等に告げん』と。

彼は、最初の中は、唯一の眞神と其の性質とに關する基礎的眞理を、聴者の耳に容れ易からしめん爲に、『福音』なる文字を隠してゐたが、次に一轉して、己が信仰の大綱を示した。人類の歴史は、『蒙昧の時代』と智識の時代とに二大別することが出来る。智識の時代は、また悔悛の時代であらねばならぬ。

人々は審判者、生者と死者とを司る『一個の人』の來臨を準備するを要する。パウロがイエズスを單に『人』と呼んだのは、彼を『神人』と呼んで、反つて神話傳説的人物と混同されることを恐れたのであつた。しかしながら居並ぶ哲學者を前にして、パルテノンと神々の神殿とに對しつゝ、アデンスの過去を『蒙昧の時代』と斷じ、彼等の空虚しき光榮はすべて亡ぶべく、彼等は、塵埃の中に跪きて、『知らざりし事』を悔まねばならぬと宣言したのは、如何にも大膽不敵の振舞であつた。

かくの如き言が、反抗を惹起することなく、語り續けられ得る譯がない。使徒が、やがて、『死者の復活』を豫言するや、聴衆の中には、微笑、哄笑、侮蔑が表はれた。『我等、此の事につきて、復、汝に聞かん』と云ひ乍ら、座を離れた人も些くなかつた。ギリシヤ人は、ヘラクレス、アドニスアデニスの如き英雄の復活談を聞いてゐた。しかし、彼等の智識階級にとつては、かくの如き傳説は古くさい象徴的説話に過ぎなかつた。ソクラテスが嘗て靈魂の存在を説いたこともあるが、萬人の復活及び審判と云ふが如きは、愚にもつかぬ痴言である。

パウロは、もしも、押して其の儘説教を續ければ、反つてアデンス人の反感を増すだけであると見てとつて、その演説はこれで中止し、好意を有する人々だけに、十字架上のイエズスについて説明することにした。

アデンスでは、たゞ少數の弟子しか出なかつた。しかし、それが少數であつたゞけ、その記念は後世に残つた。その中にディオニジウスと云つて、元、アデンスの執政官で、アレオパグの判事の一人があつた。聖會の傳説によれば、この人がアデンスの最初の司教となつた。「註六」ダマリと云ふ婦人も、また洗禮を受けた。

アデンス人は、その後も、長いこと福音を受け容れなかつた。哲學的懷疑主義、異教の祭典や行列に對する興味、見慣れた神々の像に對する愛着、國家的虛榮心の如きものが、彼等を徒らに過去の世界に引きとめたのである。さうして、一旦、改宗してからも、一時的ではあつたが、第二世紀に於て、彼等の司教プリウスの殉教後、教會を離れて、再び異教の迷信に復歸したのも些くなかつた。「註七」

もしも、彼等が、パウロに型通りの演説をさせただけであつたならば、彼が此の地を通過したこともさほどに重大な記念を残さなかつたであらうが、しかし、實は、この説教は、使徒としての彼の生涯の最頂點をしるすものであつたのである。アクロポリスのパラス・アテーネは、その地上的の短き完成の理想を以つてして、古代の智慧を象徴する。パウロは此の女神の山に立つて、この智慧が虚無にあらずんば、少くとも不足なる事を證明した。女神は死に、神殿の聖燈火も消えねばならぬ。いまや、理性は信仰に照らされてのみ、生きつゞけようとするのである。

(註一) パウザニアス『ギリシャ旅行記』

(註二) ロアジーはパウザニアス(一ノ一四)によつて、正確な碑銘は『知られざる神々に』であつた筈だと主張した。しかしディオゲネス・ラエルシウスはエビメニデス傳(哲人列傳一ノ一〇)の中で人々が『知られざる神』に祭壇を獻げた事を記してゐる。又ノルデン(Agnostos Theos P. 30)はアラビア人の間にも『知られざる神』に獻げた石の祭壇があると云ふ。

(註三) 彼は、此の際、アレオパグの法廷で取調を受けたのではない。もつとも、この場所には一定の期日に法廷が開かれた。原文には、明瞭に『彼をアレスの丘に連行けり』とある。パウロも、裁判官に對するが如くならず、『アデンス人よ……』と彼の演説を始め、聽衆が彼の言に注意しないと、直ぐにそれを中止する。それでも、何人も敢て咎めない、又、裁判の宣告らしいものもない。

(註四) 『偶像は世に何物にもあらず。』コリント前書、八ノ四。

(註五) この事實からして、パウロの説は、ストア哲學者の説と異なる所がないと、ノルデンのやうに決論するのは詭辯である。又、ローマ書、一ノ三六に於て『萬事は彼に倚りて、彼を以つて、彼の爲にあり』と云つたのも、ストア哲學の眞似でない。マルクス・アウレリウスはパウロより遙に後に、殆ど同様な言を出したが、しかし、それは全然異なる思想を抱いて同一字を用ゐたのである。

(註六) ユウゼビウス『聖會史』四ノ二三。

(註七) チュシース『初代教會史』

アレオパグに於ける説教

一三、コリント教會

アデンスを去つた時のパウロは、空虚むなしかつた勞役の後の悲哀を感じてゐた。しかしながら、不撓不屈の希望の下に、彼はなほ西方に志して、コリントに向つた。彼がピレウスの港に出て海路をとつたか或はエリュウシス、メガラを経て、サロニカ灣を擁する狭い地峽を徒歩で行つたかは不明である。しかし、使徒行録のごく簡単な記事よりすれば、恐らく陸行したと推定する方が正しいであらう。

かの巨大なアクロコリントは、町に近づかぬうちに、左右の海の間、あたかも死火山の頂の如く、獨り高く聳えて見えた。

パウロはそれをよく識つてゐた。コリントの守護の女神、シプリス（アフロディテの神殿は、其の盛時には、一千を以つて算する尼僧に仕へられ、無数の巡禮が此の山を攀ぢて、邪淫の女神の婢女に祈禱を依頼したのである。パウロは、肉慾の惡魔を以つて、誤れる賢人の傲慢よりも與し易しと思つた。

アンチオキア及びテサロニケのやうに、コリントも、亦、よきパンな麵が膨らすことを得る混然たる群衆を有してゐた。嘗てムンミウスに滅されたコリントは、セザルによつて復興されて、當時アカイヤ州

の富裕な首府となつてゐた。コリントの港は二つあつて、一方はアジアに、他方はローマに向つて商品の取引をしてゐた。此處には、被解放者、クラチアトル劍士、水夫、ユデア人、職人、仲買人などが常に往來して、それに多數の（四十五萬人と稱せられる）奴隸も混つてゐた。コリントの赤銅は帝國の各地にさばかれ、又、ローマ人は、古代の遺跡や、古い墓などから發掘する器具に、鉅萬の値を投じて惜まなかつた。

〔ストラボ、一ノ八ノ七參照〕

抜目のない骨董商や、鑄造家は、それらを上手に眞似て偽物を作つた。

其處では、また賭博が流行して、放縱極まる樂天地が開けてゐた。數週間の中に、三人の大船主を破産させたと云つて誇つた、遊女の話も残つてゐる。繁華な港町をひかへたコリントは、まさに新世界を形成する種々の要素が、溶け合ひ、結びつく、大鑄金爐のやうなものであつた。

パウロは、此處に來ると、まづユデア人町を探した。彼は何處かで仕事を見付ける心算だつたのである。絶えず彼を導き給ふ天使は、彼と同職業、『天幕製造業者』アタイラの近頃新たに開かれた店頭に彼を連れて來た。アタイラはポント州生れのユデア人で、妻のプリスカ（又、プリシルラとも云ふ）と共に、クラウディオ帝の追放令發布までは、ローマに居住してゐた。その彼がコリントに移住して來たのは、次のやうな事情によるのである。クラウディオ帝は、元來、ユデア人に好意を寄せてゐたが、しかし、ある不明の原因で、ユデア人がローマで騷擾を醸した爲に、ユデア人に對して追放令を發した。ス

エトニウスによれば、騷擾はクレストスと云ふ者に關連してゐたと云ふ。恐らく會堂シナゴグとキリスト教徒との間の争論であつたであらう。(註一)しかし、實際は、ユデア人が非常に多數であつた爲に——ローマ市のみでも五萬乃至六萬人を算した——その全部をイタリーより追放する譯には行かず、單に、騷擾、及び、會堂に於る集會を禁じただけであつた。しかしながら、警察の干涉によつて、ユデア人の商賣が非常に妨げられるやうになつた。それで、アクィラは、家族を連れて、外國人が多數棲んでゐるコリント市に移つたのである。彼の仕事場と店とは、相當に大きかつたに相違ない。何故ならば、彼の家が間もなく、此の地の教會の中心となつたからである。

彼と妻のプリシラとは、既に洗禮を受けてゐたであらうか。使徒行録にも、パウロの書簡にも、徴すべき何等の手がかりがない。パウロの書簡には、ステファナ及びその家族がアカイア州の初穂であつて、(コリント前書一六ノ一五)彼が手づから洗したものであると記してある。(同上、一ノ一六)もし、アクィラ及びプリシラが、始めて邂逅した時に信者でなかつたならば、パウロは此の兩人をまづ洗すべき筈でなかつたらうか。

それはともかく、パウロは、すぐに兩人の家に寄寓して、仕事にありつく事が出来た。彼は、間もなく、その家で、人々の尊敬を受けるやうになつた。彼が彼等の靈魂を奪うたのは人を屈服せしむる人智の言に在らずして、聖靈及び大能を現はすにあつたのである。(同上、二ノ四)彼が天來の啓示を受けし人物なることは、何人にもわかつた。信仰、智識、豫言、人々の良心の洞察、奇蹟などの他に、彼の天よりの使命の證印として、劍の如く鋭くして、しかも創痕を痊す油の如く和やかなる涯なき愛徳が存在したから。

パウロは、貧しい職人として自己の生活を支へ、疲勞にもたゆまず、從順、忠實に働いた。しかし、彼は、喜悅を以つて容易く勞働し得るだけの健康を有してゐなかつた。彼の肉體に刺さつてゐた『棘』は、彼にとつて絶間ない苦痛の源であつた。(註二)コリントの夏はなかく忍びがたい。彼が後に『弱さ』(註三)と呼んだものは、彼を苦しめた熱病であつたであらう。

しかしながら、それにも拘らず、彼は、安息日毎に、會堂でキリストの福音を宣べて、改宗者を得てゐた。とかくする中に、シラとチモテオとが、マケドニア地方から此の地に來た。彼等が携へて來た義捐金、及び、コリントの最初の信者が差出した布教費によつて、使徒等は、傳道に専らたれることを得るやうになつた。しかし、例のユデア人の敵意も、また間もなく露になつて、パウロが彼等の前でイエズスの御名を云ふ度に、罵つたり、嘲つたりしだした。よつて、彼は是等、頑なる人々に對して、『外套の塵を拂ひ』『汝等の血は汝等の首に歸すべし、我は罪なし、今より異邦人に赴かんとす』

と云つて、彼等を見棄てた。

この言は『汝等は生命を受容れざる故に死すべし。なすべきことを盡したれば、我に罪なし』と云ふほどの意味である。

その後、彼は己に聽かんと欲する人々を『神を尊べる』チト・ユストと云ふ人の家に集めた。その家は恰度會堂の隣であつた。彼は、ユデア人の妨碍によつて、自分の仕事が此の地でも亂されるかと思つて戦慄いたと後に告白してゐる。しかし、或夜、異象の中に主の御言葉を聞いて心を安んじた。

『懼れずして語れ。黙すること勿れ。蓋し、我汝と共に在れば、汝に打蒐りて害する人あらじ。其はわが民となるもの此の市中に多ければなり。』と云ふのが、主の御告であつた。

その通り、コリントでは、彼の説教は、他の如何なる町に於てよりも、効果を擧げた。信者になつた人々の中には、町の有力者で、しかもパウロが見棄て、出て來た會堂シナゴグの司、クリスポと云ふイスラエル人さへあつた。

會堂の司と云ふのは、ユデア教の信仰を管理し、律法の實行を監視し、信者を教へ、集會を司會し、施物を保管する任務を有し、充分な収入もあり、ローマの法律により種々の特典をも認められてゐた。

此の職につく爲には、神學、法律、及び、醫學に關する六ヶ敷い試験を受けねばならなかつた。それ故クリスポ及びその一家の受洗は、今日で云へば、英國教會の監督がカトリックに歸正したと云ふほどの重要さを有する出來事であつたのだ。パウロも、この事を非常に喜んで、自ら彼に洗禮を授けた。「コリント前書一ノ一四」パウロは、ユデア人と常に衝突したが、彼等の救濟については、異邦人の救濟と同様に、絶えず關心してゐたのである。

かくの如くにして、一方にコリントに盛大な教會の基礎を築きながらも、彼はまた後方に殘した諸教會を忘れなかつた。テサロニケから此の地に來たチモテオは、喜ばしい音信をもたらした。「テサロニケ前書、三ノ六」

『チモテオ、汝等の許より我等が許に來りて、汝等の信仰と愛との喜ばしき音信を傳へ、又、汝等が常に我等に就きて善き記憶を有ち、我等を見ん事を望めるは、恰も我等が汝等を見ん事を望めるに等しとの福音を告げられたば、是によりて、兄弟等よ、我等は諸の憂苦と困難との中に在りながら、汝等に就きて、汝等の信仰を以つて慰を得たり』と。

しかしながら、テサロニケでは、教理の一點に關する劇しい論争が行はれてゐた。それは世界終末の奥義について、天啓を受けたと自稱する僞豫言者があつて、多數の信者を惑はしたからである。主が天

より再臨し給ふ時、當時生存する義人等が、まづ審判主を迎へんが爲に、雲に取り擧げられて、然る後に、死者は復活するのであらうか。主の再臨に先立つて死する者は、墳墓中の假睡と腐敗とを受けねばならないが、それは是等の人々が主の不興を蒙つてゐるからであらうか。復活、又は、審判に關するかの如き問題は、信者にとつて模糊として、其處には各人各様の空想を挿む餘地があつた。なほまた、パウロが決して口外しなかつたやうな、不用意極まる説を、パウロより出づるかの如く宣傳する者もあつた。自己の教説を變形されることは、使徒にとつて最も苦しい不斷の苦痛の一であつた。それ故、彼は、テサロニケ人の爲に口授した書簡の中で、再臨の日に於る生者と死者とに關する眞正の豫言を與へたのである。

『我等主の御言によりて汝等に告ぐ、主の再臨の時に生殘る我等は、永眠せし人々に先だつ事なかるべし。蓋し號令、大天使の聲、神の喇叭を合圖に、主自ら天より降り給ひ、キリストにある死者まづ復活すべし、次に生殘る我等は、彼等と共に雲に取擧げられて、空中にキリストを迎へ、かくて、何時も主と共にあるべし。』

『生殘る我等』の一句よりして、パウロが、恐らくはその晩にも、喇叭の響を聞き、雲に取擧げられることを期待してゐたかとも推測される。しかし、夕までの生命を確實に保證し得る者は一人もない事を

彼はよく知つてゐる。周圍のキリスト信者は、毎日死ぬ。又、彼はキリスト再臨の日に先だつ世界的の豫徴についても、無智ではなかつた。信者の棄教の事がある以前に、福音は地の涯にまで宣べ傳へられねばならぬ。期待は幾程つゞくであらうか。『主に於ては、一千年も一日の如し』〔ペトロ後書三ノ八〕御父のみ獨り之を知り給ふ、此の時期に關する錯覺が、どれ程危険であるかと云ふ事も、彼は知つてゐた。テサロニケに於る様に、怠惰漢は、再臨の時の近かるべきを口實として、無爲に日を送つてパンを乞ふかも知れぬ。眞面目に之を信する人も、何時まで遅延するかわからぬ此の日を待ち疲れてしまふかも知れぬ。『主の再臨の御約束は如何になりしや。我等の父の死してより、なほ萬事世界開關の時よりするが如く續きゆくなり。』と人々は語り合つた。〔ローマ聖クレメンスのコリント書簡第廿三〕されば、この『生殘る我等』とは、單に、キリスト再臨に際して生ける信者との義で、パウロ及び其の他の當時の信者がそれに當るかも知れぬが、又、他のものであるかも知れぬと云ふのが彼の考であつた。

彼は、信者等の此の無益なる不安を除くと共に、彼等に警戒を忘れさせなかつた。我等は日をも時をも知らないのだから、油斷してはならぬ。彼は、イエズスの十人の處女の譬を引用はしなかつたが、しかし主の教へ給うた通りに結論した。

彼の訓戒は、嚴格の中にも、初代キリスト教徒の特徴たる繊細な愛情に充たされてゐた。

『互に和合せよ、兄弟等よ、希くは沈着かざる人々を誡め、落膽せる者を慰め、弱き者を扶け、凡ての人に堪忍せよ。誰も人に對して、惡を以つて惡に報いざる事を心懸け、相互に、又、凡ての人に對して、何時も善き事を追求せよ。常に喜べ、絶えず祈れ、何事に於ても感謝し奉れ。是汝等一同に於てキリスト・イエズスに由れる神の御旨なればなり。靈を消すこと勿れ、豫言を輕んずること勿れ。何事をも試して善きものを守れ、一切の惡の類より遠ざかれ。願はくは平安の神御自ら、汝等を全く聖ならしめ給ひて、悉く汝等の精神、靈魂、身體を守り、我主イエズス・キリストの再臨の時、咎むべき所なからしめ給はん事を。汝等を召し給ひしものは眞實にて在せば、此の事をも爲し給ふべし。』

『兄弟等よ、我等の爲に祈れ。聖なる接吻を以つて、凡ての兄弟に宜しく傳へよ。』

是等の訓戒にも拘らず、なほ偽の豫言を語る者の跡が絶えなかつたから、彼は第二の書簡を裁して、もつと突込んでテサロニケ人の許に居た時に教へた事柄を、忘れたことを、劇しく批難した。彼は『亡の子』の來る事の必要なこと、既に活動を始めた『不義の奧義』について、晦澁な言語を用ゐて暗示する所があつた。彼が嘗て信者等に口傳した詳細な豫言は、わざと書簡の中に繰返すことを憚つた。彼は『主の日の近き』を以つて無爲の口實とした怠惰漢を叱責した。パウロ自身、晝夜勞働に従事する。彼は、信者等を神の御言で養つたのだから、彼等より扶養を受ける権利があつたのである。『穀を踏む牡

牛に口籠をはむべからず』と、モイゼは命令した。しかし、パウロは、自ら彼等の模範とならうと欲した。『人もし働く事を否まば亦食すべからず』これはイスラエルの最も特徴とする長所の一を表はす、極めてユデア的の諺である。ユデア人は、最も怠惰の誘惑の多い國々に於ても、常に勤勉力行し、現になほ驚くべき精力を示しつゝあるのである。

コリントでも、テサロニケに於ると同様に、聖徒等は、富者貴族たるよりも、寧ろ貧しく賤い人々であつた。パウロが

『汝等の召されし者を看よ、肉に由れる智者は多からず、有力者は多からず、貴き者は多からず』〔コリント前書一ノ二六〕

と云つたのは、寧ろ彼等に對する讚辭であつた。

會堂シナゴグの司クリスポ、有力者ステファナ、職人、小商人、小役人、貧しい婦女より奴隸に至るまでを、キリストに於て一のものとした愛徳の精神は、身分の懸隔した多くの男女を一時聖餐時に結合する異教の集會の眞似であつたらうか。否、すこしでも異教的外觀を有する事物は、偶像崇拜の傳染の危険ありとして、信者等に甚しく厭はれてゐたのだから、彼等が、取つて以つて範としたのは、決して異教の集會でない。〔ヂュシエーム『初代教會史』〕彼等が做つたのは、ユデア教の會堂の生活、即ち、その宗教的、

相互扶助的な組織であつたのである。キリスト教會も、會堂の如く、數名の指導者と教師を有し、祈禱會を開き、其處には、貧民の爲の義捐金箱があり、信者間の爭論を判く仲裁者があり、除名を要する際の判事があつた。然しながら教會と會堂とは、それを活す精神に於て異つてゐた。

既に我等はアンチオキアに於て、最初から種々の差異が教師等の中にあつたことを見た。即ち使徒、豫言者、教師がそれで、彼等は時と共に、漸次、特殊な一定の任務を帯びるやうになつた。

パウロは、絶對的の意味に於て使徒、即ち主より自ら遣はされた使者であつた。チモテオがパウロの命をうけて、テサロニケ人を訪問した時には、彼もまた使徒であつた。かくの如く、各教會に使徒、即ち他人の命を受けず、聖靈の導き給ふがまゝに活動する宣教師が居た。彼等は、超自然的賜によつて、己が使命を證した。時として、彼等が聖靈によつて、脱魂状態の裡に、神祕的な言葉をあやつることもあつた。しかし、彼等の主要な使命は、玄義を教へ、信者等を奨め、扶け慰める事にあつた。

豫言者は常に扶け、奨め、慰めた。彼等は又、同時に、ユデアの神殿に於る大司祭の如く、種々の祭典をも執行した。彼等は聖祭を獻げ、聖體を頒つ時に感謝の祈禱を誦へた。信者等は食物衣服、金錢の一部を割いて教會内に起居する彼等を支持した。

智識の賜を有し、人々に教へる事を以つて任とする教師等は、一定の教會に屬してゐた。後に使徒及

び豫言者に代つた司教、助祭等もさうであつた。

後にアンチオキアの聖イグナチオは司教は神の代理者で、その周圍にある長老會は恰もイエズスを繞る十二使徒のやうなものである。「聖イグナチオ『マグネシア人に贈る書簡』六」又、長老會の意志が司教の意志と調和せざるべからざること、立琴の調子が合はねばならないのと同じである。「同上、『エフェソ人に贈る書』四」と云つたが、この長老會も、また、一定の教會に附屬してゐた。

パウロがコリントの教會を建てた最初には、まだ規律も整つてゐなかつた。この教會は、若芽が萌え出したばかりの若々しい四月頃の木のやうなものであつた。すでに、すべての器官は、それに備つてゐたが、神の樹液はひとしく廻らずに、或枝は早く、或枝は遅く發芽したのである。パウロもそれを知つてゐた。それ故に、彼も『我は植ゑ、アポロは水灌げり、然れども發育を賜ひしは神なり』(コリント前書、三ノ六)と云ふのである。

げに驚異の時代よ。約束とあらゆる熱情の成長の時期よ。

その頃には、信者等が祈禱する爲に集合したのは、立派な教會堂の中になかつた。

彼等は、廣い部屋を有する兄弟の家に集るに過ぎなかつた。多く、二階の一室が祈禱室にあてられた。人々の信心の爲に聖畫、もしくは、象徴的の記章があつたかどうかは不明である。恐らくは偶像崇拜の

危険を悉く遠ざける爲に、ユデア教的杞憂より、すべての聖畫を避けたと見るべきであらう。天井からは、今日なほギリシャ教會、及び、回教寺院に見るやうに、あまたのランプが吊下げられてゐた。「使徒行録二〇ノ八参照」安息日が守られてゐた頃には、その前夜より次の日一日にかけ、又、後に日曜日が創造と復活との記念日として祝はれるやうになると、その一日、是等の夥しいランプが點火された。

會衆は、祈禱室に入ると、平伏して神を禮拜した。「コリント前書、一四ノ二五」パンを擘く前にも、人々は地に跪いた。しかし、一般には、起立して兩手を舉げて祈禱した。婦人等は、容姿を備へて禮拜に來たが、パウロは彼等に慎深き態度を要求した。(これは決してさう容易い事ではなかつた。)彼は彼女等に被衣ヴェストを用ゐることを命じ、華美な衣服、眞珠、黄金の髪飾を禁じ、特に、教會の中で立つて説教することに反對した。

初代の信者の集會は、今日の教會の儀式のやうに、整然たる秩序を以つて行はれなかつた。師が舊約聖書の一部、若くは、後には『使徒等の回顧録』(福音書の事)を讀んでゐるうちに、屢々突然起立して、豫言者の靈感に充たされて、或一語の隠れた意味について話したし、或は『他國語』を語る者もあつた。この『言語の賜』は、熱愛の叫聲となり、歌のやうな祈となり、當人にも意味の解らぬ連続せぬ言葉の響となつたりした。

規律を愛し、實際的精神に富むパウロは、『言語の賜』をあまり重要視しなかつた。

『他國語を語る者は己が徳を立つれど、豫言する者は神の教會の徳を立つ。我は、汝等が皆他國語を語る事を欲すれども、豫言する事に於ては尙切なり。……他國語を語る人は、亦、通譯する事をも祈るべし。……然らば之を如何にすべき、我は靈を以つて祈り、又、智慧を以つて祈らん。靈を以つて謳ひ、又、智慧を以つて謳はん。汝もし靈のみを以つて祝せば、常人を代表する人、如何ぞ汝の祝言に答へてアメンと唱へんや、其は汝の何を言へるかを知らざればなり。……我は汝等一同よりも、多く他國語を語る事を、我、神に感謝し奉る。されど、教會に於て、他國語にて一萬の言を語るよりは、他の人を教へん爲に、我智慧を以つて五の言を語る事を好む。』(コリント前書一四ノ二一—二〇)(註四)

パウロは、彼等の振舞を、子供らしいと責めた。彼等の信仰より湧く喜悅は、彼等を驅つて、子供らしい無邪氣な行動をとらせたのである『言語の賜』より生ずる歌謠的の叫も、それが多くなれば無意味不可解の叫喚となる。もし未知の人、若くは未信者が其處にはひつて來たならば『狂へる者』の集會と感ずるであらう。(同上—四ノ二三) 東教會の禮拜式は、今日なほ、幾分かこの饒舌の名残を止め、司祭も信者等も、非常に口速に祈禱を唱へるので、一々の文句の意味を考へることが困難な程である。その代り、彼等は初代的信者の變通自在な即席の自由をも失はず、司祭は神に對し又は會衆に對して、自由

に問答する。このことは、最早、西のローマ教會では到底許容されぬ事柄である。

されば、パウロがコリント人に、

『他國語を語る人あらば、二人、多くとも三人、順次に語るべし……豫言者は二人或は三人言ひて、他の人は判断すべし。若し坐せる者にして黙示を蒙る人あらば、前者は黙すべし……蓋、神は争の神にあらずして平和の神にて在す』(同上二四ノ二八一三三)

と云つたのは、西教會の精神を示したのであつた。

信者等の敬虔な心境は、自然に『靈的の詩、讚美歌、歌』(コロサイ書三ノ一六)となつて、司祭が會衆を代表して祈る間に流れ出した。祭式の際の祈願が如何なるものであつたかと云ふ事は、ローマのクレメンヌ教皇がコリント人に與へた書簡、若しくは『十二使徒の教』(ディダケ)と云ふもつと古い文書に現はれる所を以つて、その一般を窺ふ事が出来る。

われら、主に感謝し奉る、聖き御父よ、主の聖なる御名のために。

主はこれを我等が胸に(幕屋の中に於るが如く)宿し給ひて、
智識と信仰と不死の生命とを賜ひぬ。

主はこれを御子イエズスによりて我等に示し給ひぬ。

とこしなへの榮光ぞ主にあれかし。

よろづよくし給ふ御主よ、

主は天地を御名の榮光のために造り給ひ、

これを享くる人々の主を讚へ奉らんが爲に、

凡ゆる人に食物と飲料(のみもの)とをそなへ給ふ。

されど我等には、御僕(御子)によりて、

靈の食物、飲料と終なき生命とを與へ給ひぬ。

われら主の全能を讚美し、主に感謝し奉る。

聖なるものとなし給ひし教會を、願はくば四方より集へ給へ、

主の用意し給ひし御國のうちに。

主の聖寵の日來りて、この世はすぎ去れよかし。

ダヴィドの神にホザンナ、

聖なるものあらば、とく來れ、

聖ならざるものは、くい改めよ。

マラン・アタ。アメン。

この祈禱の根本は、イスラエルの祭式に存する神の讚美であるが、しかし古い祭式の中に、新しい非ユデア教的分子が加はつて、本質的にそれを變へてゐる。それはキリストによる救済の信條であり、又あたかも丘陵のあちこちに散在する麥畑の麥が、打たれ、碾かれ、捏ねられて一塊のパンとなるやうに、或は、あまたの葡萄の實が踏まれて葡萄酒となるやうに、神の御子が御國のうちに集へ給ふべき、聖にして一なる教會の信條であつた。

豫言者が、祭壇に對して、手にパンと聖爵とをとり、之を祝福し、主の御言を繰返して『是は汝等の爲に付さるべき我體なり、汝等我紀念として之を爲せ……此の杯は我血に於る新約なり、飲む度毎に汝等我紀念として之を爲せ』と唱へる時には、パンと葡萄との象徴は、神聖なるキリストの血肉と變つた。

長い感謝の祈禱が之に次いだ。この祈禱はユッカリスチアと呼ばれ、最初は即席に作られた自由な祈であつた。(註五)

この祭式は、キリストの最終の晩餐の反覆であつたから、信者等も聖體を拜領する前に、一緒に夕食を食べた。此の儀式的晩餐は神秘的にアガベと呼ばれた。アガベとは愛の義で、アガベ、即ち、愛餐は聖體拜領の序曲であつた。やゝ後になると聖體拜領は愛餐と分離され、次で早朝の行事となり、日出前に営まれるやうになつた。(註六)第二世紀の中頃にユスチンは、此の祭式について下の如く記した。其の頃には、未だミサなる名稱が出来てゐなかつたのである。

『祈禱が終ると、我等は、平和の接吻を交はす。次で司會者に、パンと、水を割つた葡萄酒の杯とが渡される。司會者は之を受け、御子及び聖靈の御名によつて神を讚美する。次で、彼は、神より受け奉つた一切の恩恵について、長いユッカリスチアの祈禱を獻げる。會衆は異口同音にアメンと呼ぶ。その後、執事は、聖別されたパンと、水を割つた葡萄酒を頒ち、又、不參者の許に之を届ける。〔第一護教篇六五〕現代の教會では、信者等は個人個人が各別に聖體を拜領し、各別に祈禱する。それ故、使徒時代にこの祭式に伴うた質朴な平和と喜悅との空氣は、其處に見られない。初代キリスト教徒は、彼等は聖體拜領の際に、相互に愛し、又相共にキリストを愛することによつて、キリストの愛が著しく深くなりまさ

ることを感じた。愛そのものに在す御者に於て、信者等が互に相愛することの單純な平和な幸福は、パウロのやうな使徒の熱誠にたすけられて、更に一段の増加を見た。しかしながら、彼等と雖も、種々の偏見や惡癖をもつて、外から教會に這入つて來たものである。洗禮も古き人を滅すものではない。然らずんば、聖徳もさほど尊むに足らないであらう。教會の信者の中にも、黨派心、抗爭心、傲慢、憎惡、慾情等がやはり存在してゐた。

彼等も身分に應じて異なる團體グループを作り上げた。貧乏人が毎日の食事にも窮してゐる際に、金持は珍味を滿たし辨當をもつて來た。彼等は滿腹し、酩酊してゐた。「コリント前書一ノ二二」さうして、聖祭が濟むか濟まぬうちに、早くも利益と情慾との世界に戻り、種々の汚行に汚れながら、自ら潔きもの、完全なるものと信じてゐた。高慢は昔からコリント人の一番悪い性癖で、彼等のアコロコリントの聳え立つ姿に、今に至るまで残つてゐる。(註七)されば、新信者の情熱が冷めるにつれ、パウロが此の市を去つた後に、不思議にも離教とまでにはならなかつたが、多くの分裂、不和が信者の間に生じたのである。

パウロは、コリントの教會をたて、信者を訓練する爲に八月を用ゐたが、恐らくは、その間にアカヤ州の他の都市をも巡回したことであらう。彼がこの際、イルリコ州にまでも傳道したか否かは不明だが、多分其處までいつたものと思はれる。何故ならば、コリントは、此の山國の入口であるし、又彼が、

イルリコを、自分が福音を傳へた國々の涯限として述べてゐるからである。(註八)

しかしながら彼がコリントに滞在してゐた間に嘗めた苦痛は新信者からではなく、ユデア人から來たものであつた。彼等は、使徒の傳道を以つて、ユデア人の傳統、希望、生命を破壊するものと考へたから、背教者としてパウロを憎むのも、無理はなかつた。しかし、この度は、彼等は自ら手を下してパウロを殺さうとせず、ローマの官憲をして彼を迫害せしめんとした。

ある日、彼が道傍で説教してゐた時、一團の暴徒は彼を襲撃して、總督の裁判所に連れていつた『此の人、律法に反して、神を尊ぶ事を人に勧む』と云ふのが、暴行の口實であつた。

パウロがユデアの律法に背く教を説くのは、ローマ皇帝に對する不敬であると云ふ論法である。ローマ人は、イスラエル人に信仰の自由を保證してゐたのだから、彼等の信仰を妨碍するのは、同時にローマの法律に反することであり、ローマの神々を蔑にすることである。

これが原告の中分だつた。總督のガルリオはセネカの兄弟で、教養のある貴族、正しい司法官として自己の職務と哲人の自由主義とを調和させようと苦心する一人であつた。セネカは、彼の友愛に富める事、母に對する孝行を讃へてゐる。彼は巧に官途に立身した。しかしながら、阿諛追隨を嫌惡すること甚しく、一本調子の眞直な所がその特徴であつた。彼は哲人の平和を愛し、ユデア人とその絶間なき口

論、些細な信心に關する喧嘩沙汰とを輕蔑してゐた。

見ると、パウロの敵は、激昂して聲高に罵つてゐる。パウロも、また、口を開いて辯駁しようとしてゐる。彼はまたかと思つた。この喧嘩は管轄違ひだ。それで、手をふつて、忙しく中止を命じた。

『ユデア人よ、不正の事、極惡の事ならば、我が汝等に聽くは素より道理なれど、もし教の名義と汝等の律法とに關する問題ならば、汝等自ら之を視よ、我は斯る事の審判者となるを好まず』

さう云つて、刑吏に手眞似して、ユデア人を追ひ出させた。パウロは無事に逃れた。そればかりではない。彼の爲に滑稽な復讐が行はれた。

商賣上、若しくは宗教上の理由でユデア人に對して、非常な反感を抱いてゐたギリシヤ人が其處に待ち伏せをしてゐたのである。ユデア人が法廷から追ひ出されたのを見ると、彼等は手に手に棍棒をとつて、刑吏に加勢し、たうとう會堂の司ソステネスを捕へて打擲した。ガルリオは知らぬ振をしてゐた。賤民共の騷擾などには、何の興味も有たなかつたからである。

以上の出來事は、迫害に終始したパウロの一生涯の中で、喜劇に終つた唯一の物語である。この後、パウロは、ガルリオと何等かの交渉を有したであらうか。又、セネカが、ガルリオを通じて、使徒の噂を聞いたであらうか。是等は、到底解く事の出來ぬ疑問である。

パウロはアカヤ州に定住して、コリント教會を發展させることも出來た。しかし、彼の使命は常に前進することなのだ。彼自身は、なほ西方に向つて、征服の歩を續けたかつたであらう。しかし、神の靈は、彼を再び小アジアに呼び戻し給うた。嘗て彼が建設した諸教會は、彼の訪問を要求してゐた。彼は是等の諸教會の上、並に、これから彼が建つべきエフェゾ教會の上に、後にヨハネが人の子を廻る黄金の燭臺として象徴する光榮の輝を看取した。

(註一) スエトニウスは、この争論の原因がクリスト即ちキリストに關するものであると聽いて、これが現在ローマに居住した暴徒の名であると考へたのであらう。

(註二) コリント後書、一ノ七。普通『棘』と譯される『スコロプス』と云ふ字は、現代の進歩した外科ならば、容易に取り除くことを得る程度の、ありふれた、痛い、けれども、一寸した病氣を指すものと思はれる。

(註三) コリント前書、二ノ三『汝等の中に在りて、弱くして、且懼れ、且大に慄く者なりき。』コリント前書一四ノ二—二〇。

(註四) 豫言者ダニエルも幻影を見る際には理解を要する事を説いた。

(註五) ユウガリスチアとは、時として聖別された聖體及び聖血をさし、時として聖體拜領をさし、時として本文の如く、聖別後の感謝の祈禱をさした語である。

コリント教會

(註六) プリヌスがキリスト信者に關してトラヤヌス帝に上奏した書簡參照。

(註七) この市がムンシウスに滅されたのも、市民が城壁の上から、ローマの使節に悪口雜言を浴せて汚物を投げ付けたからであつた。

(註八) 『エルサレムよりイルリコ州に至るまでの地方を廻りてキリストの福音を滿たせり』ローマ書、一五ノ一九。

一四。エフェゾの騷擾

パウロは、アジアに向つてのコリントの海港なる、ケンクレから出帆した。此の度は、シラとルカとは一行に加はらず、その代りに、アクイラ、プリスカ、及び、恐らくはその一家の人々がパウロに同行した。天幕製造業の此の一家が、コリントの店をたゞんで、エフェゾに轉居しようと決心したのは、單にパウロについて行きたかつたばかりからだらうか。それについて、確實なことはわからないが、多分その爲であつたらしい。かくの如き職業は、材料も仕事も極めて簡單で何處にいつても成功する見込があつた。このアクイラの決心は、パウロが彼の上に有してゐた魅力の、如何程なるかを示すものである。それ以上に、この一家族が彼の使徒的生涯の運命を願つて到つた、特殊の理由を穿鑿するのは無益である。

パウロは、乗船する前に、我等がその理由を知る能はざる、あの誓願の徴として、頭髮を剃つた。このユデア教的信心は彼の親近の人々をまで驚かせた。ユデア人は、生命の危険、その他、非常な災厄を逃れた時に、神に感謝する爲に、このやうな苦業の誓願をたて、ある一定期間葡萄酒を飲まず、頭髮を

刺る習慣があつた。パウロの此の行爲は、彼が無理解な狂信者ファンナックならざりし證據の一である。故國の傳統が、彼の『福音』と矛盾しない場合には、彼はかくの如く、自發的に、ユデア教的信心を行つた。今回の誓願は、後のナジル人の誓願のやうな、單なる御附合の業と解することを得ない。

彼は、エフェゾまで海路をとつた。エフェゾは、カイストロス河の出口にあつて、この河によつて遠淺の海につゞいてゐた。パウロは此の市に、その友アクィラとプリスカとを残して置いた。彼の教を好奇心で聽かうとするユデア人等は、彼を停めようとしたけれども、彼はエルサレムに上る心算だと云つて、更に旅路をつゞけた。しかし、果してこの豫定通り、彼がエルサレム巡禮を遂げたか否かはよくわからない。彼はカイザリアに至り、其處からアンチオキア、タルソを経て、タウルス山を越え、再びフリジア、ガラチア地方の教會を訪ねた。

そこにはユデア主義の説教者がアンチオキアから(恐らく)來て、ガラチア人の許で彼が築き上げた事業を破壊してゐたことを、パウロは知つてゐた。彼等によれば、パウロは眞の使徒ではない。彼は十二使徒の如く活ける救主より、すべての眞理を啓示されなかつた。如何なる權ありてか、彼は不可侵の遺産なる律法を廢しようとしたが、異邦人は、イスラエルの救済に與ることなく、獨立して救はるゝを得るか。救済の徴、靈の尊貴の保證は割禮である。パウロは彼等の許で之を禁じたけれども、チモテオ

に割禮を受けさせて、他所では之を承認したではないか。かくの如く、人に阿る爲に、彼はその福音を變じてゐるのだ。

パウロは、ガラチア人の心に、義の正しい觀念、十字架の眞の意味を悟らせる必要を、切に感じた。彼は、かくして彼等の許に到る前に、憤激と不安との最初の感情の裡に、一書を裁して彼等に贈つた。それは、紀元五三年若くは五四年、エフェゾからであつたらしい。

此の書簡は、恰も、父が不従順の子に送るやうな訓戒で、始つてゐる。

『我等にまれ、天よりの使にまれ、我等が汝等に宣べし所に反して福音を宣ぶるならば誚はれよかし。』彼の福音は人よりのものでなく、イエズス・キリストより受け奉つたものである。何故ならば神が御子によつて啓示を賜ふまで、彼が何人にも超えて、ファリサイの傳統を忠實に守つてゐたと云ふ事は彼等も知る所である。

他の使徒等も、彼の使命を承認した。しかし、彼等が承認した爲に、それが眞正になつたのではない。この使命は、疑ふべからざる啓示より生じたのである。さうして、教會の『柱』なるヤコボ、ケファ、ヨハネは、彼とバルナバとに異邦人の傳道を委託した。

果して彼は人に阿らんとする者乎。否、その反證は、彼が衆人の前にてペトロの舉動に關しては意見

を述べたことでも解る。彼は、たゞ十字架につけられ給ひしイエズスを見る。彼も、イエズスと共に、十字架につけられた者である。義の爲に律法が足りるならば、キリストの死は無益である。

然らば、律法の價値は如何に。汝等は靈の賜を受けし後、再び肉的生活の中に墮せんとするか、汝等がアブラハムの子孫たるは、信仰によるので、割禮によるのではない。アブラハムが義とせられたのは割禮以前である。割禮が彼を義としたのではない。

義とせらるゝことは、約束より來り、律法より來るのではない。律法は一の契約である。契約は、契約者の一方が之を破るか、又は廢棄するならば、それで終である。しかし、約束は神のみより來り、廢せらるゝことがない。

律法は小兒の教師であつた。されど満期の時至りて、神は、御子を、女よりなりたる者、律法の下に生りたる者として、奴隷の許に遣はし給ひ、かくて、彼等は、キリストによりて養子となり、世嗣となつた。

パウロは、彼とよきガラチア人との間に結ばれた愛の所縁を回顧して、感慨に堪へないやうである。『汝等は我を神の使の如く、イエズス・キリストの如くにさへ承けたりき……我汝等に眞を語りて汝等の敵となりたるか……我小子よ、汝等の中にキリストの形造られ給ふまでは、我汝等の爲に再び陣痛に

遇へり。……我は汝等につき當惑しつゝあり。』

彼は、次でサラとアガルとの前表に託して、救主の前後に於ける、異なる人類の状態について、更に明瞭に説明する。律法の象徴なるアガルは、奴隷の子の母であつた。サラは、教會の如く、自由なる人類を生んだ。我等は奴隷の子を追ひ、約束に順ひて、自由の子、光明の子として生きねばならぬ。

『毅然として再び奴隷の軛に制せらるゝこと勿れ。さて我パウロ汝等に斷言す、もし割禮を受けなば、キリスト聊も汝等に益あらざるべし。』

この點について律法を守る者は、律法の全體を守るを約するのである。何故ならば、割禮は律法の要約であるから。

パウロ自身割禮を教へた、と主張する者がある。もしさうならば、彼がユデア人より受けつゝある迫害はどう云ふ譯か。『汝等を惑はす人々の（シベール女神の祭司の如く）全く截除かれんことを（闖者ともならんことを）』

『靈に従ひて歩め、さらば肉の慾を行ふまじ。……靈の好果は、愛、喜、平安、堪忍温良等なり。……汝等五の荷を負へ。……價値あるは割禮にあらず無割禮にあらず。今より後誰も我を煩はすべからず、そは我主イエズスの傷痕を身に負へばなり。』

この猛烈な訓戒が、ガラチア人の誤れる信心を匡正し得たかは疑問である。彼のガラチア行さへ、なほ全くユデア主義者の宣傳を弾壓しつくすには至らなかつた。しかしながら、彼は、教會の大原理となるべき、信仰による救済の一點を確立し、その書簡は靈感、論理、他人を征服する情熱、愛徳のすぐれたるドキュメントとして輝くのである。

彼は幾程もなく、ガラチアからエフェゾに歸り、此處を當分自分の傳道の中心とした。

エフェゾはタルソやアンチオキアに比すれば、ヨーロッパに近いだけ歐亞兩大陸の諸教會の相交通し相結合する中心點であつた。實際此の都市には、地中海を回るあらゆる人種が住んでゐた。此處の壯嚴雄大なるアルテミスの神殿は、諸方よりの巡禮の參拜地であつた。このアルテミスは、ギリシヤのアルテミスと全く相異なる起源を有し、最初は天から落下した一個の隕石を祀つたもので、人の形態を有せざる一の星神にすぎなかつたが、しかし、其の中に肥沃なる大地の象徴、人類と獸類との母なる無数の乳房を有するアルテミス女神となつたのである。

今日、此の神殿は、僅かに、痕跡を止めてゐるにすぎないけれども、其の他の劇場、街路、圖書館等の遺跡によつて、吾人は、繁華な、智識慾に燃えた、古代の都市の面影を偲ぶことが出来る。

二萬五千人を容れることを得た劇場は、あらゆる民衆的會合の場所であつた。小高い丘に倚り沿うて、崩れかかつた石段があり、その側面は、今日では、樹木の繁茂した荒れ果てた山であるが、それが自然の圓形劇場となつて、聲の反響を強めてゐる。

柱の基礎、階段、地下室の類のものは、なほ原形の幾分かを存し、昔日の風景を彷彿せしめる。階段の上には一の門があり、そのアーチも兩脚の柱も残つてゐる。そこから遠くを望むと、兩側に聳える山の間、青い海の色が見える。

街路の兩側には碑柱や墓碑がたつてゐる。敷石は、新らしく敷いたもののやうに純白だ。もつとも下手には圖書館の跡がある。圖書館は柱廊式の建築で、中央には半圓形の後陣があり、書籍が収めてあつた柵も壁面に残つてゐる。後面には、列柱式の廻廊があつて、それが薄暗い廊下につゞいてゐる。宛然たる迷宮なるこの圖書館の中で、エフェゾ人は、キリスト教徒が廣場で焼き棄てたやうな魔術の書でも讀んでゐたのだらう。

パウロがさきにエフェゾに上陸した時、すでに此の都市には、神の御言葉が説かれてゐた。アレキサンドリア生れのユデア人で、アポロ、又は、アプロニオスと云ふ聖書に通曉あきい人が、キリストの弟子となつて、會堂シナゴグで説教をしてゐたのである。彼は劇しい信仰に燃えて『イエズスの事を語り、且、詳しく教へ』てゐた。しかし、どうしたものか、不思議な事には、洗禮については、單にヨハネの洗禮を

知るのみで、三位一體の御名によつて施されて、聖靈を與へる洗禮については知る所がなかつた。プリスカとアクィラは、その説教を聽いてから、單純に彼の誤謬を正した。何人と雖も、信仰の智識を有する者は、自分よりすぐれた學者に對してすら、己が知る所を傳へると云ふ、至極、質朴な時代であつたのである。

兩人は、アポロに、パウロが去つた後のコリントに行つて宣教に従事するやうに勸告した。さうして、コリントの信者に宛てた紹介狀を彼に與へた、アポロは嘗て使徒よりもすゝめられてゐたので「コリント前書一六ノ一二」喜んで出發した。パウロ自身の證言によつても、彼がコリント教會で非常な信用を博したことは明である。「同上、一ノ一二、三ノ六」

パウロが再びエフェゾに來た時には、アポロは居なかつたが、彼から至極不完全な説教を聽いた、一群の信者がゐるのを發見した。彼等も、アポロの如く、聖靈の名による洗禮を知らなかつた。聖靈の存在すら、彼等には初耳であつた「然らば何によつて洗せられたるぞ」とパウロの問に、彼等は「ヨハネの洗禮を受けたるなり」と答へた。「ヨハネは己の後に來るべきもの、即ちイエスを信すべし」と言ひつゝ改心の洗禮を以つて人民を洗したるなり」とパウロは説明した。彼等は之を聞いて、主イエスの御名によりて洗せられた。次いでパウロは彼等に按手し聖靈は彼等の上に降り給ひ、彼等は異國語

を語り、且、豫言し始めた。

この驚くべき一挿話は、原始的教會の中に 極めて簡単な、云はゞ發育の中途で妨はまれた、小さな禮拜者の群グループがあつたことを示すものである。彼等十二人の半キリスト信者は、一般の信者の團體と別個に生活してゐた。彼等は使徒等の上に聖靈の降臨し給ひし話を嘗て聞いたことが無かつたのである。彼等はユデア人でなく、異邦人出の人達であつたであらう。何故ならば、ユデア人ならば、水の上に動き、又、豫言者等の眼を照らし給ひし、生命の源なる靈の存在を、知らないと言ふ筈はないからである。

パウロは、形而上學的の議論によつて彼等を説伏しようと思はず、後年福音書に記載せらるゝに至りしが如き、洗者聖ヨハネとイエズスとの關係を語るに止めた。こゝにも、彼が傳道したキリストが、歴史のキリストで、ギリシャ或は東洋の古宗教にならつて慥らへ上げた架空の人物でない事の證據がある。彼の毎日の説教はどんなであつたらうか。もしも、彼の布教日記とも云ふべきものが残つてゐたならば、それは、我等にとつて、どれほど貴重なものだらう。

エフェゾでも、例によつて、彼は會堂シナゴグで説教を開始した。しかし、三月もたつと、此處でも他の都市に於けるが如く、ユデア人が喧噪を始めて、彼の教を冒瀆しだした。彼は、弟子等を別の所につれていつた。恰もよし、チランノと云ふ文典と哲學との教師が、自分のギムナジウムの使用を彼に許してくれ

た。授業は晝まで、十一時頃になれば終つたから、その後はギムナジウムがパウロの説教所となり、炎暑の甚しくない日には、それから夕方になるまで傳道演説や、教理の説明があつた。(註一)

其の他の時間には、パウロはアクイラの家で、パンを儲ける爲に勞働した。晩はまた晩で、『家々につきて』(使徒行録、二〇ノ二〇) 信者をすゝめ、異教者を説き、ユデア人には『涙を以つて』改心を請うた。彼の熱心がかくの如く劇しく燃えたことはこれまでにない位であつた。彼は完全な『主の奴隸』となつて、全く主に奉事し、主との一致から、殆ど無限の能力を得つゝあつた。

その能力は純粹に他人を益する業であつて、信仰の宣傳となつた。不知不識の裡に、種々の治癒が行はれた。彼の顔の汗を拭いた手拭、又は、仕事の前掛の如きものをとつて、これで病人、又は悪魔憑きの身體に觸れると、不思議の效驗が現はれた。

やがて、彼の奇蹟力を嫉んで、その眞似をする魔術者が現はれてきた。以前から此の地方には、ユデアの呪術師が多く住み、サロモン王より家傳の呪で病氣を治すなどと云ひ觸らしてゐたが、その中の或人々、即ち、スケヴァと云ふ司祭の七人の子等は、ある時、悪鬼に憑かれた人に對つて、主イエズスの御名を唱へてみた。

『パウロが宣ぶるイエズスによりて、我汝に命ず』と。

悪魔は答へて、『我イエズスを知り、パウロも知れり、されど汝等は誰ぞ』と云つた。

さうして、悪魔憑きは躍上つて、彼等につかみ掛り、食ひ付いたり、引裂いたりして、傷だらけの彼等を裸體にして家から追ひ出した。

彼等の失敗はエフェゾの評判になつた。恐らくは此の都會ほど、魔法に惑溺してゐた所は他になかつたであらう。仕事のない者には、それは娛樂となつた。呪咀の書物を蒐集する人もあつた。又、好奇心に驅られて、後にアプレイウスが攻撃したやうな種々の奇怪な實驗をする人もあつた。フリジヤの醜惡な神祕が廣く行はれた地方では、呪咀の勢力は非常なものであつた。(註二) 人が呪文によつて空中又は地下の悪魔と意を通じ、見えざるものが形態を現はし、或は、人間にその能力の一部を貸して治し、その愛慾、憎惡を扶けると信じられてゐた。

キリスト教徒の中にも、洗禮以前に、是等の事にふけた者が大分あつた。彼等は、ともすれば、その古い習慣に戻り勝であつた。パウロは彼等に、超人的能力にたよることは悪魔の奴隸となることであると教へたが、しかし魔術書の存在は、或人々に誘惑であり、他の人々には危険であつた。それで、彼等は、自ら聖なる憤激のあまり、其等を山に積んで、衆人環視の前ですべてを燒盡してしまつた。使徒行録の記者は、かうして失つた書物の代價を、五萬ドラクマ(凡そ二萬圓)と見算つてゐる、魔術書は

不思議な能力があると云はれてゐた爲に、非常に高價のものであつた。

パウロがそれを命じたか否かは不明であるが、すくなくとも、これを許容したのは確である。異教徒は彼のした事を、無理解な亂暴と批難したかも知れない、しかしながら、有害な誤謬を保護するのは、彼にとつて眞理に反く罪惡であつたのだ。十字架のイエズスこそ一切にまさる最高の智慧である。詩篇が敢て『厄病の座』と呼ぶものは、失はれねばならぬ。

パウロはエフェゾに於て『廣くして且貢獻あるべき門』(コリント前書一六ノ九)が眼前に開けるのを認めた。しかし、又同時に『敵對する者多き』を知つて黯然たらざるを得なかつた。『我唯人の如くにしてエフェゾに黙と闘ひしならば、我に何の益かあらん』(同上、一五ノ三二)と云ふ激越なる一句は、彼が其處で受けた批難、攻撃、陥穽、憎惡等の如何ばかりなりしかを示すものである。頑固なユデア人、熱心な異教徒、信者の分裂を策し、彼等を欺かんとする偽兄弟が、彼を敵として、民衆をパウロに對して煽動する爲に其の機會を窺つてゐた。此の機會は、間もなくアルテミス女神の神殿附近の商人の不平によつて醸成されるのである。

しかし、現在のところでは、彼はその毎日の苦難を負うてゐる他に、なほ、ガラチア、及び、コリントの諸教會に遣してきた事業が、反對者からの批難攻撃を蒙つて、折角の彼の苦心も水泡に歸してゐる

しないかとの危惧があつた。

コリントについては、其處のクロエと云ふ一婦人の家人がエフェゾに來た時に「同上、一ノ一二」同教會の現状に關して非常に悲むべき報道を齎したので、彼は卽座にでもアカヤ州に趨かうかと思つた。自身でコリントに行きさへすれば、種々の躓きを取除き、キリストの靈による一致に、爭論する人々を導き得ると考へたのであつた。

しかし、『ベンテコステまではエフェゾに留らんとす』(同上、一六ノ八)と願つたので、彼はチモテオとエラストとに、所謂『コリント前書』を託して彼の地にやつた。此の書簡は、潑刺たる生氣に溢れ、信者の分裂、墮落、靈的不規律を責め、何日の時代の教會にとつても、極めて大切な教説の要點を叙述してゐる。

コリント人は、十字架につけられ給ひし主の御證言を受入れた。これは、無上の神の御惠である。さらば、異教徒の如く、世間の智慧を求むることなく、平和の裡に、キリストの再臨を待つべきである。世間の智慧は、キリストの尊前には愚さである。世間と神との間には、何等の妥協もあり得ない。神の愚さは人の智慧を辱かしめ給ふ。

靈の言葉、靈の生命を悟る者は、靈の人であつて肉ではない、パウロも他の使徒等と等しく、一個の

證人、又は奥義の分配者たるに過ぎない。されば、信者等は『我はパウロのもの』或は、『我はアポロのもの』或は、『ケファのもの』と云つてはならぬ。人々の救済の爲に十字架に磔けられたのは、パウロであつたか。(註三)

兄弟と名付けられる人で、私通者、若くは、偶像崇拜者があつたならば、信者は是等との交際を断たねばならぬ。(註四) 彼等の一人は己が亡父の妻を娶つたと云ふが、かゝる破倫の行爲は許すことが出来ぬ。彼等は悉く不潔を避けねばならぬ。姦淫する者は、己が身を汚すが、身體は、即ち、我等に來り住み給ふ聖靈の神殿である。

婚姻せる者は、神聖に、且、忠實に、結婚生活を営まねばならぬ。各人、神の召し給へる生活に據らねばならぬ。婚姻は善事である。しかし童貞の生活は更に之にまさるものである。『妻と共に居る人は、如何にして妻を喜ばしめんかと 世の事を思煩ひて心分るゝなり。』偶像は虚無である。偶像に獻げられた肉を食するは、本來無關心事である。しかし偶像の傍で食卓について、弱き信者を躓かすな。

集會は、規律と愛との裡に行はねばならぬ。己が受けし靈的賜の爲に誇る事は、何人にも許されぬ。一人一人に、欲し給ふがまゝに、賜を頒ち給ふは、同一の靈に在す。すべてに超えて愛を求めよ。愛は永遠に存するが故に、信仰よりも希望よりも偉大である。

かくして、使徒は、コリント人を中心の眞理、即ち、復活の事實に關する教に導く。キリストは復活し給うた。彼によつて、死者は復活し、腐敗すべき肉體は不朽を帯びる。

『されば、我が愛する兄弟よ、確乎として動かす、汝等の労働が主に於て空しからざる事を覺りて、絶えず力を主の業に盡せ』と。これが彼の決論であつた。

しかし、彼は、單に一般的な高速な教説を述ぶるに止らず、その書簡の末尾に於て、年來の希望を實現すべく、エルサレムの貧しき兄弟等の爲に、一大釀金を募る計畫を發表した。彼は自らこの施與をエルサレムに持参しようとした。それは、たゞに彼等の窮迫に同情したばかりではない。彼は母教會の聖徒等に、エルサレムは、彼にとつても、又、すべての信者、即ち、異邦人出身の者にとつても、彼等の聖とせられし生命の首都なることを證せんと欲したのである。シオンより世界の救主は生れ給うた。『汝に平和を與ふるわが契約は動くことなからん』とは、主がイスラエルに賜うた御約束であつた。『イザヤ五四ノ一〇』戦に勝ち給ひしキリストの現はれ給ふべきはエルサレムである。

かゝる意義を有する釀金であるから、パウロは、人々が可及的これの爲に奮發する事を冀望した。さうして、實際的なユデア人の本領を發揮して、

『我が汝等の許に至りて後釀金せざらんが爲に、一週間の初の日毎に、汝等各成功に應じて自宅に貯金

すべし』と命じた。

此の手紙を贈つたのは春であつた。彼の心算では、先づマケドニアに行き、秋になつてコリントに至る筈であつた。

『汝等の許に至り、多くは汝等と共に留り、或は冬を過す事もあらん。是何處へ行くも、汝等より送られん爲なり』と。

しかし、不慮の事件が起つて、豫定が狂つた。彼が豫告した如くペンテコステ、即ち、新穀の祭までエフェゾに滞在したかは頗る疑はしい。

毎年、四月には、エフェゾ人は、アルテミス女神の盛大な祭典を催した。諸種の競争や劇場での演技などもあつた。女神に仕へる神官(彼等は閹者だつた)、處女等は、行列を作つて、町の中や埠頭近くを練り歩いた。行列の先頭には、喇叭を吹く者、笛を吹く者が行く。騎馬の華かな姿が之に續く。女神の像の前には、香爐を振る者がある。女神は、頭に(櫛或は塔)のやうな冠を戴き、豊沃の能力の象徴たる鬘々たる無数の乳房を現はしてゐる。その下半身には翼を有する獅子、牡牛、牡羊、鷹、蜜蜂の浮彫が施してあつた。これも神々の母の創造力の象徴なのだ。アルテミスはエフェゾの女王、その光榮で、隨喜者に女神の永遠の能力を頌ち、彼等感激に充たした。

アルテミジオンと呼ばれる月には、熱心な巡禮は、アジアの各州、地中海の島嶼、遠くはエジプトからさへも、此の市に集つてきた。彼等は神殿の附近の店で、木製、象牙製、銀製の小さな厨子や女神の像を買ひ求めた。それで、自然に商店の組合も出来て、此のほろい商賣に従事してゐた。ところが此の年には、商賣が不景氣で、偶像の賣行が悪かつた。商人等は、新しい神を告ぐるユデアの傳道者の説教のせいだと思つた。彼等の中でも勢力があるデメトリオと云ふ一人が、同業の人々や職工等呼び集めて下の演説をした。

『男等よ、我等の利益が此の細工に依れる事は汝等の知る所にして、彼のパウロが、手にて造れるものは神にあらずと云ひて、既にエフェゾのみならず、殆ど全アジアを説勸めて、夥しき人を遠ざからしめた事も、亦汝等の見聞せる所なり。之より起る危険は、嘗に我等が職業の信用を失ふのみならず、アルテミス大女神の宮も蔑にせられ、アジア及び世界舉りて崇め奉る大女神の威嚴も失行くべき事之なり』と。

デメトリオは、民衆の憤怒を煽る爲に、非常な誇張をやつたのである。故意か、無智かはわからないが、彼はユデア教とキリスト教とを混同したのだ。偶像崇拜を嚴禁するユデア教の影響は確にアジア全州に亘つてゐた。しかし、パウロの説教の焦點は、むしろ其處ではなかつた。數世紀の間繁昌した商賣

を、かくの如く急激に衰微させる程、教會が發展したとも考へにくい。が、すくなくも、デメトリオは此の商賣を益々繁昌させたかつたので、神官を始め、神殿によつて生活する凡ての人々、民衆、浮浪人等を煽動して、暴動を起し、パウロ及びキリスト信者を残らず殺すか追放するかしようとして企てたのである。此の計畫は見事に當つた。(註五)

職工等は憤慨して、街へ出て、『大なる哉、エフェゾ人のアルテミス』と呼ばはつた。

やがて、通行人や巡禮等もそれに加り、譯もわからずに、『大なる哉、エフェゾ人のアルテミス』と口々に叫び出した。喧轟は彌々増すばかり、罵り怒る人の波は、平常の集會所なる劇場の方へ流れていつた。

その途中で、マケドニア生れのギリシャ人のアリストルコとガイオとを發見するや、忽ちにして、暴徒等は、パウロの同伴者と云ふ譯で、兩人を捉へ、氣早の者は今にも兩人を石で擲ち殺すか、さもなければ八つ裂にでもしかねない有様となつた。

パウロは暴動の報知に接し、ことに二人の友に危険が迫つたと聞くや否や、自分も劇場に馳せつけて殺氣立つた群衆の前に出て辯解を試みようとした。彼は危険に臨んで昂奮した。群衆の前でキリストを宣べ、身を挺して殉教の犠牲を獻ぐるに、絶好の機會であると信じたのである。しかし、弟子等は切に

それを諫止した。(註六)パウロが知り合になつた都市の重だつた二三人、ローマの役人、アジアルクと呼ばれた人等も(註七)彼に慎重に行動するやうに勧めた。彼も、己が鮮血を獻げる時機が未だ到來しないと悟つて、友人等の諫言に従つた。

劇場の中では、怒號がなほ續いてゐた。その叫は、山に反響して、恰も防波堤に碎ける狂瀾の響のやうだつた。さうして、アレキサンドルと云ふ一人の男が、演説したさうな身振をしたので、なほ一層喧しくなつた。群衆の中に混つてゐたユデア人が、キリスト教徒と間違へられるのを恐れて、彼をして辯解を試みさせようとして、群衆の前に彼を押し出したのだ。ところが、アレキサンドルがユデア人であると見てとるや、暴徒は彼を怒聲の裡に葬り去らんとするが如く、騷擾は輪をかけて大きくなつた。

『大なる哉、エフェゾ人のアルテミス』と、信心を傷けられた人々の半狂亂の叫喚は繰返し繰返して、二時間あまりも續いた。叫び疲れてすこしく靜まるかと思ふと、また發作的に高まつた。その中に、不意に柱廊の蔭から、一人の人物が現はれて手をさしのべた。群衆は喝采した。それは常に民衆の集會を司會する、市の書記官であつたからである。叫喚は忽ち靜まつた。書記官は極く簡單に下のやうに告げた。

『エフェゾ人よ、エフェゾの市はゼウスの裔なるアルテミス大女神の宮に事へ奉る者たる事、誰かは知

らざらん。是拒むべからざる事なれば、汝等宜しく穩便にして、何事も輕卒に爲すべからず。即ち、汝等此の人々を召連れたれども、彼等は宮の物を盗みたるにもあらず、我等の女神を罵りたるにもあらず。もし、デメトリオ及び其の友なる細工人等、或人につきて訴ふる所あらば、法廷の開かれたるあり、地方總督のあるあり、人々互に告訴すべし。汝等もし他の問題につきて議する事あらば、正當の議會に於て之を決するを得べし。蓋し、今日の事に就きて、騷亂の咎を受くる懼あり。そは此の集會の事を辯解すべき理由、我等に一もあらざればなり。』

かう云つて、彼は散會を宣した。沸き立ち易いエフェゾ人はまた容易におとなしくなつた。

此の事件があつてからは、パウロがエフェゾに滞在するのは最早不可能であつた。諸方面からの憎惡は彼の一身に集つて、何時どのやうな奸計に出會ふか、わからなくなつた。アクイラとプリスカさへも、『彼の生命の爲に、己が首を差出』さねばならぬ状態となつた(ローマ書一六ノ三) 兩人にそれ以上の迷惑を掛けるのを忍びずと感じた彼は、よつて祕にトロアスに向つて出帆し、マケドニアに行かうとした。

重ね重ねの試煉に、流石の彼も勇氣の沮喪するを感じた。勇者と雖も、時として力盡きたるを覺えることがある。『責めらるゝ事過度にして、力及ばず、活くる望をすら失ふに至りき』とは、彼自らの告白

である。「コリント後書、一ノ八」彼は又、『我等の外面の人は腐敗せり』(同上、四ノ一六)と云つて、自分の肉體の衰弱を告げる。『わが神、わが神、なんぞ我をすて給ふや……犬ども我をめぐり、惡しきものゝ群、われをかこめり。』(詩篇、二二) 彼は死の間近なるべきを期待し、人々より何等の救助をも希望しなかつた。『是、己を頼まずして、死者を復活せしめ給ふ神を頼み奉らん爲なり』(コリント後書、一ノ八) 外面の人は、時として落膽することあるも『内面の人は却て日々新なり』(同上、四ノ一六) 『弱き者に於てこそ強ければなり』(同上、一ニノ二〇)

かくて、彼、自己の地上の生涯が猛獸に對する不斷の鬭争なることを、彌々はつきりと自覺した。ことに不思議とも云ふべきは、それにも拘らず彼が柔和にして信賴に充ち、兄弟等に對して燃えるやうな愛情を持ち續けたことである。

ローマで、圓形劇場の石の建物の中央に立つて、滿場の嘲罵を浴びつゝ、吠えたける野犬や、舌甜めづりする熊や、鬣狗の前に立つ殉教者の姿を想像した時に、キリスト信者の崇高な、しかも戰慄すべき運命を、他の何處の場所に於てよりも、私ははつきりと認識した。彼の前面、並に彼の内部には、世と、その止むことなき憎惡とがあり、周圍には、彼をかこむ巨大にして越えがたき障壁がある。而して、彼等の唯一の出口は天國なのである。

(註一) 今日、エフェゾに三のギムナジウムの遺跡がある。聴講席の半圓形の階段になつてゐる廣い講堂である。

(註二) プルタルク『エフェゾの言語』で憑いた悪魔が退散すると書いてゐる。

(註三) この一句よりペトロがコリントに布教したと考へる事は出来ぬ。ユウゼビウスはかく推測したが、それには何の證據もない。パウロは、單に、一部の信者が、使徒の首長なるが故に、ペトロに従つた事實を云つたのみである。

(註四) パウロは『此の世の私通者、或は貪慾者、或は掠奪者、或は偶像崇拜者に交る勿れ』には非ず、もし然らば、汝等此の世を去らざるを得ざりしならん』と書いてゐる。これは彼の常識の證據である。

(註五) 神殿に仕へる人々の數は夥しかった。神官と巫女との他に、神饌を司る者、香掛り、喇叭手、騎手、掃除夫、笛手、女神の衣裳掛り等があつた。

(註六) ロアジールは使徒行録の註解の主で、エフェゾの暴動は記者の捏造であると斷言してゐるが、それには證據がない。それに、もし架空談ならば、記者はパウロをして群衆に對して口を開かせて、劇的な一場面を作り上げた筈である。

(註七) アジアルクとは、セザル禮拜を司る役人だつた。エフェゾには、ローマ皇帝なるセザルに獻げられた禮拜堂が二個あつた。

一五、再びギリシヤに、ローマ人に贈る書簡

ローマ、それは、パウロがクプロ島で傳道した時以來、否、恐らくはその召命の日以來、念頭にあつた目的地だつた。帝國の首都は、すべての異邦人の集中する中心である。彼はローマのことを、度々、アクイラとプリスカとに話した、エフェゾに逗留してゐた間に、『私もローマに行かなければならない』と彼が繰返した言葉を、信者等は覺えてゐた筈である。

ローマ書の冒頭に、彼はかう書いた。

『我が祈禱の中に斷えず汝等を紀念し、常に如何にしてか神の思召により、何時しか安らかなる道を得て、終に汝等に至らんと考へるは、御子の福音に於て我が一心に事へ奉る神の、わが爲に證し給ふ所なり』と。

此の書簡の結末の挨拶を讀めば、彼がローマの信者に大勢の知己を有してゐた事がわかる。その中には、まづ第一にアクイラとプリスカとの名がある。此の二人も、パウロが出發してから間もなく商賣が不可能となつたばかりでなく、生命も危くなつたので、ユデア人追放令が廢れたのを幸ひ、エフェゾを

再びギリシヤに、ローマ人に贈る書簡

立ち去つて再びローマに戻つたのだ。さうして、ローマでも、エフェゾに於けるやうに、自分等の家に信者を集めて、パウロの來るのを待つてゐた。

しかし、使徒は、ローマに行く前に、もう一度エルサレムの聖徒等を訪ね、アジア、マケドニア、アカヤ各州の諸教會で蒐め得た贖金を、布教の成功の徴に、自ら持參して贈りたいと考へてゐた。

彼の最初の豫定は、すぐにマケドニアに行く筈であつた。「コリント後書一ノ一五」しかし、トロアスで聞く所によれば、コリント人は、相變らず爭論を事とし、種々の躓きも改善されず、又、パウロの傳道を批難し、之を疑ひ、或は、彼が席の暖まる暇もなく南船北馬するを以つて、彼の移り易い心の證據として之を攻撃する者さへもあつた。それで、パウロも、このやうな不安と動搖との中に、自分が行つても無駄だらう、それよりも寧ろ書簡を贈つた方がよい、と、かう思つた。さうして苦痛と憤慨とに満つる一通の書簡を口授して、之をチトに託した。チモテオはあまり温順すぎるから、コリント人の爭論を靜める事が出来なかつた。チトならばうまくゆくかも知れぬと考へたのである。

このパウロの書簡は湮滅した。その理由は不明である。しかし、それが多大の効果を擧げたことは、次の彼の言で推測される。

『蓋し、マケドニアに至りし時、我等の肉身は聊も安き事なく、一切の患難に遇ひ、外には争、内には懼ありき、されど謙る人々を慰め給ふ神は、チトの來着によりて我等を慰め給へり。たゞ其の來着に由りてのみならず、尙、彼が汝等の中に慰を以つてせり、即ち、汝等の我を慕ふ事、其の歎、其の熱心を我等に告げしかば、我が喜は更に大いなりき。蓋し、我書簡を以つて汝等を悲ましめられたれども、之を後悔せず、假令其の書簡が暫しにても汝等を悲ましめしを見て後悔したる事ありとも、今は喜べり。是、汝等の悲みし故にあらず、悲みて改心するに至りたる故なり。』(コリント後書七ノ五―七)

パウロの書簡は、先づ彼等に強い感動を與へ、次いで彼等を改心せしめた。チトの力強い訓戒も、それに與つて力があつた。彼等は始め彼を「恐怖と戰慄とを以つて」受け入れたけれども、やがて謙遜な心で服従した。チトは又彼等に「聖徒等の爲の聖役」即ち、エルサレムの爲の贖金を勧めた。

それ故、チトが歸還するや、パウロはコリント人の改心を喜び、更に彼等に書簡を贈つてその歡喜を告げた。これが吾人がコリント後書と稱するもので、實はパウロがコリント人に寄せた第四回目の書簡である。(註一)

彼は肺腑に迫る痛切な文字を以つて、自分が彼等の爲に凌いだ所を語つた後に、彼等もまた、マケドニアの信者等の如く奮發せよと告げる、パウロがこの機微な問題に觸れる部分は極めて、決定的であり、且つ巧である。其處には、贖金を命ずる高遠な理由と、之を肯す快き愛徳の香氣とが充ちあふれて

ある。

『我は之を命ずるが如くには云はず、他人の奮發を以つて、汝等の愛の眞實を試みんと欲す。蓋し、汝等、わが主イエズス・キリストの恩寵を知れり。即ち、富める者にて在しながら、己が貧しきを以つて汝等を富ましめんとて、汝等の爲に貧しき者となり給ひしなり。是につきて我は勸告す、此の慈善は汝等に益あり。蓋し汝等、先に之を爲し始めし耳ならず、一年前より志したる事なれば、今は實際に之を爲すべし。是、志の早かりし如く、所有物に應じて爲す事も亦早からん爲なり。そは假令志す事早くも、嘉納せらるゝは、有たざるものに由ればなり。是他人に寛にして汝等を苦めんとするに非ず、平均の爲なり。現に汝等の餘る所は彼等の缺亡を補はざるべからず、然らば彼等の餘る所も亦汝等の缺乏も補ひて『平均するに至るべし。』〔コリント後書八ノ八一―一四〕』

彼は彼等の自尊心を利用して慈善をすゝめる。『もしマケドニア人、我と共に至りて、汝等の準備の未成らざるを見れば、此の點に於て、汝等は言ふに及ばず、恐らくは我等も赤面するならん』と。〔同上、九ノ四〕しかしながら彼は寄附を乞ふ者の通例の巧言より、遂に高尚な理由を述べる。彼等の利益に訴へるのみではない。彼は施物に於て、神の愛の甘味なる現れを見、さうして、エルサレムの爲に手をささるべながら、與ふるよりも受くる事多きをコリント人に感じさせるのである。

贖金募集の困難は、書簡の上に明白に表はされてゐる。ユデア教出身者よりは、ディアスポラのイスラエル人が、毎年エルサレムの神殿に獻金をする習慣があつたので、その形を變へたものゝやうに考へられたから、至極單純にとりあつかはれた。しかし、異教よりの改宗者は、怪訝の眼を瞪つた。中には果して、獻金の全部が、エルサレムの貧民に頒たれるかどうかと、パウロに對して、猜疑の念を抱くものすら無くはなかつた。かくの如き批評は、パウロの耳にも達してゐたので、彼はこれに就いて充分に注意して最微な疑惑をさへ避けるやうに苦心し、〔同上、八ノ二〇―二二〕贖金を集める人々に、彼がその『奮發を多くの事に就きて屢々認めた』兄弟を差添へることにした。

彼がかくの如き注意を重ねた理由は、他人に誤解されまいとの願望のみであつたらうか。彼の敵は、彼の凡ゆる行動を讒し、これを貶することが出来る。本當は、そのやうな事は重大でない。しかしながら、彼の行動に對する讒誣は、ひいてその傳道の結果を傷ける。此の書簡が、彼の一身の辯解を多く含み、その爲に、思ひも掛けず貴重なものとなつたのはその故である。犀利にして、傲れる反駁、聖者の苦惱と異象との告白の機縁となりし、パウロの敵は感謝せられよかし！

彼が皮肉に『大使徒』〔同上、一一ノ五〕と呼び、或は、皮肉なしに『僞使徒にして狡猾なる勞働者、身をキリストの使徒に装へる者』〔同上、一一ノ三〕と呼ぶ敵等は、彼の矛盾と弱さを責めた。

再びギリシヤに、ローマ人に贈る書簡

彼等は云ふ、『其の書簡こそ厳しく、且強けれ、面前には身は弱く談話に拙し、』と〔同上、一〇ノ一〇〕
或は、實際、彼も気分や態度に、不平等のことがあつたかも知れない。彼は病んでゐたので、心の重
い時折もあつた。彼が自ら雄辯ならずと云ふ其の談話も、弾んだり沈んだりした。かくの如き彼の發作
的の衝動をさして、彼の敵は矛盾と評したのであらう。しかし、彼の思念は悉く虜となつて、キリスト
に服従してゐたのだ。〔同上、一〇ノ五〕

それで彼はコリント人に、其處に行つてからも行かぬ前と同じやうに、嚴格に振舞ふからと豫め書贈
る。〔一〇ノ一一〕假令己は弱くとも、全能なるキリストは、彼に力を假し給ふであらう。

彼は、次に、自分を攻撃する輩を責め、彼等こそ黙して謙るべきだと逆襲する。『報酬なくして神の福
音を宣べ』何人をも煩はさざりしは犯罪なりや〔一一ノ七〕との反問は、僞使徒等が、信者等より必要
以上の金銭を貪ることを、暗に批難したのである。

彼は、キリストより受け奉りし權能を誇示して、人に倨ると責められた。彼は甘じて此の批難を受け
ると云ふ。何故ならば、彼が誇るは、自己についてゝはないからである。若し欲さば、彼も肉について
の優越を列擧することが出来る。彼は、生粹なユデア人で、彼の家系には汚辱がない。彼はキリストの
爲に、何人にも勝つて働き、その爲に凌いだ苦惱と、迫害とは無量である。彼は異象と天啓との賜を裕

に受けた。しかしながら彼が誇らんとする所は、かくの如き事柄よりも、反つて己の弱さにある。彼が
正しからんとするは、人間の前に於てゝない。『我等は神の御前に、キリストに在りて語るなり。我至愛
なる者よ、萬事は汝等の徳を立てんが爲なるぞ。』〔註二〕

彼は、コリント人に、彼の訪問を豫告する。今や三度目に彼等に至らんとするのである。〔一二ノ一四〕
さればコリントに既に第二回の滞在をした筈であるが、それについては、我等はこの一句以外に何等の
智識をも有しない。彼の第三回の訪問に關してすら、使徒行録が我等に教へるのは、彼が三ヶ月間、即
ち海が荒れて、航海することが出来なかつた三ヶ月間、コリントに逗留したと云ふだけである。

かの壯重雄大なローマ人に贈る書簡の一篇を彼が口授したのは、恐らくはエルサレムに向けて出發す
る前のこの時期に於てゝあつたらう、生涯の一轉期を作らんとする希望を以つて、ローマ及西歐に矚目
しながら。さうして、恐らくは、之を恰もイタリーに行く『ケンクレの教會の女執事』フェベに託した
のであらう。彼女については、書簡の末尾に『聖徒として相應しく之を主に於て接待し、汝等に求めん
凡ての事に於て之を授けよ、其は彼女自らも既に多くの人を援け、我をも援けたればなり』〔ローマ書一
ノ二二〕と云つてゐる。〔註三〕

ローマ書の文章と調子と規模とは、彼がローマの教會、及び、その未來に關して、有してゐた希望に

相應しいものであつた。彼がローマ人に書簡を贈る氣になつたのは、一寸不可思議な氣がしないでもない。何故ならば、彼は、原則として、他人が据ゑた土臺の上に仕事をしなかつたから。さうしてローマ教會の創立に關して、彼は從來何等の關係をも有しなかつたからである。

福音がローマに及んだのは、極めて早い時期に於てあつた。東邦諸國で起る事件は、何によらず、帝國の首都に速に響いて來た。カイザリアに駐屯したイタリア隊の兵士の中にも、百夫長コルネリオのやうに、キリスト教に歸依して、ローマに歸還してから、キリストの御名を説いた者がゐたかも知れない。(註四)かの最初のペンテコステの日に、エルサレムに居合はせた外國人、或は、アンチオキアのギリシャ人の何人か、首都に居を移し、或は暫時滞在するうちに、キリスト教の種子を播いたと云ふ事も考へられる。とにかくローマ書の末文の挨拶中にある人名の大部分は、ギリシャ風の名である。

『選ばれし聖徒等』の最初の核子となつた者の中には、勿論、ユデア人も居た。ローマに於るユデア人の一群の重要さは、彼等が商賣をしてゐたトランスシヴエレ、スプーラ、カペーナ門附近の地域では、安息日の休息が一般に守られてゐたことでもわかる。(註五)

彼等はおもに、居酒屋を営んだり、或は、乾棗、油、魚等を賣る小店を出したりしてゐた。詩人ユヅエナリリスは町外れの小路を歩いてゐる時に、籃篋を着て、通行人に施物を乞ふユデア人の巫女に行き

逢つた、此の老婆は、縁起を祝ふ謝禮に、數文の銅貨を汚ない掌の上に受けるのだと書いてゐるが、しかし、このやうな乞食の外にも、例へば、プリスカ、アクイラのやうな富裕な商人もあれば、醫者、畫家、詩人喜劇俳優もあれば、ユデア教に歸依した異邦人の中にはポペアの如き立派な貴婦人もあつたのである。

ローマでも、ユデア人は、他の土地に於るやうに、しきりに異教徒の改宗の爲に働いてゐた。彼等は、それと知らずに、キリスト教の足場を作つてゐたのである。何故ならば、ユデア教の會堂の中で、キリストの御教が宣べられると、生粹のユデア人よりも、異教出身の人々が餘計にそれに心を惹かれたから。パウロがローマに到着して後、重立つたユデア人、即ち會堂の有力者を集めて挨拶した時には、彼等は彼の教について、聽いた事もないと云ふ態度で應答してゐたが、彼の書簡を見れば、信者の中に、嘗てユデア教を信奉してゐた人が、少からざるを認めるのである。

ユデア教徒と、キリスト教徒との間には、必ずや劇しい爭論が生じたに相違ない。ユデア人は屹度暴力に訴へたであらう。そこでローマの警察は之に干渉し、クラディオ帝はユデア人の追放令を裁可し、兩成敗的にユデア教徒も、キリスト教も、共に首都より退去を命ぜられたのである。しかし何時ともなく、兩方とも再び首都に姿を現はした。さうして、ローマのキリスト教會は漸次に發展の機運に向つた。

それは、パウロが書簡の冒頭に、

『汝等の信仰、全世界に吹聴せらる』

と書いてゐるのも明である。

ローマ市民に最初に福音を傳へたのは、使徒の中の何人であつたらうか。

傳説によれば、ペトロが四十四年頃、既にローマに第一回の逗留をした相である。この傳説を否定するに足りるだけの反證は存在しない。しかしながら、パウロがローマ人に書簡を贈つた時分には、ペトロがローマを去つてゐた事は確實である。さもなくば、パウロはペトロのことを何とか書く筈である。教會の『柱』の一人が其處に居れば、自分が手紙を書いて、その教に蛇足を添へる必要もあるまいと考へたらうと思はれる。

彼が此の書面を認めようと思ひ付いて、それを實行した直接の動機は、本書簡の結末の訓戒中に、之を發見することが出来る。

『兄弟等よ、我汝等に勸む、汝等の學びし教に反して、争及び妨を爲せる人々を認めて、之を避けよ。

蓋し、かゝる族は、我主キリストに事へずして己が腹に事へ、甘き言及び詭譎を以つて、無邪氣なる人の心を惑はすなり。汝等が従順なる事の何處にも聞えたるは、我が汝等の爲に喜ぶ所なり。唯望むら

くは、汝等が善に對して賢く、惡に對して疎からん事を。』(ローマ書、一六ノ一七—一九)

パウロは、他の教會が分裂、惡例の爲に苦むのを見た。彼は、後々までも、ローマ教會にその事なからんことを希望するのである。最も恐るべき二個の禍は、偶像崇拜への墮落と、ガラチア人の許に於るが如き、ユデア主義者の宣傳とである。それ故、彼は次の二原則を確立した。

人間は、その自然の『義』によつて救はれない。異教徒は、神を識り得べかりしに拘らず、あらゆる精神の誤謬と、最も破廉恥的なる官能の墮落とに陥つた。人間はまた律法の遷奉によつても救はれない。ユデア人は律法を有するけれども、それを守らない。されば、信仰によつて『義』とせられし人のみ生きることが出来る。何故ならば、彼が靈の生命を有するは恩寵によるからである。ユデア人であらうが、異邦人であらうが、之を義とし給ふは神である。

『神は豫知し給へる人々を、御子の狀に肖似らしめんと豫定し給へり。是御子が多くの兄弟の中に長子たらん爲なり。かくて豫定し給ひし人は亦之を召し、召し給ひし人は亦之を義とならしめ義とならしめ給ひし人には、亦賜ふに光榮を以つてし給ひしなり。』(ハノ二九、三〇)

この根本的思想の周圍に、——これは云はゞ彼の教説を支へる骨組であつた——パウロは、他の企及し能はざる雄渾、玄妙の筆を揮つて、神學、倫理、豫言の壁畫を描いた。我等は、本書に於ては、彼が

教化した環境、彼の感情、行動に就てのみ、それを研究しようと思ふ。

異教の墮落の描寫は、一頁で足りた。神の眞理に對する偶像教徒の盲目は、必然的に道德の頹敗を招く。もとより、ローマの社會にも、高德の士人、貞潔なる淑女、知れる限りの範圍に於て純潔なる生涯を送る人々があつたに相違ない。しかし、タシトゥス、スエトニウス、ユヴェナリス、アプレイアを讀み、ポンペイの廢墟に残る繪畫のあるものを見れば、何人も、使徒の説く所に異議を挾めなくなる。スエトニオがティベリオ、ネロ、及びその周圍の人々について記述した所は、小説ではない。ペトロニウスの描いた主人公が、自然に背馳する邪慾を肆にする時、著者は彼に滿腔の讚美と同情とを獻げてゐるのだ。實際、無道德的官能主義者が、淫猥鄙陋事に沈湎感溺しても、異教世界に於ては、是等を批難排斥する人は無かつたのである。

パウロは是等を批難し、且——これが彼の判斷の新機軸であつた——神の『義』と對比して説明した。人が『造物主を描きて被造物を拜み之に事へ、自己を以つて萬事を中心とすれば、彼は自己が神化せんとする『人性』を却つて汚すやうな行爲をなし、この肉の迷ひよりして、傲慢、殘酷、其の他あらゆる慾情が生れて來る。

しかし、ユデア人も、決して異教徒に優らない。彼等は神を知りつゝ、しかも惡を行つて、信する神

の戒律に背くが故に、その罪は更に重い。されば、ユデア人は、己が特權を誇つてはならぬ。業を活かす信仰なくして、律法の價值を、洗せられし異教徒に誇示するが如きは、愚の骨頂である。

しかしながら、パウロは、毛頭ユデア人を恥しめる心算ではない。彼は異邦人に對して、ユデア人の前に謙遜ならん事を求める。「二ノ二〇」神の御言は、選民に託せられ、彼等は御約束を受けたからだ。この御約束は、キリストに於て證せられた。それが完全に成就するはイスラエルがその救濟主を信するに至りし曉である。

パウロは此の際、單にその大部分は異教出身なるローマのキリスト教徒に、ユデア人を輕蔑せず、却つて彼等を尊敬すべき事を説いたのだと解釋すべきであらうか。(註六)この思想は異邦人に對する彼の言葉の中に窺はれる。

『野生の橄欖たりし汝之に接がれ、橄欖の根と液汁とを共にするものとなりたりとも、枝に向ひて誇ること勿れ。誇ちんとするも汝が根を保つに非ずして、根こそは汝を保つなれ。汝或は云はん、枝の折られしは我が接がれん爲なりと。諾し、彼等は其の不信仰に由りて折られしに、汝は信仰に由りて立てるなり。然れど驕ること勿れ、却て懼れよ。』(二ノ一七—二〇)

その實、イスラエルに對する以上の同情は、彼の心中のなほ深い感情、即ち、彼の改心以來、常にパ

ウロを悩ましてゐた危惧から生れてゐるのである。肉の縁による彼の兄弟等は、遂に最後まで、神に退けられたのであらうか。

神の御約束の實現せざる事があり得ようか。神に不正が存在するだらうか。神の攝理、人間の運命のうちにおいて、とりわけて大いにして測りがたき問題に關する彼の默想を要約したのが、此の悲愴な論文である。

彼は聖書を研究した。彼は神の御約束の記されたる一字一句の意味をたづねた。

そこには、『イザアクより出づる者は汝の裔と呼ばれん』と記されてゐる。

ユデア人の誤謬、とりも直さず、彼がユデア教を奉じてゐた頃の誤謬はイザアクの肉による後裔が悉く此の契約に與るべしと信する事にあつた。イザアクは奇蹟の子である。神は選擇し給ふに當つて自由である。神は欲し給ふ者を救ひ給ふ。誰か其の思召に抵抗しよう。

主に不義なきを證せんが爲に、パウロは主がモイゼに宣ひし言を引用する、『我が敢て憫まん人を憫み、敢て慈悲を施さん人に慈悲を施さん』と。自ら己が所業を誇ること勿れ。神より招かるゝにあらずば『欲し、且、走る』は無益である。

神は、『恤の器』として、ユデア人及び異邦人の中より、特定の人々を召し給うた。これに對して、何

人も敢て異議を唱へる事は出来ぬ。神は何人にも負ひ給ふ所がないからである。此の際パウロは、すべての靈魂の永遠の救済よりも寧ろ或る國民の使命と云ふ事を主として論じてゐる。(註七) イスラエルは所業の義によりて救済を得んと信じた。而して、キリストの御言を聽きしも之を解さず、之を解さん事を欲しなかつた。神が、彼等を、頑なるまゝに措き給うたのは、其の故である。

しかし、神がイスラエルを全然棄て給うた譯ではない。パウロ自身『アブラハムの裔、ベンヤミンの族』なるイスラエル人である。ユデア人の頑なるは、異邦人の救済の機縁となつた。もしも、イスラエルにして即時に改心したならば、使徒等は異教徒の救済の爲に働かなかつたかも知れぬ。墮落でさへも、世の富であつた。果して然らばその採用は『死よりの再生』にあらずして何であり得ようか。

此の最後の言は、深長な意味を藏す神祕的な言で、エゼキエルが見た骸骨の異象を想起せしめる。イスラエルは、長い間、地上に横る骸骨である。落ち散れる骨片は、假令集る期があつても、靈がその上を過ぎり給ひて、聖籠が神の選民を活かし給ふ日に至るまでは、遂に生命を宿さぬ屍であらう。

使徒の考によれば、イスラエルの幾部分がキリストに抗するのは、『異邦人全體』の教會に入り來るまであつて、其の後に、ユデア人も亦服従するに至るであらう。パウロの言は、將來全世界のあらゆる國民が信者となり、次ですべてのユデア人が歸依すると云ふ意味ではない。嘗て『大なる棄教』に關す

る豫言を信者等に書贈つた彼が、『人の子の來らん時、世に信仰を見出すべきか』(ルカ、一八ノ八)と、イエズスの自ら宣ひし御言を知らぬ筈はない。彼は、異邦人及びユデア人なる人類の状態を豫見したのだ。世界の此處彼處、二三の國民の間には、信仰は衰へてゐる。しかし、キリストの御名の響かぬ隅は世界にない。日に夜をついで獻げられるミサ聖祭によつて、神の御子の御血は、絶えず全地を沾ほす救濟の生命の流となつてゐる。かく解する時、パウロの豫言は今やまさに成就しつゝあるのである。残るところは、イスラエルの改心のみ。神が、自ら不信の裡に籠り藏るゝを人々に許し給うたのは(或は、パウロの口吻を模すれば、神が彼等を不信に鎖し給ひしは)、彼等を御恤おほほれみによつて其處より引きだし給はんが爲であつた。

神祕家パウロは、神の豫定の不思議を畏るゝことなく、却つて奥義を讀へてこの一節を結ぶ。

『嗚呼高大なる哉神の富と智慧と智識と。其の判定の覺り難さよ、其の道の極め難さよ』と。

彼の書簡の眞意は奈邊にあつたか。曰く、それは人類の過去並に將來の宗教的生活に關する概觀であつた。

彼の眼前にある過去は、徹底的の批難をうける。すべての人は、アダムの所業なる死の律の下にありて、義人は一人もない。モイゼの律法は、最上の善に背く罪惡を知らしめるが、徳を修め、眞の幸福を

享くるに足る者とならしむる力を、我等に與へることを得ない。

將來は、キリストの死及び復活を以つて、既に現在となつたが、それは過去にひきかへて、無限の希望を開くものである。萬人、律法の業によらずして、信仰を以つて義とせられ、神は、たゞに、ユデア人の神たるのみならず、亦異邦人の神に在す。

もとより、人間は、未だ苦惱と邪なる肉の欲望とより解放されない。すべての被造物は、我等と相共に嘆いて、神の子等の顯はれん事、即ち、光榮裡のキリスト再臨の後に、地の面の一變して、被造物が聖人等の變貌にあづかるべき、平和と尊貴との世界をまつてゐる。此の世の試煉は、此の貴い生命に比ぶれば談ずるに足らぬ。我等の肉體はいかほど罪の律を己が内に感じて、聖寵は我等の足らざる所を補ひ給ふ。『我等の爲に、御獨子を付し給へる神は争でか、之に添へて一切を我等に賜はざらんや。神の選まれたる人々を訴ふるものは誰ぞ。義とするは神に在す。何人か之を罪に處する。神の右に在して、尙我等の爲に執成し給ふキリスト・イエズスならんか。キリストに對する愛より我等を引離す者は誰ぞ。是、苦難ならんか、憂か飢か、裸體か危険か、迫害か、(刑吏の)劍か。されど、我等此の凡ての事の中にありて我等を愛し給へる者により、勝ちて尙餘あり。』(八ノ三一―三七)

パウロは、哲學者や道德學者が、公衆の前で朗讀演説をするやうな調子で、こんな事を云つたのでは

ない。飢餓を説き、裸體を談る際には、彼は是等の語の意味を體驗によつて知悉するのである。彼が劍を云ふ時には、自分が後年このローマに於て、鮮血を以つて己がものとなして、彼の生涯をかざるべき殉教のことを考へてゐるのである。

彼は、信仰が所業に顯れねばならぬと教へる。彼の神學論は、極めて深遠高妙だから、果して普通一般の信者に解るかしたらと疑ひたくはるが、その結論たる倫理的教訓は、實に平易、明瞭である。そのあるものは極めて一般的で、福音的道德の共通な教訓である。

『愛は表裏あるべからず、汝等惡を嫌ひて、善に就き、兄弟の愛を以つて相寵め、……汝等を迫害する人を祝せよ……喜ぶ人々と共に喜び、泣く人々と共に泣き……低きに甘んじ、自ら智しとする勿れ』
そのあるものは、舊約のユデアの教訓の名残である。

『汝の饑餓をば之に食せしめ、渴かば之に飲ましめよ、かくすれば汝彼の頭に燃炭を積むならん』

(註八)

更に、彼の教訓のあるものは、服従か、反抗かと躊躇しつゝあるかも知れぬローマの信者に與へた、機宜に應じた勸告であつた。

パウロは——ペトロも亦同一の訓戒を與へるのであるが〔ペトロ前書二ノ一三〕——『人各々の上に立

てる諸權に服すべし。蓋し、權にして神より出でざるはなし』と、服従をすべての信者の義務として教へる。ユデア人にとつて、誰一の眞の主權イザハ神である。者はない。故に、偏狹な國粹主義的狂信者フナチツクは、この原則から次の如く結論して、之を實行した。曰く、神は唯一の主に在すが故に、我等は神殿に規定の獻金をせねばならぬ、しかしセザルに租税を納める必要はない、と。イエズスは、一言を以つて、この無政府主義的偏見を説破し給うた。〔マテオ、二二ノ二一〕しかし、信者の中に、同じイエズスの『子等は自由なり』〔同上、一七ノ二五〕との一句を楯に、異教徒なる帝王、又は、裁判官の命令を奉じない者がないとも云へない。パウロは、畏の爲のみならず、『良心の爲に』上に立てられた諸權に服従する善良なる臣民、模範的市民たれと教へる。

彼の勸告は、一種の宗教的確信から出發する。帝王及び帝王より遣はされた總督は、權能、正義、慈父の如き神の屬性を身に帯びる。神にして、それを許し給はざりせば、彼等はその權を行使する事も、又、之を傳承する事も出来ないのだ、パウロは權力者の正義を豫想してゐる。『彼は徒に劍を帶ぶる者にあらず、神の役者にして惡を行ふ人に怒を以つて報ゆるものなればなり』と。

後に、歴史家ヨゼプスがローマの權力者に幻惑したやうに、彼も亦驚異の眼を瞠つて之を讚美したらうか。彼は少くとも、ローマ帝國を、諸民族の安寧秩序を保持する爲に、神より立てられた權威として

認めてゐた。彼はローマ人の組織的能力、一定不變の方針、公正なる立法精神（註九）を讃へた。東方諸國の無秩序を見聞した有識者は、何人も彼の如く考へる筈である。屢々大旅行を試みた彼は、帝國の國道と、其の他の道路との間に存する差違を、看過する譯にゆかなかつた。ローマ公民としての彼は、稀にしかその稱號を利用しなかつた。彼は、世界の支配者の一人なりとの誇を無視した。しかし、世界的帝國の存在は信仰の傳播に非常な便宜を興へた。さうして、パウロの眼には、これがローマの眞に偉大なる所以であり、將來の超自然の世界に於るローマの存在の理由であつた。

彼が、テベリオ帝の偽善、惡徳や、カリグラ帝の殘虐を知らなかつた譯では決してない。彼が此の書簡を書いた年——五六年——は、ネロ帝が既にブリタニクスを毒殺した後である。帝は更に己が生母を殺さうとしてゐた。帝は夜間如何がはしい街を徘徊したり、或は、奴隸に變裝して通行人を殺害し、或は卑賤な喧嘩の中に入つたりなどしてゐた。（註十）しかしセネカは未だ同帝の顧問の任に當つてゐた。さうしてかの道化役者（ネロ）は、寛大の假面を被つて、人氣を收める爲に無暗に恩惠をふりまいてゐた。

使徒は、その政治の大體より見て、ローマ權力を、正しいものとして、信者等に教へる方がよいと考へた。此の際、彼は、帝國とキリスト教徒等の間に、後來、衝突が生ずる事を豫想しなかつたらう

か。

彼は世俗的暴君に對する反徒のやうに、彼等を仕込まない。それよりも、むしろ、オルフェウス教徒を摸して、全然生物の肉を食さぬが如き一種の禁慾家、又は、平和の裡に日ましに隆盛となりつゝある此のローマ教會の内部に、分裂を播かうとしてゐるユデア主義者に對して警告する方が大事だつた。

彼はローマ人に、彼等が既に知り、且つ、立派に實行してゐる事柄について忠告がましい事を書いた無禮を謝する。それは、彼がすべての異邦人に對して『福音の祭務』を執行する義務があるからだ。彼は、イエズス・キリストの役者、即ち洗せられし人々の信仰を御意に適へる獻物として奉る祭司である。

同時に、彼は好便による書簡の他に、自ら其の地を訪ふ日があるだらうと約束する。彼は己が『靈的賜』を彼等に分配し、又、既に聽いた諸の眞理を、彼等に想起させるのである。

彼が未だ彼等の許に行く事を得なかつたのは、キリストの御名の知られざる諸國に、福音を宣べる必要があつたからである。されど、今日にては彼は既に、聖靈の命じ給ふた勞役を東歐に於て果した。そこには新に教會を建てる餘地は最早ない。西歐が彼を招いてゐる。彼はイスパニアに行かうと思ふ。ローマはその途上である。

彼はイスパニアの名を二度も擧げた。彼の豫定は、人間の棲む世界の西の際涯、ヘラクレスの柱のある所まで行くことであつた。また同時に、彼は他人が建てたローマ教會を、己がものとする意志は毛頭ないと云ふ事を、言外に知らせたのである。

さし當り、彼は、エルサレムに行かうとしてゐる。それはマケドニア、及び、アカヤ州の諸教會が、エルサレムの諸聖徒の爲にした贖金を持參する爲である。かく云ふはローマ人もシオンの貧民に施をするがよからう、と云ふ意味である。しかし、彼は同時に重大な危険を豫想する。

『兄弟等よ、我主イエズス・キリストに由り、又、聖靈の籠かごに由りて、我汝等に希ふ。わが爲に神に爲す祈を以つて、我と共に戦へ。これ、ユデアにある不信者より我が救はれん爲、且持行く贈物がエルサレムの聖徒等の意に適はん爲なり』と。

此の告白のうちの豫感よもぎは空しくなかつた。パウロは割禮の不要、律法の廢止を唱へてから、ユデアに於るユデア人の自分に對する憎惡怨恨が如何に劇しく、又、エルサレムに於るキリスト教徒の中にも、猜疑不信の感情がどれほど醸されてゐたかと云ふ事をよく知つてゐた。しかし、彼はそのすべてに拘らず、ヤコボ、その他の長老等の脚下に、刻苦精勵して得た愛徳の贈物を置かんが爲に、謙虛の心を以つて行くのである。

彼は今や獅子の口中に自己を投ずるのだ。しかし、彼がその最も偉大なる一面を示したのも、恐らくは此の時であつたであらう。

(註一) 第一書簡も湮滅に歸した。これは、パウロが、コリント前書、五ノ九に於て『我曾て書簡にて私通者に交る勿れと書贈りしが云々』と云つた書簡である。

(註二) 破壊的批判家の一派は、本書簡の前半と後半とに、調子の矛盾する所があると稱して、これを誇大的に主張するけれども、それは決して、本書簡の統一を傷める程度のものではない。なる程第二章に於て、使徒の口吻は寛大であるが、最後の章では『我再び至らば決して恕さじ』と云ふ。しかし、その數行後の決論は、やはり寛大な言である『是等の事を書贈るは、我が至らん時、亡ぼさん爲ならで立てん爲に、主より賜はりたる權力を以つて、あまり厳しくせざらんとてなり』と。

(註三) チモテオ前書、三ノ一に、女執事として選定すべき婦人を要する性質が記してある『婦人等も斯の如く、尊くして譏らず、節制して萬事に忠實なる者たるべし』と。女執事は、處女又は寡婦で、婦人に教理を教へ、之に洗禮を施し、貧しき婦人を扶け、又病める婦人にユウカリスタアを持參するのが、その役目であつた。

(註四) マルツキ『キリスト教考古學』

(註五) ポール・アラール『迫害史』

再びギリシヤに、ローマ人に贈る書簡

(註六) ラグランジュ『ローマ書註解』の序論参照。

(註七) ラグランジュ『ローマ書註解』

(註八) これは箴言二五ノ二一、二二の引用である。パウロは、敵に善を施して、彼を主の尊前に、更に憎むべく罰すべきものとせよ、と云ふのではない。されど『善を以て惡に勝ち』我等の敵に明白なる愛を示して、これに背くことの如何に非道理なるかを、彼等に悟らしめよ、と云ふのである。

(註九) 『我法律を知る人々に云ふ』七ノ一。

(註十) タシトウス『年紀』一三ノ二五参照。

一六、エルサレムへの最後の旅行—彼の逮捕

ユダア人の詭計について、使徒が書いた事は二重の豫言となつた。何故ならば、エルサレムで彼を待つてゐた陰謀の他に、彼は、コリントを去るすぐ前に、便乗しようとしてゐた船の上に、既に陥穽が設けられてゐたのを発見したからである。夜ひそかに船の上で彼を刺さうとしたものか、それとも、不意に海の中に投げ込まうとしたものか、それとも、何日どんな船に、金を澤山有つてゐる客が乗つてゐると、海賊に通謀したものか、その邊の詳しい事はわからない。

とにかく、その秘密を聞き知つたパウロは、すくなくも、マケドニアまでは陸路をとる事に決めた。彼は數名の同伴者と一緒に旅行をした。それは、一方に、彼を保護するにも役に立つたし、彼がコリント人に書贈つたやうに、「(コリント後書八ノ二〇) 釀金を運ぶ爲に、信用ある人達を各教會の代表者として連れてゆく爲であつた。我等は其の中の數名の名を知つてゐる。彼の助手のうちで最も熱心に働いたチモテオ、名家の人であつたベレア生れのピルロの子ソパテル(註一) テサロニケのアリスタルコ及びピセコンド、デルベンのカヨ、エフェゾの市民チキコ及びトロフィモがそれである。このトロフィモがパウ

ロと一緒にエルサレムの街を歩いて、それがユデア人の暴動の口實となつたのは後に記す通りである。

一行はテーベ、テルモピレ、テッサリアを通過した。マケドニアではパウロはフィリッピの教會で非常に歓迎されて、其處に逗留した。彼は此の教會で無酵麩の祭日を祝さうと思つた。それでチキロとトロフィモとは、トロアに先發した。釀金募集の準備を終へる爲であつたらしい。

一行はネポリスから出帆し、五日の後にトロアに到着した。

彼等は其處に一週間滞在したが、その最後の日は日曜日だったので、パウロは麩を壁ぐ爲に信者等を集めた。(註二)翌朝出發する筈であつたから、會合は夜遅くまで續いた。教會、或は高間は、家の三階にあつて、晴の集會を祝ふ爲に、夥しく燈火が點されてゐた。燈火と、多勢の人々との温氣で、部屋が蒸暑くなつた、もつとも、此の季節は、この地方では、既に暑いのである。

ユチコ——『幸運の人』の義——と云ふ一人の青年が、開け放されてゐた窓の傍に坐つてゐたが、その中に、身體の疲勞と、長い説教とに眠氣がさして、遂に居眠をして地上に落ちた。パウロの説教は、突然の出來事に中斷された。ユチコがかき上げられた時には、可哀想にもう死んでゐた。パウロはいそいで、階下に馳け下り、古、エリヤとエリゼアとがしたやうに、死者の上に伏し、その口に己が口をあて、その眼に己が眼をあて、その手に己が手をあて、横たはり、さうして立上つて、

『汝等憂ふること勿れ。彼が魂、身の中に在り』と、近親の人々に告げた。

これは、或は奇蹟でなく、單に氣絶した若者を呼び生けたゞけであつたかも知れぬ。彼は再び靜に階段を上つて、元の席に歸り、ひきつゞいて麩を壁ぎ、之を食し、曉方まで談話をつゞけてその後に出發した。

この奇妙な仕業は、明に靈感による行動だつた。ユチコを復活させたのが、主の御名によるのは勿論だが、しかしながら、咄嗟の間にした事によつて、彼のミスチンスムの中に、ユデア教的色彩の多大に存することを見て取ることが出来る。

さて、トロアから、彼は陸行してアッスに行つた。こゝにはせまい町の門が、二個の角塔の間に、今日なほ遺つてゐるが、彼は必ずこれをくゞつたに相違ない。

アッス港で、彼は再び船上の人となつた、船はミチレネを經、翌日キオスの沖合に到り、其處で一晝夜泊して、翌日サモスに着し、更にその翌日ミレトに着いて、一行は上陸した。パウロは、ミレトからエフェゾに行くことも出來た。しかしさうすると、エフェゾ人は必ず彼をひき止めるであらう。彼は急いでゐた。よきユデア人に相應しく聖都でペンテコステを祝はうと欲して、なるべく早くエルサレムに行き度かつたのだ。

しかしながら、エフェゾ、及び附近の町々の長老等は、彼が此の地を通過すると聞いて、喜んでミレトに馳せ参じた。集會は恐らくは海に近い『祈禱所』^{フチウリク}に於てあつたらう。彼等の大部分は職人とか小商人とか身分の低い人達であつた。パウロは厚い手掌^{てのひら}を彼等に示して、彼の友情の徴、勤勞の模範とした。

彼等に語つた所は、恰も危地に就かんとする者の遺言にも等しい訣別の言葉であつた。

今日、我等が讀むことが出来る彼の演説は、彼の言の一半を示すのみで、決してその速記ではない。しかし、その描き出された光景は、ユッリピデスの『アルセステ』の中で、ヘラクレスが、アドメトス王と、彼が救助した王妃と、歡喜に堪へざる臣下等に告別する一節に比して、偉大、悲壯の感に於て決して劣るものではない。しかし、其處には他種の美がある。必然に迫られて、暗い運命に向つて進むのではなく。パウロは、主の爲に、又、主の如く苦難を凌がんと、喜悅に溢れてエルサレムに上るのである。愛する人々に、地上の幸福を與へたのではなく、彼等に終なき幸福を、頒つたのである。しかも、それにも拘らず、天國の希望も、彼等の間の人間味にあふるゝ素朴、哀切な感情の流露を妨げない。

『我が小アジアに入りし最初の日より、常に如何にして汝等と共に在しかは、汝等の知る所なり。即ち一切の謙遜と、涙と、ユデア人の企畫より我身に起りし患難とに於て、主に奉事しつゝ、汝等に益する

所は毫も隠す事なく、之を汝等に知らせ、公にても、又、家々に就きても汝等を教へ、ユデア人にも、異邦人にも、神に對して改心すべき事、我主イエズス・キリストを信仰すべき事を證明したり。』

『今、我、聖靈に迫られてエルサレムに赴くなるが、〔註三〕如何なる事の我に到來すべきかは、之を知らず、唯、聖靈が（豫言者によりて）凡ての市町に於て我に保證し、告ぐるに、縲紲と患難と、我をエルサレムに待てりと曰へるのを知のみ。されども、是等の事、我も恐ろしとせず、我が行くべき道を喜びて全うし、主イエズスより賜はりたる恩寵の福音を證明するの聖役をだに盡し得ば、わが生命をも貴しとせざるべし。我は知れり、我嘗て行廻りて汝等の中に神の國を宣傳へたりしが、看よ今、汝等總て再びわが顔を見ざるべし。故に、今、今日汝等に斷言す、衆人の血に就きて我は罪なしと。〔註四〕其は神の思召を洩す所なく、悉く汝等に告げられたればなり。』

『聖靈は神の教會、即ち御血を以つて得給ひたる教會を牧せよとて、汝等を立てて群の上に監督たらしめ給ひたれば、汝等己にも、群全體の上にも省みよ。〔註五〕我は知れり、わが出立の後、群を惜まざる猛き狼、汝等の中に入らんとす。又、弟子達を誘ひて己に従はせんとて、邪なる事を語る人々、汝等の中にも起るべし』

『されば、汝等、我が三年の間、晝夜となく涙を以つて、一人一人、汝等を勧めて止まざりし事を、記

憶に止めて警戒せよ。今や、我汝等を神に委ね、又よく建物を造る事と、總て聖と爲られたる人と共に嗣たらしむる事とを得給ふものの恩寵の言に委ぬ。』

『我が人の金銀衣服を食ひし事なきは、汝等の自ら知れるが如し。そは我、及び我と共にある人々の要する所は、此の兩手之を供給したればなり。かくの如く、働きて弱き人を扶くべき事「興ふるは受くるよりも福なり」と、主イエズスの曰ひし御言を記憶すべき事を、我は萬事に於て汝等に示せり』

是等の事を云ひ終つて、彼は地に跪いて、一同と共に祈禱した一同は涙を流し、パウロの頸に抱きついて名残を惜しむた。それは、パウロが最早わが顔を見ることがあらじと告げたからである。その後、彼等は彼を船まで見送つていつた。

パウロとその一行とは、順風に送られて、ミレトからコス島に直行し、翌日ロデ島に到り、それよりパカラ市に來た。一行の便乗した船は、此の港よりさきに行かなかつたが、折よく、フェニギアに向つて出帆しようとする他の船があつたので、一行はそれに乗り替へた。船はクプロ島を左に見て、シリアに渡り、チロに到着して荷役の都合で、しばらく其處に碇泊した。

昔日の股賑の面影もない港町には、キリスト信者の小さな團體があつて、一行を迎へてくれた。七日の後、船が再び出帆するまで、一行は此處に止つた。さうして、別離の時には、信者等は、妻子等と共に

に、海邊まで送つて來て、跪いて祈つた。彼等は遠ざかる船影を見送つて、悲しげに家に戻つた。

パウロはプロトレマイスで上陸し、兄弟等に挨拶して、一日此處に止り、翌日出發してカイザリアに到着した。此處はやゝ後程、彼がキリストの爲に鐵鎖につながれて戻つて來る町である。

福音師にして執事なるフィリッポ——十二使徒が接手した七人のギリシャ語のユデア人の一人が——カイザリアの教會を世話してゐた。(註六)彼の四人の娘は童貞で豫言の賜を有してゐた。フィリッポは、自宅にパウロと弟子等とを數日間引きとめた。船の都合がよかつたのと、順風を得たのとで、ペントコステ前にエルサレムに入る爲に豫定して置いた日數が、著しく短縮された爲であつたらう。フィリッポは、ステファノや聖會の起原時を識り、主イエズスの同時代人であるので、パウロは彼の話に耳を傾けた。

彼がフィリッポの許に逗留してゐる間に、アガボと云ふ豫言者が——アンチオキアでエルサレムの飢饉を豫言した人? 「使徒行録、一一ノ二八」——訪ねて來た。彼はパウロの顔を見るや否や、使徒に近づき使徒が腰にしめてゐた帶をとつて、自分の手足を縛する状をなし、さて蕭然と形狀を改めて『聖靈曰はく、エルサレムに於て、かくの如く、ユデア人、此の帶の主を縛りて異邦人に付さん』と云つた。

此の言は、使徒の自ら云ふ所を裏書するものだつた。彼がエルサレムに行くは、艱難を受ける爲であ

る。同伴の人も、土地の人も、皆一同に涙を流して、彼に志を變ずるやうに冀つた。しかし、パウロは彼等を叱つた。

『汝等、何すれど泣きてわが心を憂ひしむる。我は、主イエズスの御名の爲には、エルサレムに於て縛らるゝのみならず、死ぬ覺悟をさへ爲せるなり』と。

試煉を従順に受けようとするパウロの心持は、遂に人々の不安を忍従に變じた。

『主の御旨の儘になれかし。』

と人々は云つた。

彼の受くべき苦楚を知つて悲むは、艱難によりて光榮に入り給ひし救主に對する彼等の信仰と矛盾するのだ。しかし、彼等が、われ知らず流した此の涙は、頑なストア哲人の自負的英雄主義よりも、もつと眞實である。

パウロのエルサレム行は、イエズスが犠牲の羊は己なることを知りながら、過越祭に聖都に上り給うた事を想起させる。しかし、パウロは、其の後に起るべき事件について、不完全な智識しか有つてゐなかつた。刑罰の場に行く不安よりは、むしろ、一種の神聖な喜悅が彼の心に溢れてゐた。間もなく己にふりかゝる災禍は、まだ自分を殺しはしない、自分の使命はまだ終らない、と彼は直覺した。

エルサレムに到着すると、一行は、ムナソンと云ふクプロ島生れの『舊い』弟子の家に、旅装を解いた。パウロは、エルサレムに一人の姉妹があつて、その息子が、獄につながれた叔父の爲に奔走するのであるが、何故、彼がその家に泊らなかつたか、など、詮議するのは無用の沙汰である。

彼は差迫つた大切なことを考へてゐた。それは、ヤコブ及び長老等との會見である。そこで、翌日、彼は、すぐにヤコブを訪問した。エルサレムの重立つた信者等は、皆、この席に招かれた。彼が長老等の足下に、諸教會の醜金を置いた事は、想像するに難くない。彼は異邦人等の好意、熱心の證據を持参したのである。會衆は快く、彼が『己の聖役によりて、異邦人の中に神の爲し給ひし事を具に語る』のを聞いた。

長老等は、彼が爲した偉大な業について神を讚美した。しかし、その數名は、パウロのユデア人的誠意を試ると共に、ユデア人の暴舉を防ぐ目的を以つて、彼に次の信心を勧めた。

『我等に誓願を有せる四人あり、汝彼等を引取りて共に身を潔め、且、費用を辨じて、其の頭を剃り得させよ。然せば、人皆、汝につきて聞きし所の僞にして、汝自ら律法を守りつゝ歩める事を知るべし』と。

誓願を果すことを得なかつた四人の貧しい人は、ナジル人であつた。(註七) ナジル人は少くとも卅日

間自己を神に獻げ、三の義務を伴ふ誓願を立てた。即ち、葡萄及び葡萄酒を用ひざる事、頭を剃らざる事、死者に觸れ、若くは、近づきて穢れざる事それである。此の中でも、最後の事が一番守り悪かつたらしい。ナジル人は、死者を埋めてある土地を歩めば、すぐに穢れた。さうして、以上の三の義務の一に背けば、假令、知らずとしても、三十九の鞭打を受け、二羽の雉鳩若くは二羽の雛鳩を神殿に獻げ、更に誓願を立て直さねばならなかつた。

誓願中は、ナジル人は頭髮を切ることが出来なかつた。さうして、誓願の期が満ちると、これを剃つて、自分の名に於て獻げる犠牲と共に之を焼いた。此の犠牲も仲々高價な品であつた。何故ならば、モイゼはそれを一歳の小牡羊、一歳の小牝羊及び一頭の牡羊と定め、なほ其の他に無酵麪及び菓子の一籠が必要だつたからである。それ故、ナジル人が貧しくて律法の規定を實行する財力のない場合には、彼等は他の富めるイスラエル人の援助を乞うた。

パウロは、少しも躊躇せず、長老等の希望に應じた。

『斯てパウロ、かの人々を引取り、翌日身を潔めて、共に神殿に入り、面々の爲に供物を爲さんとて、潔の期日を定めたり。』

好奇心に富んだ註釋家は、彼が四頭づゝの小牡羊、小牝羊、牡羊及び、其の他の品物を買ひ備へる金

錢を、何處から得來つたかと詮索するが、それよりも、どんな心持でモイゼの規定した信心に與つたかそれを研究する方が大切である。

彼の動機は明瞭である。それは、決して、ユデア人の環境に適應する爲の妥協、誤魔化しでもなく、又、多勢の巡禮者に紛れ込んで、豫期の陰謀より逃れようと云ふつもりでもなかつた。

又、彼は、謙遜な痛悔者として服従したのでもない。否、彼は、巡禮として神殿に來たのだから、それ故、信心の業に與る事は、極めて自然であつたのだ。自ら充たすを得ざる誓願に束縛せられた貧しい人を助けることが、何で、彼の福音に矛盾しよう。

律法とその規定との破壊が、彼の念願ではなかつた。此の善行は根本的の主張と背馳せざる範圍に於て、彼が父祖の神聖なる規定に従ふ者なることを、彼の兄弟等及び彼自身に對して、證したのである。彼は、此の行爲の中に、神祕的の喜悅をさへ感じたらう。ナジルの願ではないが、彼自らもコリントを去るに際して一の誓願を立てた。恐らく、神殿で、一般の形式に従つて、之を果さうと考へてゐたのであらう。

それだから、自分の庇護者なる四人のナジル人と共に、司祭の前に出でた時には、彼は、全然敬虔なユデア人の態度であつた。彼はそれに解放的の愛の心持を交へた。彼、司祭等よりも、『羔の犠牲』の意

味をよく知つてゐた。且、彼は、常に迫害の裡にあつて、自己の生命を、よきナジル人等の救済の爲、イスラエルのその爲に獻げてゐたのである。

頑固な偏見者ならば、自説に反する行爲を決して承認しなかつたらう。毎日、パウロが繰返して云つてゐた言は、彼の行爲を否認したかも知れぬ。『我は總て割禮を受くる人に證明す、彼は悉く律法を守るべき負債あり』〔五ノ三〕と、ガラチア人に書贈りし言は、彼が絶えず、異邦人及びユデア人に反覆した所である。律法の一條の規定を守ることが、やがて、それ悉くを完全に守る約束である。

彼は、律法に對する以上の服従を、實際に欲し、且、實踐したであらうか。律法は最早必要ならず、義人は信仰によりて生くと、彼は屢々言明したではないか。而して、古い信仰の中で、不要となつた事柄は、速に無益となり、馬鹿氣たものとなるではないか。

しかしながら、教會は、急激に、ユデア教より分離すべきではなかつた。祈禱、祭式の形式、祭典の方面に於ては、完全な分離は決して行はれない。すべての有機的創造に關する『自然は飛躍せず』との原則は、或意味に於て、超自然的事實にも適用される。舊約聖書の中には新約が胚胎されてゐた。イエズスは律法を廢する爲ならずして、之を成就する爲に來たと宣うた。主自ら律法の規定の主要なる部分に服されたのは、その聖なるを確認し給うたやうなものである。主の弟子なるパウロは、尊い起源を有

し、心懸次第で、裕に神の恩寵を蒙るを得る、此の祭式を實行する事について、何等の躊躇も感じなかつた。ナジルの誓願は、敬虔なる信者が『永遠なる御者に全く身を委ねる爲に一時世間を棄てる、一種の修道的獻身の形式であつたのである。』(註八)

そのやうな次第で、『かく我は行動して妨なきや』との疑句は、彼の良心に湧き上らなかつたらしい。心の中の聲は彼にこれを命じた。神殿に上りて、前以つて、代價を支拂つて置いた豫定の儀式に列り、其處で祈り、公然と犠牲を獻げるのは、正に讐敵の來襲を待つやうなものである。しかし、パウロは、聖靈が彼に之を求め給ふことを知つてゐた。神が奈邊まで迫害者の手を延ばしめ給ふか、彼は、それについて、無關心であつた。さうして、一般の巡禮がするやうに、極めて自然に振舞つてゐた。

再び神殿を仰ぎ見て、世界の終末に至るまでも、揺ぐことあるまじと見ゆる、華麗宏壯な建築の前に彼は一種の昂奮を覺えたであらうか。彼は主の豫言を知り、『神の御怒の彼等の上に及びて、其の極に至りし』事を感じたのである。

彼が異邦人の庭を過ぎて、その奥の一段高いユデア人の庭に入つた時、イスラエル人たるの誇が、彼の解放された心に觸れたらうか。其處には、ギリシヤ語と、ラテン語とで左の揭示が書いてあつた。

『異邦人は、聖所及び周圍の建物を廻る欄干てすより内部に入るべからず。捉へられたる者は、自己を下の

刑に處する者なり。曰く、死。』

異邦人の排斥は、過去に於ては正しかつたが、しかしそれは、イスラエルの匡すこと能はざる誤謬の證だと彼は思つた。それでも彼は、異邦人を（假令洗禮を受けた人でも）神殿の内部に、連れ込むやうなことは、決してしなかつたが、ユデア人等が彼を攻撃し、暴動を起した口實はこれであつた。

ペンテコステの祭日を祝ひに聖都に集つた巡禮の中には、エフェゾから來たユデア人も居た。彼等の中に、偶々、パウロが、異邦人なるエフェゾのトロフィモと、市街を歩いてゐたのを見掛けた人等があつた。彼等は『彼はギリシヤ人を神殿に入らしめたり』と云ふ恐ろしい評判を立てた。

パウロがナジルの犠牲を獻げる爲に、神殿に上つた日に、恰度、彼等は彼をイスラエルの庭で發見した。彼等はすぐに階段の上の欄干の所から、下の庭の群衆に向つて、『助けよ、イスラエルの男子等、是、到る處に人民と律法と此の所とに反する事を人々に教へ、此の聖所を穢せる者なり』と怒鳴つた。

パウロはこれに答へて辯解しようと試みた。しかし、下の方から、群衆が大濤のやうに階段に押し寄せて來て、彼を捉へて神殿の出口に引きづつて行つた。境内で人を殺して、神殿を汚すまいとの用意であつたのだ。神殿の守衛や、レヴィ人は、暴徒が北の門から出てしまふと、すぐに扉を締めて、鍵をかけた。パウロがまた入つて來ないやうに、或は、群衆に追はれて聖域の内部で殺されないやうに防いだ

のである。

暴徒の手中に陥つたパウロの死は、既に避け難い運命と思はれた。ところが折よく、神殿を警備する爲のアントニア兵營のローマ兵が群衆の叫喚と騒擾とを發見した。

『エルサレム全く亂れたり』と兵卒は守備隊長に報告した。隊長は、急いで、居合せた百夫長等と兵卒等を引連れて、廣場へ通ずる二條の階段を馳せ下り、劍を抜いて、群衆の間を突進した。パウロは罵り哮る暴徒の真中に、血だらけの顔をして立つてゐた。しかし、彼の面上には、些かの恐怖の色も浮んでゐなかつた。

『何を爲しよぞ。放せ。我等に引渡せ』と隊長が劇しく叱咤したので、荒れ狂ふユデア人も、思はず手をゆるめた。

しかし、口々に叫び罵る喧々轟々の聲に没して、何人が如何なる犯罪の爲に殺されようとしてゐるのか、少しも解らなかつた。たゞ、隊長は、その容易ならぬ事態を察して、用心の爲、及び群衆を鎮める爲に、パウロの両手に手枷を嵌めて鐵鎖でしぼり、兵營に拘引するやうに命令した。

兵卒がパウロを引き立て、アントニアに通ずる石段を上る際にも、騒擾の首魁者等は、彼が手中より脱したのを見て、群衆の方を顧みて『彼を殺せ、彼を殺せ』と煽動したので、ローマの兵卒も、あは

や暴徒の渦中に巻き込まれさうになつた。囚人の鐵鎖を握つてゐた二人の兵卒は、彼を奪還される事を恐れて、鐵鎖の他端を自分等の手首に結び付けた。

守備隊長（彼はルジアと云つた）は、不安を感じながら、兵卒等の後から、石段を上つた。彼はギリシャ人で、アントニアの兵營の指揮に當つてから、まだ日が浅かつた。彼は日ごろ「ユデア人の憤怒」を恐れてゐた。殊に、祭日に當つて、宗教的に昂奮し切つたユデア人が、國民的狂信にいやが上にも驅られる事があるのを知つてゐた。數ヶ月以前に、エジプト生れの或ユデア人が自らメシアなりと稱して、エルサレムを占領しようとした事も聞いてゐた。その時には、數千人の破落戸が、沙漠の中から彼に隨いて橄欖山まで來た。（註九）偽メシアは、エルサレムをローマ人の手より奪ふ心算で、昔、ヨスエの吹かせた喇叭の響にエリコの城壁が崩落したやうに、自分の聲でエルサレムの城壁が崩れると云ひ觸らした。總督フェリクスは、ユデア人の協力を得て、騎兵と歩兵とを繰り出して、反徒を追ひ散らした。しかし、彼等の首領は巧に跡をくらました。それ故、ルジアは、パウロに對する群衆の憤怒を見て、これが例の「エジプト人」だ、と思つたのである。使徒も、其の時、衣服は破れ、頭髮は亂れ、塵埃にまみれ、唾に汚されて見る影もない状態に相違ない。パウロは、それまで、一言も口を開かなかつた。又、何を云つたとて、到底無駄であつた。が、階段を上り切るや、突然、丁寧に、しかし強い語調

で、隊長に問うた。

『我、汝に語りてよきか』と。

隊長は、ギリシャ語で、しかも、教養のある人の調子で、話しかけられて一驚を喫した。此の囚人は、野蠻な東國の方言しか知らない彼の強盜、沙漠の無賴漢ではなかつたのだ。

『汝、ギリシャ語を知れりや、汝はエジプト人にあらずや。』

パウロは落付いて誇りがほに答へた。

『我、實はシリシア州のタルソ生れなるユデア人にして、隠れなき町の公民なり。乞ふ、人民に言ふ事を許せ』と。

殆ど靈感の如く、彼の念頭に崇高な思想が湧上つた。神殿に對つて、キリストを宣言し、知らずして憎める『兄弟等』に説法しよう、と。全くイスラエルを代表する爲には、エルサレムのユデア人と、その司祭等と、デアスポラのユデア人とがあり、異邦人を代表する爲には、ルジアと百夫長と兵卒等とが居る。聽問者に不足はない。

隊長は、囚人の辯舌が、どれだけ効果を收めるだらうかと、好奇心によつて、それを許可した。パウロは、鐵鎖が稍寛められるのを待ち、なほ未だ啐り狂ひ、拳と棍棒とを振上げてゐる群衆の方に向き

直つた。彼は、手枷のまゝ両手を上げて、演説する恰好をした。

禿頭から湯氣を立て、汗をかき、引裂かれ、塵埃にまみれた衣服を着、眼光炯々として焰の如く、純白の巨大な兵營を後にして立つ小男は、此の時、俄然、古豫言者の風貌を示した。彼の眼つきにも、彼の手真似にも『最高き者』の使者たるものがあつた。

彼は、わざと、ユデア人に固有な、アラメアン語で演説を始めた。

『兄妹にして父たる人々よ、我が汝等に述べんとする事由を聞け』と。

彼の力強い聲で話すヘブレオ語の響を聞いて、怒號罵聲は眩きと變り、やがて、俄に深い沈黙が廣場を領した。

パウロは、またもや、自分の青年時代の誤謬と、彼の迷妄を破つた異象との話をした。パレスチナのユデア人に對する辨解として、彼は自分が、最初如何に熱心にファリサイの傳統を守つたか、又、これを破りし者を如何に迫害したかを説明した。彼の言行に關しては、その當時の司祭長、並に、衆議所の議員等が、保證してくれるだらう。しかし、ダマスコに到る途上に於て、彼はイエズスに敗かされて、『先祖等の神』の思召に服従したのだと。舊新兩約の神の同一なるを示す、彼の言葉の崇高偉大なる事よ。

それならば、何故、恰も、神殿と兄弟等とを避くるが如く、エルサレムを去りて、遠くに布教せしぞ。それは、神殿その中に於て、他の異象を以つて、神が之を命じ給うたからである。

『往け、我、汝を遠く異邦人に遣はすべし』と。

この時までは、氣を吞まれたやうに、聴衆は一言も云はなかつた。しかし、この『異邦人』と云ふ一詞を聞いて、ユデア人の自負心と、外國人に對する憎惡とが、俄かに目を醒した。暴徒等は、また『彼を殺せ、彼を殺せ、彼は活くるに足らず』と叫びだした。

彼等は無意味な怒聲をあげて、上衣を引摩き、これを空中に投げ上げたり、地團駄を踏んだり、砂をつかんで、パウロの方に投げ付けたりした。

隊長には、何故、此の演説が、このやうにユデア人を怒らしたか、よく解らなかつたが、其の儘には棄て、置けなくなつたので、兵卒に合圖をして、囚人を營庭に率入れさせた。營門は鎖された。どうする事も出来ぬ暴徒は、相變らず下の方で怒鳴り續けた。

隊長は痼癢を起して、さうして、此の暴動の張本人にそれを破裂させた。彼は、パウロを、奴隸のやうに十字架につけて殺しても差支のない無頼漢だと思つた。こんな群衆に憎まれるのは一體どんな罪を犯したからか。それをパウロに訊問する代りに、彼は拷問せよと百夫長に命令した。百夫長はパウロ

を机に縛した。足がやつと地面に付く位に、両手を縛つて高く吊上げ、着物を脱がせた。悪漢に罪状を白状させる時に使ふ恐ろしい答を手にした二人の兵卒が、パウロの両側に歩み寄つた。

パウロは苦痛を畏れなかつた。彼の肉は、既に答の味を知つてゐた。肉は苦痛の爲にわなゝいても、心の中には喜悅があつた。両手で杭に吊下げられ、背を刑吏に向けてゐる彼は、同じ答刑を受けんが爲に、石の柱に縛せられた主イエズスの御姿に似奉るのである。しかし、彼の殉教の日は未だ來ない。彼にはまだ此の世にしなければならぬ仕事が残つてゐる。黙つてゐれば、恐らくは彼は打ち殺されるであらう。彼は杭の傍に立つてゐた百夫長に問ひ掛けた。

『ローマ人にして、而も宣告せられざる者を汝等が鞭うつ事よきか』と。

百夫長は驚いて、ルジアに報じた。隊長は自分でやつて来て、パウロに尋ねた。

『我に告げよ、汝はローマ人なりや。』

『然り』と、パウロは答へた。さうして、自分がローマの公民なる事の證據を見せたに相違ない。

隊長は自分の失策の重大なのに氣が付いて、急いでパウロの縛を解いた。さうして、彼を慰撫するつもりで、心やすげに話しかけた。

『我は大金を以つて此の公民權を得たり』(註十)

パウロは威嚴を落さず『我はなほ生れながらにして然り』と答へた。

彼の毅然たる様子は、ます／＼ルジアの困惑を増した。ルジアは一方にローマ公民たる此のユデア人の復讐を恐れたが、同時に、エルサレムのユデア人等の憤怒をも憚つた。パウロに答刑を與へようとしたのも、彼等の機嫌を買ふ爲だつた。もしも、ローマ官憲が、蛇蝎の如く嫌はれてゐる此の男を保護すると解つたならば、彼等は如何に荒れ狂ふかも知れぬ。そこで此のギリシヤ人、高慢で自惚が強く、煽動家で外交家なるルジアは、一策を案じた。因人を衆議所に出してやらう。これは、昔日の權利の恢復を夢みる議員等の歡心を買ふに都合がよい。さうして、もしユデア人等の争が、單なる宗教問題だつたならば、カイザリアにゐる總督の手でパウロを放免してもらへば、それで済むのであると。しかし、ルジアの後々の行動を見れば、彼は確に使徒に對して好感を抱くやうになつた。彼は、パウロの眞率と善良とを認めて、彼を尊敬しだした。

翌日、彼は、衆議所にパウロの訊問の爲に、集會するやうに、通知した。衆議所では、司祭長アナニアが、自らそれを司會した。此の老人は、札付きの貪慾で、いつも自分の奴隷に命じて、神殿にて犠牲を獻げる人々から、その幾分を取上げさせたり、命令を聽かぬ司祭等を鞭で打たせたりなどした。さうして、この野蠻な、皮肉なサドカイ人は、肉的の享樂と、金錢と、自己の階級の特權との他には、何

も信じてゐなかつた。

パウロが出頭したのは、嘗て、脱魂エクスタシスに陥つたステファノと、切齒して耳をふさぐ裁判官等とを見たその處と、同じやうな半圓形の大廣間だつた。あゝ、昔は、彼も裁判官等の罪惡に加擔したのだ。しかし、彼はその苦しい記憶をこゝでは現あらはに出さなかつた。彼は自分を裁く爲に居並ぶ人々に、自分の奉ずる宗教を裁斷する權利を認めない。しかし、彼等を兄弟として、その盲目を癒さんと希うた。

彼は何の訊問をも受けない前に、

『兄弟たる人々よ、我、今日に至るまで、良心を盡して神の御前に事へたり』と云つた。

司祭長は『兄弟』の一語を聞いて、無禮だと怒つた。彼の小吏に命令した。

『口を擲て。』

パウロは此の命令を耳にした、が誰の言葉か聞きわけなかつた。彼が果して打たれたか、それとも次の返事で防いだか、それは解らぬ。返事は劇しく、強かつた。

『白塗の壁よ、神は汝を打ち給はん。(註十一) 汝、律法のまゝに我を審かんとて坐しながら、律法に反して命じて我を打たしむるか』と。(註十二)

これは、誠に不思議な、且、恐ろしい應答だつた。パウロは、司祭長なるアナニア自身に向つて云つ

たのだと知らなかつた。しかし、彼はそれと知らずして豫言したのだ。この豫言は後に成就した。紀元六六年九月十七日、アナニアは反亂者に追はれ、その兄弟、エゼキアと共に水道の中に潜んでゐたが、遂に捉へられて刺殺された。(『ヨゼフス』『ユデア戦記』二ノ三一)

小吏等は『汝、神の大司祭を咀ふや』と周章して、彼を叱責した。

『兄弟等よ、我その大司祭なる事を知らざりき(もし知らば、我は黙したるべし)蓋し、録して、汝が民の君を咀ふ事なかれ、とあり』と、パウロは答へた。(『田埃及記』二二ノ二八)

アナニアの暴言は、彼の全身に聖憤の火を點じ、これに豫言者のインスピレーションが加はつたのである。アナニアは、イエズスに死を宣したアンナの一族で、パウロの口から、來るべき刑罰の宣告を聞いたのだ。今、パウロは、司祭長等が、律法を守る口實の下に之を冒瀆し、之を破壊する矛盾と偽善とを、イエズスの如く責めたのである。

しかし、パウロは直ちに己が舌を制した。彼は弱者を躓かせたくなかつた。律法を蹂躪するの故に責めらるゝ彼は、喜んで之に服従する者である。

裁判は其の後どうなつたか。總督に宛てたルジアの書簡によれば、裁判は變じて神學の爭論となつたらしい。其處に居たファリサイ派の人々は、サドカイ派の連中と議論をしだした。前者は來世の生命を

認めるが、後者は之を信じない。パウロは機會を捉へて、彼等の爭論の中に、キリスト教神學を投げ込まうとした。

『兄弟たる人々よ、我はファリサイ人の子にして、ファリサイ人なるが、死者の復活の希望の爲に裁判せらるゝなり』と。

彼は、復活し給ひしキリストの御名を告げようとしたのである。

パウロのやり方は正であつた。百夫長等と兵卒等とを従へて、臨席してゐた守備隊長に、被告の無罪なるは極めて明瞭になつた。且、パウロは一言を以つて、ファリサイ人とサドカイ人との激論を惹起したのだ。

しかし、その爲に、猛りに猛つたサドカイ人は、彼を憎むの餘り、あはや大事に至らうとした。隊長は、始め、彼を保護する状を見せなくなつたので、彼を、議員、書記、小吏等の間に、單身で衆議所の大廣間に立たせて置いた。それで、幾人かのサドカイ人は、席を離れ拳を固めて彼を取圍み、すぐにも外方に牽き出して、その場で首を締めさうになつた。ルジアと兵卒等とは、やつとこのことで彼を救ひ出した。かくて、パウロは、恙なく死の窟より脱れ出た。ローマが彼をイスラエルの手より救つたのである。

此の二日間の騒ぎで、彼はぐつたりした。さうして、その晩、『立ち去りて、キリストと共にあらん事を望む』と云ふ、例の落膽の發作が起つた。彼は、眞理に對して頑なるユデア人の心を、その指導者等の間に親しく目撃した。又、更に再び、彼等の手中に陥る時の運命も、明に測り知られた。しかし、主は彼を獄中に訪ね給うて宣うた。

『勵め、蓋し、エルサレムに於て我を證したるが如く、ローマに於ても證せざるべからず』と。けれども、ユデア人等も、徒らに袖手傍觀する者でない。パウロは、神殿の中で犯した罪によつて訴へられたのだから、衆議所に裁判權があると主張した。司祭長等は、詳しく取調べると云ふ口實の下に、もう一度、彼を呼び出さうと試みた。

彼等の目的は、彼を片付けてしまふ事である。翌日、最も彼を憎むユデア人等は『パウロを殺すまでは飲食すまじ』と咀ひ、且誓つて徒黨を組んだ。(註十三)一同は司祭長等を訪ねて、この陰謀に加擔し、パウロを衆議所に召喚せよ、我等はアントニア兵營と神殿との間の途に擁して、彼を殺害せんと申した。

此の陰謀に加はつたものは、四十名以上だつた。しかし、中に祕密を洩らしたものがあつたか、或は、衆議所で『我等此の人に何等の惡をも認めず』と、パウロの肩をもつたファリサイ人の或者に計劃

を嗅ぎつけられたか、その邊は不明だが、とにかく、パウロの甥がこの計劃を聞いてしまった。彼は急いで兵營に行き、叔父に逢ふ許可を得て、これを告げた。パウロは、一人の百夫長に、青年をルジアの許に導かんことを乞うた。ルジアは快く青年を引見した。さうして、祕密を聞いて、

『此の事を我に告げたりと、誰にも語る事なかれ』と彼に命じた。

ルジアはパウロを助けたい、厄介な此の囚人を、手許から送り出したいと思つた。彼は二人の百夫長を呼んで

『汝等カイザリアに向けて、兵卒二百人、騎兵七十人、鎗持二百人を、夜の九時より仕立てさせ又、馬を備へてパウロを乗らしめ、無事に總督フェリクスの許に伴ひ行かしめよ』と命令した。

パウロを免すべきか否かは、總督一人の権限内にあつたのである。なほ隊長は騎兵を指揮する士官に命じて、次の書簡を總督に齎らしめた。

『クラウジオ・ルジア、最尊き總督フェリクスに挨拶す。

此の人、ユデア人に捕へられて、既に殺されんとせしを、我そのローマ人たる事を聞き、軍隊を率き往きて救出したるが、彼等の之を咎むる所以を知らんと欲して、之を其の議會に召連れたるに、我は、その訴へらるゝ所が、彼等の律法に關する問題たるを認めて、聊も死刑若くは入獄に當る罪あるを認め

ず、加之、彼等之を害せんとする企ありと告げられたれば、之を汝の許に送り、告訴人にも、汝の法廷に起訴せよ、と告示せり。汝、健康なれ。』

パウロの護送の爲に動かされた兵卒の數は莫大なもので、すこし滑稽に思へるが、説明の出來ぬ事はない。ルジアは、極端に、ユデア人を怖れてゐたのだ『誰にも語る事勿れ』との一言が彼の不安を裏切つてゐる。告訴人をして、フェリクスの法廷に起訴させると云ふのも、同一の意味に解釋が出来る。彼は自分の周到な用意を證しようとするのである。我等は、誇張しやすい東國人と、虚勢を張つて、その癖、卑怯で柔弱な頽廢期のギリシヤ人との面影を、彼に見出す事が出来る。彼の報告も、亦、一點に於て、事實を瞞つてゐた。彼の言によれば、ローマ人なりと聞いてユデア人の手よりパウロを救つたこととなるが、その實、彼は其の際毫も之を知らなかつた。又、どうして火急の際、之を知り得たらう。しかしながら、彼、即ち高價を支拂ひ、此の稱を買うてから日淺いローマ公民たる彼は、如何に此の稱號を重んずるかと云ふことを、總督に見せたかつたのである。その夜、パウロは、驢馬か駱駝に騎して、恰も王者の護衛兵にも等しい數の兵卒に前後を護られて、エルサレムの山を下つた。最早、彼が再び此の聖都を見ることがあるまい。しかし、ローマが彼を待つてゐた。彼をめぐり、彼を護衛する士官兵卒の一團は、既に信仰に事へるローマの權力である。恐らくは明日、彼等の間にキリスト教徒がある

であらう。彼等はパウロを兄弟と呼び、共に聖愛のパンを擘き、使徒としての彼の手の下に跪き、彼の言を神の言として聴くに至るであらう。囚人はその實、征服者として門出するのである。

(註一) 父の名を擧げられてゐるのは、名家のしるしである。

(註二) 日曜日は、その時分には、なほ週の第一日と呼ばれてゐたが、安息日の代りにキリスト信者に守られてゐた。彼等は其の日に主の復活を記念した。黙示録(一ノ九—一一)に主日とあるのは日曜日のことである。

(註三) この語はあまり明瞭でないが「自ら既に囚人と思做して」或は「内部よりの衝動に驅られて」の意味であらう。

(註四) 或は汝等の救靈の爲に爲すべき事を悉く盡したれば、假令汝等にして救靈を得ざることあるとも、我の關する所にあらずとの意である。

(註五) 監督とは、當時では長老と同意語であつたが、より完全なる司祭職の意を含んでゐる。

(註六) 福音師とは、使徒、若くは豫言者と云ふ稱呼を有せずして、町から町へ救主なるイエズスを宣べ傳へる信者の稱であつた。

(註七) ナジルの誓願については民數記略第六章を見よ。

(註八) ファール『聖パウロとその布教』参照。

(註九) ヨゼフス『ユデア戦記』二ノ二三には、その人數が三萬とあるが、使徒行録には四千とある。これは後者の方が正確であらう。ヨゼフスは常に數字を誇張する癖がある。それに同じヨゼフスの『ユデア古代史』二〇六によれば、此の際、反徒を散亂させる爲には、四百人を殺し、二百人を捕虜にしたので足りた、とある。

(註十) クラウドオ帝の時代には、ローマは、金錢を以つて外國人にその公民權を賣り、莫大な利益を收めた。

(註十一) 大いなる不義の象徴として白塗の坐なる語は、エゼキエル一三ノ一〇を暗示するが、それは衆議所を司る者の白い上衣、その老年、ことにその偽善を表はすのである。

(註十二) ユデアの傳法は、被害を尊重し、その辯解を許した。レビ記、一九ノ一五参照。

(註十三) この誓の言は到底行はれさうに見えないが、それは、要するに『一刻も早、パウロを殺さん』との意味である。ユデア人等はよく、かゝる誇張を用ゐて誓願した。ヤコボも、主の復活し給ふを見るまで飲食すまじと誓つたことがある『凡て飲食すまじと誓ふ人は、食しても、食せずしても禍なるかな。食せば誓願を傷ひ、食さずば己が身を傷ふが故なり』アボダ・ザラ。

一七、セザルに上告す

ヘロデが建てたカイザリアは、ローマ風の市街で、海岸には背の高い倉庫が並んでゐた。峻しい丘陵の中腹に建つてゐる家屋は、大方イタリア風の建築で、ポンペイに見るが如く、樹木を植ゑた中庭をめぐつて柱廊があつた。町の中にはローマ皇帝の像や、神殿があつた。聖パウロが幽閉された宮殿の塔はローマ式の城の塔で、その壁の一部分は今日まで残つてゐる。

彼は七十人の騎兵に護送されて、夕刻に此の町に着いた。(彼等はアンチパトリよりカイザリアまでの廿六哩を、次の日の晝間に行つたに相違ない)。兵卒、鎗持等は、暴徒の埋伏の恐があつた山路を無事に通過すると、アンチパトリからエルサレムに引返へした。

總督のアントニオ・フェリクスは、隊長からの書簡を披見してから、パウロを召喚した。彼は、まづ第一に、パウロの生國をきいた。パウロは、旅行の疲労にも拘らず、即座に辯解して青天白日の身となり、イタリアに向つて出發したかつたが、フェリクスは『汝の告訴人來りて後汝に聞くべし』

と云つて、彼に取りあはず、審問を後日に延期した。

はじめて彼と接觸した時から、總督は、使徒の凡人ならざるを感じて、警戒を شدしたのである。

このフェリクスはアルカキア生れの奴隷出身で、最も腐敗した官吏の一人であつた。タシトスは、『あらゆる殘虐と淫蕩との中にありて、奴隷根性を持ち、王者の權を專にせり』(『歴史』五ノ九)と彼を批評したが、實際その通りであつた。

彼が解放されたのはクラウディオ帝の御蔭であつた。帝の寵臣パラスが彼の兄弟だつたので、彼は意欲する所、何一つとして叶はぬものがないやうに感じてゐた。彼はアジズス王の妃、ドルシムラを奪つて自分の妻としたり、殺人犯人と通謀して掠奪品の上前をはねたり、司祭長等を刺客より保護してやつて利益を収めたりした。

パウロの事件に於ても、彼は、いちはやく、其處に複雑な利害關係があり、儲口があるのを見て取つた。パウロをすぐに放免せず、ヘロデの宮殿内に幽閉したのも、其の爲であつた。

エルサレムでは、ルジアは、アナニア及び其の他の重立つたユデア人に、總督の許に告訴せよと云ひ渡した。ユデア人等は、すぐに、その手配をした。五日の後、カイザリアに、衆議所の代表者が、テルトルロと云ふ一人の若いローマの辯護士を連れてやつて來て、パウロに對する告訴を總督に提起した。

翌朝、囚人は法廷に引き出された。テルトルロは口を開いて、パウロを訴へ衆議所の代表者の言を、ギリシャ語に通譯した。

彼はまづローマの高官に對する恒例の阿諛を以つて始め、その庇蔭によつて、ユデアが泰平を樂んでゐることを述べ、一轉して、急に、此の人は疫病の如き者にして、世界到る處、凡てのユデア人中に騒亂を惹起し、ナザレト人の一揆の張本であると云つた。さうして、パウロが神殿を汚さうとしたので、ユデア人は彼を捉へ、彼等の律法に従つて裁判しようとしたのである。然るに、隊長ルジアが不意に來て、暴力を以つて彼を奪ひ、總督の許に告訴せよ、と彼等に命じた、と付加へた。

テルトルロが云はんと欲して、しかも敢て言明しなかつた結論は、『此の人の裁判權は我等にあれば、之を我等に引渡し給へ』と云ふのであつた。

アナニア一派の代辯人たるテルトルロの告訴の仕方は拙かつた。憎惡、憤怒を抱く者は、いつもさうである。衆議所員等はローマの隊長の不公平を訴へて、總督の心證を害してしまつた。パウロの辯解は容易な事だつた。彼もまたフェリクスに對する禮儀を以つて始めたが、しかしそれは極めて上品な次のやうな挨拶であつた。

『我、汝が多年此の國民の上に判事たることを知れば、快く辯解せん』と。

彼がエルサレムに上つたのは禮拜の爲である。彼が七日間聖都で何をしておたかは、調べてみればすぐ明白となるであらう。彼は神殿で他人と議論したことがない。又、會堂、若くは市中で騷擾を起したこともない。さう云つて、彼は告訴人に證據の提供を迫つた。彼はまた言をついだ。

『然しながら、我汝に自白せん。即ち、我は彼等が異端と呼べる道に従ひて、わが先祖の神に事へ奉り、凡て律法、及び豫言者の書に録したる事を信じ、彼等（ファリサイ人）自らも待てる義者、不義者の未來の復活を、神に由りて希望するなり。我は之によりて、神に對し、又、人に對して、良心を常に咎なく保たん事を努む。數年を経て、我はわが國民に施をなし、且、供物と誓願とを爲さん爲に來りしが……』

此の辯論の大體を見ても、パウロの論法の單純であり、確實である事が解る。キリスト教の『道』は律法に對する反逆ではない。彼の復活と審判との説には、何等の新奇も異端もない。しかし、彼はユデア人が誤解し否定する審判者、復活したるキリストを彼等に教へんと欲したのである。

が、フェリクスの前では、彼は其處まで論ずることを得なかつた。總督は、すでに『ナザレト人』の主張を熟知してゐたから、パウロに、彼の辯解はそれで充分だと云つた。ユデア人の苦情の筋の立たないことは解つたが、しかし、アナニアや、其の他の重だつたサドカイ人の感情を害してはならぬ。さう

考へたから、彼はパウロに無罪を宣告する代りに、

『千夫長ルジアの下りて後、汝等に聞かん』

と云ひ渡し、なほよく事情を聞き質したいから、との口實の下に判決を延期した。

其の後、パウロは、相變らずヘロデの塔内に幽閉されてゐたが、彼を護る百夫長は、彼を寛かしくしめよ、との命令を受けて、鐵鎖が外され、友人等の差入れ及び訪問が許可された。福音師フィリッポを始め、カイザリアの信徒、及び、ルカ、チモテオ、テサロニケ人アリストタルコ等も、相踵いで彼を訪ね、エルサレムの報りを齎らしたに相違ない。使徒にとつては、福音を宣べ、説教し、指導する事が、その全生命である。在獄の數年間と雖も、彼の太い聲が響かない日は、一日もなかつた。太陽の光線も通らぬ狭苦しい地下の窖に入れられても、彼はキリストの光榮を讚美し、教會、即ち、主の神祕的身體の爲に、主の受難の足らざる所を補うた。ローマ公民たる彼の身分、他人を説服する一種の魅力は、彼に自然に人々の尊敬を蒐めた。かくて、何處に行つても彼の獄舎は彼の説教壇となり、悲惨なる境遇は、却つて彼の教を擴大する道具となつた。

カイザリアの牢獄でも、彼はフェリクスの側近の人々、遂には總督にまでも、影響を及ぼした。ドルシラも、好奇心に驅られて、彼に逢ひ、その話を聞きたいと思ひ出した。彼女も、姉のベルニケのやうにコスモポリタンの、野心の多い、不良な、さうして不思議を好むユデア女であつた。彼女は特に魔術に溺れて、魔術者シモンを信用してゐた。フェリクスが、彼女をして夫、エミサ王アジズスに乗て、己と同棲せしめ得たのも、此の魔術者の勢力を巧に利用したからである。彼女は、當時十五六歳で、美しい女であつた。

このドルシラが使徒について不圖好奇心を起したのである。パウロは彼女とフェリクスとの面前に連れ出された。彼等にイエズス・キリストを信すべき由を語り、なほ、嘗て、洗者ヨハネがヘロデ・アンチパスの面前に於てしたるが如く、豫言者の大膽を以つて『正義と貞操と未來の審判とに就いて』論じた。フェリクスは戦いて、あはて、中止を命じた。

『當分は引取りてあれ、我よき機を得て汝を招かん』と。

しかし、ドルシラは、此のナザレト人の審判の物語に怖え切つたものが、最早、再びその話を聽かうとしなかつた。彼女は、後年ヴェスヴィウス山が爆發した際、フェリクスとの間に生んだ子供と共に、ボムベイ市に於て非業の最後を遂げた。

總督は、パウロを數次招いて語らせた。それは、パウロの身代金として、キリスト教徒に莫大の金額を出させようと云ふ魂膽からであつた。しかし、パウロがこの慾心に添はなかつたので、彼はわざと裁

判を遷延させた。これは、彼の奥の手の一だつた。ヨゼフスが、彼の後継者の一人アルピヌスに就いて録したことは、彼にもよく當嵌る。『彼は賄賂を贈らざる者のみ、牢獄に幽閉し置けり』と。『ユデア戦記』

しかし、フェリクスの失脚も遠くはなかつた。皇帝ネロは紀元五五年に、母、アグリッピナの寵臣たりしパラスを追うた。パラスは、最初の中こそ、なほフェリクスを保護するだけの勢力を有してゐたが、やがて帝はポッペアに籠絡されて總督を更迭させた。彼女の背後には容易にフェリクスの不正不義の證據を擧げて迫ることが出来た、ユデア人の運動があつたのである。

フェリクスはカイザリアを去るに先だちて、再びパウロを鐵鎖にて繋ぐべしと命令した。これは、サドカイ派の歡心を買つて、ユデア人の復讐の鋭鋒を避けんとする窮餘の陋策であつた。

パウロがヘロデの宮殿中に囚人となつてから、既に二年の年月が経過したが、解放の曙光は何日さすか、全く不明であつた。それだから、再び鐵鎖を身に帯びた時には、それが尙更重く感じられた。しかし、彼の靈魂の奥底には、解放の讚美歌、『ローマに於ても我を證せざるべからず』との、主の御約束の聲が響くのが休まなかつた。

フェリクスの後継者として、ユデアの總督となつたボルチオ・フェストは、熱誠、公平、賢明な良吏

として令名があつた。彼は赴任するや否や、三日の後にすぐエルサレムに赴いた。彼は熱心を以つて、彼等の幸福を助長せんと云ふ意志の表示を、イスラエルの首領等にしたのである。パウロの敵は、新總督を興しやういと見て取つて、パウロを讒訴し、彼をエルサレムに上せて、衆議所に引渡し給へと乞ふた。フェストは、彼等がカイザリアとエルサレムとの間に、刺客を伏せて、パウロを殺害する下心を有することを觀破して、

『我、程なく出立すべければ、若、かの人に罪あらば、汝等の中に然るべき人々我と共に下りて之を訴ふべし』

と、斷然はねつけてしまつた。

彼はカイザリアに歸ると、翌朝パウロを法廷に出頭させた。パウロは、すぐにそれと判るやうに、一段と小高い場所に立たせられた。彼の前には總督が着席し、彼を取圍んで半圓形に告訴人が立つてゐた。彼はダヴィド王と共に、『力つよき牡牛、我をかこめり』と云へたのである。ファビの子、大司祭イスマエルは、自ら彼を訴へる爲に此處まで來た。ユデア人中の雄辯家が、交々立つて、巧妙に讒言した。その中で、最も重大な點とされたのは、彼が謀逆人だと云ふ事であつた。彼等によれば、彼がユデアの傳統を破壊するのは、之を助長せんとするローマ人の意志を無視するものである。彼はイエズスな

るものゝ名によつて、地上の國家に優る王國を約束し、あらゆる地上の國家はやがて滅亡して、諸々の帝王は、來るべき王の法廷に於て裁判せらるべしと豫言してゐる。實にローマ帝國の安寧秩序を害し、セザルに不敬を加へる説である。かゝる教を宣布する者は、社會の害蟲であつて、到底生かして置くとは出来ない。

彼等はこのやうに誣告をしたが、しかし、一も證據をあげる事が出来なかつた。

『我ユデア人の律法に對しても、神殿に對しても、セザルに對しても、何等の罪を犯したる事なし』と、無辜者の良心を以つて、パウロは之に應じた。

フェストは、争論が宗論であつて、『活き居れりとパウロが斷言せる一人の死者イエズスに關する問題』を中心としてゐることが解つた。彼は一方にユデア人の執念深い要求に不快を感じ、同時にローマ官吏として、正義によつて一公民を保護せねばならぬと思つた。しかし、ふと、彼はユデア人を満足させ、又、自分の良心を安んずる一方策を考へついた。それで、何等陥穽を作る下心なく、率直にパウロに問ひかけた。

『汝エルサレムに上り、彼處にて我が前に裁判を受けんと欲するか』と。

パウロは、總督がローマ公民に強ひてユデア法廷の裁判を受けさせる權利を有つてゐない事を知つて

ゐた。フェストの質問は、自分の有利な立場を、更に明に彼に自覺させた。

『我はセザルの法廷に立てり、彼處にて裁判せらるべし。汝のよく知れるが如く、我はユデア人に害を加へたる事なし、若し、害を加へたるか、或は死刑に當る何事をか爲したらんには、我死を辭せず。然れど、彼等が我に負はする事一も立たずば、誰も我を彼等に交付し得べからず。我セザルに上告す。』

ユデア人等は、このパウロの答を聞いて、雷に撃たれたかのやうに沈黙した。フェストは陪席の役人等と相談する爲に、席を立ち、やがて再び場に現はれて、

『汝セザルに上告したれば、セザルの許に往くべし』と宣告した。

もし、他のユデア人が『我、セザルに上告す』と云つたならば、それは、區々たる黨派的利害の抗争に超越するものとしての、ローマの最高主權に對するイスラエル人の信賴を表したばかりであつたらう。ユデア人の一大部分は帝國の權威に心服してゐた。彼等はローマ統治の幸福を信賴して、ローマの軍隊に加はり、忠實なる兵士として諸方に轉戦した。エルサレムが、紀元七〇年に遂に滅亡したのは、ディアスポラのユデア人が、あまりにローマを愛した爲、或は、あまりに利己主義的であつた爲の災禍である。

パウロの口よりのセザルへの上告には、もつと重大な意味が潜んでゐた。『教會』が『會堂』の正義の終結を宣告したのである。『教會』は帝國に判決を請うた。ローマは、後には教會を迫害して之を根絶しようとするが、今は、『教會』は、まだローマに保護を期待するのだ。『教會』は次第に帝國を侵略し、これをキリスト教化するであらう。しかれども、イスラエルは、時の満つる日まで『教會』に反抗するであらう。

これで、パウロは、ローマのキリスト教徒に逢ひ、セザルの前に出で、彼に神の御言葉を語ることが出来るやうになつたのである。總督の決定は、パウロに明白な喜びを與へた。

數日の後、フェストは、まだ若年のアグリッパ二世と、その妹ベルニケとの訪問を受けた。アグリッパは、ローマにてクラウディオ帝の側近で教育せられ、ローマ帝國に臣従する小君主の一人となつた。彼がベルニケと相接近し、同棲してゐたことは、ユデア人の蹟きだつた。ベルニケは最初叔父ヘロデの妃となつたが、ヘロデの死後、自分の兄の家に来て一緒に住んだ。この二人の關係が世人に攻撃されるやうになると、ベルニケはそれを防ぐ爲に、シリシア王、ポレモンと結婚した。ポレモンは、その莫大な財産に眼が眩んで、彼女を容れたが、暫くすると、彼女は夫を棄て、アグリッパの許に歸つて來た。後年、彼女は、老ヴェスパシアン帝に盛大な贈物を贈つて其の歡心を得、(註一)また、タシトウスの寵愛を買はうとする。

ベルニケはドルシルラより、なほ一層淫蕩な妖婦だつたが、時として、氣まぐれの神信心をすることもあつた。彼女は嘗てナジルの誓願を立て、それを果しにエルサレムに來たことがある。(註二)そのやうな女だつたから、キリスト教の話を聽いて、それに興味を感じたこともあつたらう。パウロについては、ドルシルラから噂を聞いてゐた。それで、今度は、彼女が好奇心に驅られて、パウロに逢つてみたいと思つたのだ。

フェストは彼女の意を察した。實は、彼自身、セザルに送らんとする囚人に關して、アグリッパ王が如何なる印象を受けるか知り度かつた。彼は、皇帝に上るべき報告書の中に、パウロが眞にユデア人等の憎惡に値するものなるか否かに就いて、確な意見を添へ度かつたのである。

翌日、公式の會見が總督と王との間に行はれ、駐屯軍の士官等や、アグリッパとベルニケとの扈從の人達が華美を盡して居並んでゐる所に、パウロは兩手を鐵鎖に繋がれたまゝ引き出された。牢舎の二年は彼を憔悴させたが、それでも一種の生氣が全身に充満し、顔色には空しく證せざる喜びと信頼とが漲つてゐた。アグリッパは彼のいたましく、然も犯すべからざる容子を見て、自ら聲を掛けて、彼に辯解を勧めた。

パウロは手をさしのべた。(註三) 最初のうちは、一同は面白い奇妙な幻視者だと思つて、其の物語を聽いて居た。パウロはまたもや昔の自分の迷謬、改心の動機となつた異象の話をした。彼は、特に自分の教が正統ユデア教と離れるものでないと、と云ふ點に重きを置いた。

『今も亦、神より我等の先祖に爲されし約束に望を繋ぐればこそ、我は立ちて裁判を受くるなれ。我等の十二族は晝夜となく、一向神を禮拜して、此の約束を得ん事を希望するに、王よ、此の希望に就きてぞ、我はユデア人より訴へらるゝ。…之が爲に、我が神殿に在りし時、ユデア人我を捕へて殺さんと試みたり。されど神の御祐によりて、今日に至るまで倒るゝ事なく、小さき人にも、大いなる人にも證明して、云ふ所は、豫言者等、及びモイゼが、將來起るべしと語りし事の外ならず、即ち、キリストの苦しむべき事、死者の中より先に復活して、人民及び異邦人に光傳ふべき事、是なり。…』

此の一句までは、驚愕と、及び、或人々にとつては神祕の啓示との爲に、満堂、ひそまりかへつて他の聲がなかつた。しかし、神聖なるローマ皇帝を代表する、フェストは自分の前でユデア人が、モイゼ及び豫言者の期待したる世界的メシア、唯一の眞の神を説くのを聞遁がし難いと感じた。復活と審判との假定に至つては、想像する事も困難な妄言である。彼は我知らず、聲高に叫んだ。『パウロよ、汝は狂へるなり、博學汝を狂はせたり』と。

不意の叫に、云ひかけた言葉は中斷されたが、パウロはすこしもひるまなかつた。彼はすぐにそれに答へた。

『否、いと尊きフェストよ、我は狂はず、語る所は眞と常識との言なり。蓋しアグリッパ王は是等の事を知り給へば、我も亦憚らずして之に語る。其は此の事、一も片隅に於て行はれたるに非ざれば、王に知れざるものなきを確信すればなり。アグリッパ王よ豫言者等を信じ給ふか、我はその信じ給ふを知れり。』

アグリッパは、此の大膽な言を敢て遮らうとしなかつた。むしろ、好意にみちた返事をパウロにした。

『汝、我を説きてキリスト信者たらしむるに、残れる所、僅なり』と。

これは世俗的な、ディレッタント的な國王の愛想であつたが、それは皮肉ではなかつた。アグリッパは、確信を抱けるパウロの言の魅力を眞に感じたのだ。彼は、改宗が如何なる犠牲を彼等に要求するか、その様な事は思慮してゐなかつたのである。

パウロもまた、男らしい快活さを以つて、之に應じた。

『神の御前に、我が望む所は、僅の事に由らず多き事に由らず、(註四) 獨汝のみならで、聞ける人々も

亦一同、此の縲^{なはめ}を除くの外は、我が如き者とならん事、是なり。』

パウロは縲^{なはめ}の不快を告白したが、しかしながら、若しも彼の兄弟等が、自分が受け奉つたと同様の、限なき貴重なる賜を受けることが出来たならば、其の代償として凡ゆる地上の艱苦を凌いでもよいと思つた。彼のこの高貴な心持の中には、不思議な愛徳の光が輝いてゐた、パウロの此の一言は、挿話^{エピソード}の結末であるばかりでなく、實にその全體の支柱である。何となれば記者が描出した場面の、大切れの言葉として、始めてその全體の意味を完全に示すのである。

此の時に、微笑の聲、賛成の喧が四方に起つて、一同がパウロに好意を寄せてゐる事が明になつた。人々は互に使徒の事を語り合つて、

『此の人は死刑、若くは就縛に當る何事もなし、事なし』

と云つたが、アグリッパ王も、フェストに

『彼の人、セザルに上告せざりしならば、免さるべかりしものを』
と私語^{さしや}いた。

かくて、パウロは両手を鐵鎖に繋がれたまゝ、イタリーの地に上陸するであらう。

ローマは、彼を、旅行の目的地まで無償で送つてやるのだつた。

しかし、彼は危く目的地に達し損ふ所だつたのである。

(註一) タントウス『歴史』

(註二) ヨゼフス『ユデア戦記』

(註三) 鐵鎖が軽かつたので、例の手眞似をすることが出来たのである。これが當時の演説家の型であつたことは、既に述べた。二本の指を屈し、他をのべて手を擴げるのである。

(註四) 其の爲にどれほどの代償を拂つても、の意。

一八、難航海

キツプールの斷食節も過ぎて、晩秋となつた。日は麗かに、爽かな風が吹いてゐた。パウロを連れてゆく船は、ミジア州のアドラミットから來た貨物船であつた。船には他の囚人等も——或は、圓形劇場で、ローマ人の目を娛ます爲に、猛獸に與へられる筈の死刑囚であつたかも知れぬ——便乗してゐた。オグスト隊の百夫長が、部下の兵卒と共に一同を護送した。

パウロの弟子の數名、テモテオ、ルカ、テサロニケのアリスタルコも、船客として便乗することが出來た。二年の牢獄生活にやつれた身體に、海の旅行は苦しかつたに相違ない、ことにパウロは、やはり他の囚人等と共に、露天の甲板に起臥して、潮風に吹かれ、雨にうたれるか、さもなければ、狭い、臭い船艙の中にこた／＼と押込められたであらうから。

南の順風に送られて、船は一日でシドンについて、此處で碇泊した。或は、既にパウロが百夫長の信用を得てしまつたのか、或は、彼を好遇せよとの命令が百夫長に與へられてゐたのか、不明であるが、ともかくも、パウロはこゝに上陸する許可を得た。シドンの小さい教會は心から彼を歡待した。彼は信

者等に善きすゝめを與へ、人々はまた彼を忠實にもてなした。

風が西に廻つたので、船は洋上に出ることが出來なくなり、クプロ島の島影に風を避けて、その東海岸に沿ひ、やがてシリシヤ、パンフリイアの沖を航した。パウロは、遠くから、自分が福音の爲に開拓した地方の山影を望んで、再び歸來する日の有無を疑つて、無量の感慨に満たされた。

かくて、船は、リジア州のミラ港に到着した。恰度、其處にプリンデスが、ナポリに向つて出帆しようとする、小麥を積んだ、アレキサンドリアからの大きな船があつたので、百夫長は一同をそれに乗換へさせた。南風が吹いてゐたけれども、船はミラ港を後にして、數日間、遅い歩みをつゞけて、とにかく、グニド半島の傍まで來た。

それからクレタ島の風下を通るまでは稍々穩な航海であつたが、此の島の突端に近づくに従つて、海が荒れだした。さうしてサルモネ岬を迂回してからは、苦心を重ねてやつとタラサ町の傍の『良き港』と云ふ小さい灣に逃込むことが出來た。

此の灣は、『良き港』と云ふ名にも拘らず、西、又は西南の風には善い碇泊場でないので、船長と船主とは相談して、もつと西の方のフィス港まで行つて、其處で時化の間を過さうと云ふことになつた。パウロは、危険を免かれしめる爲に、豫言者的先見を以つて、その意見に反對した。

『男子等よ、我は航海の漸く困難となり、たゞに積荷と船とのみならず、我等の身にも損害多かるべきことを認む。』

船主は、餘計な事を云ふな、こちらは玄人だ、絞首臺に掛けられるかも知れない囚人のくせにと思つたであらう。百夫長も、パウロの切なる勸告を顧みなかつた。さうして、一行を『良き港』に上陸させる代りに、人間的の常識に従つて、船主と船長とを信用した。

船長は、吹き出した南風に乗じて錨を揚げクレタ島の岸に出来るだけ近く沿ひ、荒海に突出する斷崖絶壁をつたひながら、船を繰つた。

ところが、突然、島の高峰の上から、破れた門から吹き出すやうに、北東の暴風が海の上を襲うて來た。

『ユロアキロだ！ ユリクリドンだ！ 一體、俺達は何處に流されるのだ。』

と水夫等は口々に罵り始めた。船主はあはて、帆をしぼらせたが、船は暴風と一緒に、洋の真中の恐怖と闇暗の中に奔つていつた。

『すべての被造物の嘆き』とはパウロが好んで云つた言葉である。水夫の叫喚、帆のはためき、帆綱のうなり、船體のきしみ、轟々たる風の咆哮、湧きかへる狂瀾怒濤の相搏つ音、雨の響、ヨブが云つたや

うに、老人が白髪を振り亂したやうな深淵。「ヨブ、四一ノ三二」これが被造物の嘆きでなくて、何であらう。しかし、パウロは、この混沌たる自然の裡に、救主、キリストの在すことを感ずるを休めなかつた。もしも、主が荒れ狂ふ怒濤の上を歩んで、彼に近づき給うたならば、彼もペトロの如く、寸時も躊躇せずして、主を迎へ奉る爲に、海中に飛び込んだであらう。何日であつたか、我等はそれを知らないが、彼は最早、三度も難船したことがある。「コリント後書一ノ二四」彼は今回の難を免れ得ることを確信してゐた。

やつと夜が明けても、太陽は上らなかつた。天には雲が低くたれて、船が躍るやうに、雲も躍つてゐた。見渡すかぎり、山のやうな浪のうねりと、深淵のやうな浪の谷ばかりであつた。

しかし、それでも、小島が一つ眼界の中にはひつてきた。雲を擘く釘のやうに鋭い峰と、怒濤を破るけはしい巖礁が現はれた。

船長は、それがクレタ島を南に去る二十五海里のユウダ（今日ではゴツツオ）と云ふ小島だと知つた。島がすこし暴風を遮断してくれたので、島陰にはひとと人々はすこしく吐息をついた。水夫等は此の間を利用して、それまでは、船の背後に繋いだ儘であつた小艇を、甲板上に引上げた。流失するのを畏れたからである。それから、船體がゆるまぬやうに、備繩でこれを巻縛つた。又その重量で船脚を遅らす

心算で錨を投込んでこれを引きつることゝした。船員が最も懼れたことの1は、アフリカに吹きつけられ沙漠の中の大シルト灣、又は、小シルト灣に送られることであつた。

波間に没して、また浮び上る時には、船は殆ど顛覆しさうだつた。それで船體を軽くする爲に三日目には水夫等は、卓とか腰掛とか、無用の船具とか、風に吹き折られてころがつてゐた帆桁とかを海の中に投げ込んだ。

暴風は何日までも吹きしきり。百千の悪魔が船を取巻いて嘲つてゐるやうだつた。十三日前から、太陽も星も姿を見せず、船の現在の位置も、方角も、まるでわからなかつた。海水が浸入した爲に、飲料品の大部分も無駄になつた。二百六十七人の乗組の中で、大部分は船に酔つて、暴風雨の始から、何一つ食し得なかつた。一同みな絶望し、死を覺悟した。パウロも、自分の勇氣を持ち耐へる爲に、ひどく苦しんだ。あたかも永遠の都市に志す彼の行方を遮らんが爲に、惡の能力が彼を妨げるかのやうに感じた。さうして、熱心に同船してゐる人々の爲に祈つて、一の徴兆を主に求めた。

すると一夜——第十三日目の夜——天使が彼に現はれて、力をつけてくれた。

『パウロよ、恐るゝ勿れ、汝はセザルの前に出延せざるべからず、且、神は汝と同船せるものを悉く汝に賜ひたるなり』と。

しかし、朝になつても、險惡な天氣はすこしも變らなかつた。空は黒雲に鎖され、海は鉛色に黒く、風は風がなかつた。それでも、パウロは、失望した人々の群にたすかりの神託を告げに、甲板の上を歩み廻つた。

『男子等よ、前に我が言ふ事を聽きて、クレタ島を出帆せざりしならば、かゝる損害と危険とを免れたりしものを。さて我、今は安心せんことを汝等に勧む。そは汝等の中、一人も生命を失はずして、船のみ棄るべければなり。蓋、我が屬する所、事へ奉る所の神の使、昨夜わが傍に立ち給へり。されば、男子等、心を安んぜよ、我は我に謂はれし如く、然あるべしと神に由りて信すればなり。我等は必ず或島に至るべし。』

第十四夜の眞夜中頃に、乗組は波濤の音の中に混つて、聞覚えのある響を聽いた。流してゐた錨もどろやら海底に觸るやうだつた。陸が近い證據だ。水夫等は測鉛を投げ込んだ。二十尋だつた。すこし進んで、また測鉛を投げたら十五尋しかなかつた。そこで、暗礁に乗上るのを恐れて、艫より四つ礎をおろした。その危険の方が今迄の危険よりも却つて恐ろしかつたのだ。しかし、一方、船はどんく浸水して来て、この儘では、明方までに、船體も波濤の爲に毀されてしまひさうになつた。

暗黒の中に、氣が狂ひかけた水夫等は、ひそかに舟を見棄てようとした。彼等は、船の舳から碇を下

すとの口實で小艇を吊下げた。パウロは、その時甲板に立つて、これを見下してゐたが、彼等の眞意を悟ると、百夫長と兵卒等とに告げた。

『此の人々船に止らば、汝等助ること能はじ』と。

それで、兵卒等は水夫等の立騒ぐのもかまはずに、吊下げた小艇の綱を斷切つた、小艇はすぐに波間に沈んでしまつた。

パウロは、かやうな危機一髪の際には、何處でも、自から他人の長上となつてしまふ。一種の超自然的確実性が、船主にも、百夫長にも勝る權威を、彼の言葉に與へたのである。神祕家パウロは、吊下げられる小艇の意味を看破した。しかし、司祭としての偉大さが、彼の實際的才能に光輝を添へたのだ。

まだ夜が明けなかつた。突風にゆれる二三の舷燈の暗い火影に、彼は一同の氣の抜けたやうな顔、寒さと恐怖とに顫へてゐる姿を認めた。彼は其等の人々の間を歩み廻つて、一同を上げました。それは、荒れ狂ふ海に對しても、罵り叫ぶ暴徒に對しても、すこしもひまなかつた聲だつた。

『汝等何をも飲食せずして、空腹にて待てる事既に十四日なり。故に我、汝等の健康（救済）の爲に食せん事を勸む。蓋、汝等の一人の髪の毛、一筋だに失せざるべし。』

パウロのこの言には、實際的の意味があつたと共に、神祕的象徴の意味があつた。彼は身體の救済と

共に靈の救済をも考へてゐた。さうして、彼が勧めた食事は、同時にキリスト教徒にとつては、聖體拜領の勧めであつたのである。彼は麪をとつて、一同の前で之を祝し、之を擘いて先づ食した。残りの人達もこれに力を得て、飢餓を醫す爲に各々食事をした。

それから、引續いて、曉をまたず、積荷の麥を海に擲てる作業を始めた。船を軽くして、無事に岸まで乗りつけようと云ふ意志なのである。

やがて四邊が明るくなるにつれて、一同の前に展開したのは、全く見知らぬ土地であつた。右手には大きな巖礁が亂立し、左には低い岬が突出してゐて、正面は淋しい入江となり、その入口の中程には、小さい島嶼があつた。

入江の奥は砂濱になつてゐたので、船長と船主とは取敢ず、其處に船をのりつける事に決めた。それで、まづ艫の碇の繩を斷ち切り、暴風の間くゞりつけて置いた舵綱を弛め、舳の帆を揚げて陸を指して進んでいつた。ところが、突然、海中の淺瀬に乘上げ、舳は填つて動かなくなり、艫だけは浪の力で外れたまゝとなつた。

此の時、兵卒等は囚徒が泳いで逃げる事を虞れて、彼等を壘にしよつとの惡魔的な考を持ちだした。しかし、百夫長は、パウロを救はうと思つて之を禁じ、

『泳ぎ得る人々は先づ海に跳入れ。他の人々は板、又は船具に乗りて逃れよ』と命令した。

恰度、海から陸の方へと吹付ける風があつたので、乗組の人々一同、パウロの約束にたがはず無事に上陸することが出来た。

一體、此處は何地なのだらう。

その中に、漁師か百姓かが、難破者の姿を見付けて寄つて來た。此の夷は、ギリシヤ語でも、ラテン語でもない奇怪な言を話すのみだつた。しかし、そのカルタゴ系の方言の中には、多少ギリシヤ語も混つてゐたので、やつと一同が上陸した此の地は、パウロが豫言したやうに島であつて、マルタ島である事がわかつた。マルタ島は當時シ、リア州に屬してゐた。さうして、百夫長はプブリオと云ふ島司が、上陸した地點より程遠からぬ所に、邸宅を有することを聞いて喜んだ。(註一)

しかしながら、濡れたまゝでやつと上陸した難破者等は、雨にうたれ、寒い海風に吹かれた。このまゝでは、到底島の内地に行くことが出来なかつた。やがて近所の村落から集つた土人等は一同を勞つて、盛な焚火をしてくれた。元氣なパウロは、他の人達のやうに火にあたる事をしないで、土人やローマ兵等に手傳つて柴を集めた。ところが一抱の柴草の中に毒蛇が眠つてゐたのを知らずに、それを焚火の傍

に置いたので蝮は火熱の爲に目をさまし、パウロの手に捲付いてしたゝかに噬付いた。手からは血が流れ出した。(註二)パウロは火の中に蛇を振落して、そのまゝ仕事を續けた。土人等は私語き合つた。

『此の人は誰ぞや。』

『これは裁判の爲に、ローマに送らるゝ罪人なり』

と一人のローマ兵が答へた。

『此の人定めて殺人者なるべし、海よりは逃れたるも、天之に活くる事を許さず』

と夷等は考へた。

このやうに酷く噛まれた以上、此の囚人は即座に地に倒れて、劇しく苦悶して死ぬに相違ないと思つたのである。しかるに、それに反して、彼は何の害をも受けなかつた。それで質朴な島人等は、翻つて、

『是、神なり』

と云つた。

パウロとその同行者等は、島司の許で、懇切にもてなされた。プブリオの老父が恰度熱病と赤痢とを患つて臥してゐたので、パウロは之に近付いて按手した。老人は忽ち痊えて牀を離れた。此の奇蹟の評判に、島の病人等、ことに熱病を患へる人達は(註三)踵を次いでパウロを訪ねて、己が身體に觸れ、

祈禱せんことを求めた。パウロが彼等を悉く痊したので、土人等は彼、及び一行を大に敬愛するやうになつた。

パウロは三月まで三月間、マルタ、即ち『蜜の島』に滞在した。あのやうな艱難困苦を経た後の、此の冬籠りは彼にとつて樂しかつた。彼は丘陵に身を横へて、アフリカの太陽の光を浴びながら、來るべき鬭争の爲に、疲労し切つた身體を休めた。ローマはもう遠くない。プテリオにゆくアレキサンドリアの船の甲板に立つた時、彼は、後に消えゆく好意の島に、祝福をこめた眺を送つた。

マルタ島も、また、彼を忘れない。私もマルタを見た。それはパウロのやうに、雨と風との中でなく、平和の紀念の聖マルチノの祝日、美しい秋の朝に此の島を眺めたのである。ヴァレットの町は嚴めしい城壁に圍まれ、教會寺院の圓蓋に覆はれ、東洋と西洋との混交よりなる一種特別のキリスト教的文明の華を、南國の海の上に咲かせてゐる。私はこの島の光榮ある過去は、或意味に於て聖パウロの事業なることを感じた。この島の岸に十字架を樹てた者は彼なのだ。マルタ武士團、貞潔と勇氣とのキリスト教の精華、『信仰の兜と楯』とを有するを誇りし此の中世の武士團は、彼の愛好するものであつたらう。サラセン人に對して難攻不落の陸堡として建てられた城壁も、また彼の愛好する所であつたであらう。彼がマルタに於る正確な遺跡は残つてゐない。彼の書簡にも、マルタ島の名は現はれない。しかし、

此の島の一切が、彼の光榮を告げるのである。

(註一) 近來マルタ島で發見した二個の古銘に島司と云ふ稱呼が現はれてゐて、こゝでも使徒行録の記事正確さを證してゐる。

(註二) 次の土人等の言によつて咬傷はかなりひどかつた事がわかる。

(註三) 島の流行病、當時に於て、既に、山羊の乳によると云ふマルタ熱であつたらう。

一九、ローマにて、キリストの囚人

ローマの市街へはひる前に、カパーナ門のあたりで、パウロは見慣れた町の有様を目撃した。曲りくねつた小路は、東洋の市街の場末に酷似^{そっくり}だった。両側の薄暗い小店舗の中からは、香料や油揚物の臭気が發散した。蝟集する子供等、草履^{サンダル}をひきづつて、布を頭に捲きつけ、水壺を載せて、水を汲みにゆく脚の太い穢らしい女、屑屋、乞食、行商人、それが皆ユデア人で、彼等は全く本國におけるとほりの生活をしてゐた。彼等もまた兵卒等に護られてゆく囚人の後姿を見送つて、

『彼もまた我等の一人なり』

と呟いたことであらう。

彼はローマの東北に當るヴィア・ノメンターナの傍にあつた近衛兵の兵營に連れてゆかれる爲にローマ市を殆ど横断しなければならなかつた。カイザリアで、二年間も兵卒等と共に起臥した彼は、兵營に導かれてもすこしも驚くことはなかつた。彼は建物や營庭の廣いことにも、兵卒等の美しい姿態にも、彼等の軍帽の大きな飾にも、殆ど氣が付かなかつたけれども、其の處で圓形劇場の戰の爲に、石の檻の

中に飼養してあつた獅子や、其の他の猛獸の唸り聲には耳を聳てた。

ユデア總督の報告書もあり、護送して來た百夫長ユリオの證明もあつて、彼は所謂クストディア・ミリタリスと稱する非常に寛大な取扱を受けた。此の取扱を受ける囚人は、兵營の附近に宿泊して、自由に出する事も出來た。但、鐵鎖は外されることも無く、又、晝夜一人の兵の監視を受けねばならなかつた。

恐らくは、彼は到着後は、一人の信者の家に客となつたであらう。プリスカとアクィラとは、なほまだローマに居たであらうか。彼等がアジアに歸つたのは、もつと後であつたらしい。「チモテオ後書、四ノ一九」パウロは、在獄中の書簡の中に彼等のことを一言も書かない。それに、彼等の家はアヴェンティノで、ローマの他の外れ^{はず}であつたから、パウロは彼等の家に泊らなかつたであらう。

到着してから三日の後に、パウロは近所の重立つたユデア人呼び集めた。守衛兵に鐵鎖の端をとられてゐては、會堂に行つて説教をすることは思ひも寄らなかつた。ユデア人は、好奇心にかられて彼の宿にやつて來た。彼はローマ人が彼を赦さうとして果さなかつたいきさつを人々に話した。衆議所議員が、どうしても彼を自分等の手で裁かうとしたので、セザルに上告するの止むを得ざるに至つたのだ、と云つた。さうして、

『イスラエルの希望の爲にこそ、我は此の鎖にて縛られたるなれ』
と、例の抗議を繰返した。

ユデア人の返事は丁寧で用心深かつた。

『我等は汝に就きて、ユデアより書簡を受けたるにもあらず、又、兄弟の中に来りて、汝が悪しき事を吹聴し、或は語りたる者あるにもあらず。然れど、希はくは汝の思へる所を聞かん。そは此の宗派が到る處に於て逆らはるゝ事を知ればなり』と。

是等のユデア人が、新しいキリスト教の教理に關し、又、メシアとしてのイエズスの信仰に關して全く無智識であつたとは思へない。しかし、彼等は、隠さず充分に話してもらひ度かつたので、わざと知らぬふりをしたのである。或は、これは、彼等がアジアのユデア人と共謀して、陥穽を設けようとしたのであらうか。否、さうではあるまい。『汝につきてユデアより書簡を受けたるにあらず』と云つたのは、眞實だらうと思はれる。春さき、やつと航海が開けた時分には、東洋からローマへの便りは、なかく日數を要したから、エルサレムのユデア人が、自分等の手を逸した使徒を、ローマで殺すやうに、さう早く手はづを廻すことは不可能であつたに違ない。外見的にも、ローマに於ける二年間の囚人生活中、彼等が彼に別段の危害を加へようとした様子がない。或は、假令私に計畫を廻したものがあつたとして

も、何等かの勢力が彼を保護して安穩の時期を彼に與へたのである。

ローマに於けるユデア人は、パウロの説教を聽く爲に、日を期して、彼の宿に来ることになつた。パウロは其のひまに大廣間がある一の家を借り、(註一)其處に兄弟等、及び『道』を識らんと欲するユデア人並びに異邦人を集めた。此の集會は、まづユデア人の爲に始められた。來會者はかなり多數であつた。パウロは『朝より晩に至るまで』律法と、モイゼと、諸の豫言者とに基いて、神の國を證明し、又、イエズスの傳を物語つた。しかし聽衆の中に謂はるゝ事を信する人もあり、信ぜざる人もあつて、相争ひつゝ退席しだしたので、パウロは、その不成功を悟つて、未練なく彼等を歸して、その頑な頭腦の中に、

『汝、此の民に至りて之を告げよ。汝等耳にて聞かんも悟らず。目にて見んも認めざるべし』

と云ふイザヤの豫言の釘を一本さし込んだ。さうして、

『神の此の救は異邦人に遣られて、彼等は之を聽くべきなり』
との希望の豫言をつけ加へた。

パウロの周圍の異邦人等が如何に之を聞いたかと云ふ事は、彼の書簡中に散在する數句から想像することが出来る。

『兄弟等よ、我、汝等の知らん事を欲す、我が身に關する事柄は、却つて福音の裨益と成るに至りしことを。即ち、わが縲縛に遇へる事のキリストの爲なるは、近衛兵の全營にも何處にも明に知られたり、かくて兄弟中の多數は、わが縲縛の故に主を頼み奉りて、一層憚らず、神の御言を語るに至れり。』〔テモテ書、一ノ二二―一五〕

パウロは鐵の腕輪がはめられてゐた兩腕を兄弟等に見せればそれでよかつた。この説教は、微温的な信者にも、信仰を宣べる爲の元氣を振り起させた。ローマには、未だ殉教者はなかつた。しかし、パウロは、殉教の希望を作り上げた。未だキリスト信者に對する迫害はなかつたが、しかし、一種の嫌疑は存してゐた。ある名家の一族だつたポムパニア・グレンシナと云ふ女は、五七年に『奇怪なる迷信』〔ダシトウス〕にふけるとの廉で告訴されて、キリスト教徒であつた爲に、『有害なるものなり』との公の宣告を受けた〔スエトニウス〕。ローマ人は、ユデア教より出た新宗教が、ユデア教と合同しない事をみてとつた。新宗教は唯一の神を信じて、他のあらゆる神々を排斥する。故に、それは皇帝及び國家にとつて危険である、と信じた。キリスト教徒の嚴格な規律が、異教徒の放縱な生活を私に攻撃するのが、又、新宗教の憎惡を招く一因となつた。

紀元五九年乃至六一年のネロのローマが、パウロに與へた惡印象は、想像するに難くない。

帝は既に母后を殺した。醜惡極る彼の汚行は惡魔的となつてゐた。トリマルキオンの饗宴では主客共に泥酔して睡つてゐる脚下に、奴婢共が、これまた葡萄酒に浸漬つて酔ひ倒れて躰をかいてゐる。ランプが消えようとする。すると二人のシリア人の下僕が、残りの葡萄酒を盗みにはひつて来る。卓子が顛覆して、コップが倒れてゐる下婢の頭に當ると、下婢は吃驚して大聲を上げる。一同は眼を覺して、まだ酒を呑みだす。このやうな悲惨な道化芝居が貴族等の生活の實際だつた。

ユヴェナリウスは、此の社會の醜狀を譏つて、下水のはけ口の汚物を食べて成長し、スプウラ（風紀の亂れたのを以つて知られた街區）の下水の中まで上つて来る魚のやうだ、と云つた。

貴族の殘酷も、饗食や其の他の罪惡に比して勝るとも劣らなかつた。奴隸が新らしい模様の衣服を着てゐたのを見て、面白半分に彼を管ち、目も當てられぬ様にしたローマ貴婦人があつた。スエトニウスの記事を信するならば、ネロは生肉をたしなむエジプト人に、生きた人間をやつて之を食はせた相だ。

ローマ帝國は人民を粉碎する機械だつた。しかし、その暴政の背後には、醜い恐怖がかくれてゐた。元老院は卑屈な服従を續けてゐたが、現行政體に對する貴族等の不平は蓋ふに由がなかつた。何故ならば、軍隊にかつぎ上げられた將軍が、皇帝となつてゐたばかりで無く、何時密告者の讒言によつて、自分等の生命財産が奪はれるかも知れなかつたから。ローマは、捕へる事が出来るだけの蠻族を、頭髮を

つかんで引廻はしたが、しかし、自分の背後に、彼等の漠然たる大集團の野性の唸聲を聞く心持がしてゐたのだ。

我等は、パウロの書簡の中から、彼が皇帝周圍の亂行を目のあたりに見て、感じた感情の幾分をでも發見することを得るであらうか。ペトロはその第一書簡「五ノ一三」の中で、ヨハネは黙示録の中で、ローマをバビロネと呼んだ。パウロはフィリッピ書の中で、次のやうに世間の墮落に觸れてゐる。

『汝等咄く事なく、争ふ事なく一切の事を行へ、是、汝等が悪く且邪なる代にありて、咎むべき所なく、神の純粹なる小兒として、科なき者とならん爲なり。汝等は斯る人々の間に、世界に於る星の如く光りて、生命の言を保てり』と。「二ノ一四—一六」

此の書簡の末文の中で、彼は、自分が特に如何なる階級の人々の中で働いてゐるが、と云ふ事を暗示する。

『凡ての聖徒、殊にセザルの家に屬する人々、汝等に宜しくと言へり』と。「四ノ二二」

迫害は、當時に於ては、漠然たる杞憂にすぎなかつた。彼は、セザルの法廷に於て、無罪の宣告をうける心算でゐた。彼は自分を審く者を審かうとは思つてゐなかつた。神自らこれを爲し給ふであらう。

此の時期の使徒の悲は異教徒より來なかつた。彼は却つて信者等の間に、嫉妬、反目の感情に遭遇し

た。

『眞心を有たず、裸綫に於るわが困難を増さん事を思ひ、黨派心よりキリストの事を説く者あり。』「一ノ一七」

かくの如き反目は彼を苦しめた。さもなくば、このやうな事を記さなかつたであらう。しかし彼の爲に不安を感じずに、却つてこれを自己の謙遜の好機とした。

『さりとても、何かあらん。如何様にもあれ、或は口實としてなりとも、或は眞心を以つてなりとも、キリスト宣傳せられ給へば、我は之を喜ぶ、以後も亦喜ばん』「一ノ一八」

と、彼をして云はしめたのは、感すべき無我の精神であつた。

彼がかくも苦んだ是等の嫉妬は、何人から出たのであらう。ユデア主義者も其の中にゐたであらう。しかしまた、以前からの信者の中に、パウロの權威を嫉んだ者がゐたかも知れない。パウロの過去には、あまりに靈的特權があり、あまりに冒險があり、あまりに征服がある。彼の鐵鎖は王冠に見えた。彼の熱情、活動は、慎重、細心のローマ人を驚かせた。彼は、自分の周圍に、チモテオ、アリスタルコ、チキコ、ヨハネ・マルコ、『至愛なる醫者』ルカの如き熱烈なる弟子、及び其の他、彼の傘下に馳せ參じた人等を集へて、指導を續けてゐた。悪意を以つて視る人からは此の一群は、以前からあつた盛大な教

會の中に、別個の教會を作つたやうに見えたかも知れない。

かくの如き誤解に悩んだにも拘らず、パウロは、ローマに長く滞在すればする程、彼及びペトロが此處に召された事が、將來に於て非常に重大な意味を有つのであると、次第に判然とわかつて來た。キリストが教會の頭なるが如く、ローマが帝國の首府なるが如く、それはまたキリスト教世界の中心であらねばならぬ。

しかしながら、それにも拘らず、彼は、自分、若くは自分の直弟子が建設した東方諸國の教會の上に、屢々思を馳せた。彼の靈示の教の遺言は、實に、是等、東方諸教會の聖徒に與へられるのである。

彼等は、正しい『道』をしつかりとつかまねばならない。其處には無数の謬説があつた。まづ第一に、殆ど抜き難いユデア人の麴醉がある。彼は叫んだ。

『汝等かの大等に用心し、悪き働人に用心し、偽の割禮に用心せよ、蓋、靈によりて神を禮拜し肉身を頼まずして、キリスト・イエズスに誇れる我等こそ割禮なれ。』(フィリッピ三ノ二、三)

ユデア教は、單に、モイゼの律法の業を命するばかりでなかつた。教養あるユデア人間には、一種のグノーシス、即ち、ラビの傳統と、東洋の密義と、ギリシヤ思想との混交とよりなる、一種の高等な宗教思想が存在してゐた。これについては、フィロンを讀まなくとも、使徒の之に對する反駁のみによつ

て、その所説の大體を窺ふことが出来る。その中には、人の靈魂が種々の星の中に生れ替り、又、星の運行が此の世の人間の運命を支配すると云ふやうな説もあつた。(註二)又、恐らくエッセー派より出たと思はれる神祕主義が、キリスト教會の中に潜入しようとしてゐた。我等は純き者、完全なる者であり、善を所有する、故に、之を獲得せんとて焦躁する必要はない。これが、この神祕主義の齎らす危険であつた。

東方諸教會の信者に、パウロが

『汝等が信仰を以つて救はれたるは、恩寵によるものにして、自らによるにあらず 即ち、神の賜なり』(エフェソ書二ノ八)

と力説したのは、その爲であつた。

又、彼は最愛のフィリッピ人に、自己を模範として示した。

『かく云へばとて、我既に達する事を得、或は完全になりたるには非ず、たゞ我キリスト・イエズスに捕へられたれば、如何にもして之を捕へ奉らんとして追求するのみ。』(フィリッピ書三ノ一二)

又、彼は、何時にも増して、次の重要な玄義を繰返へした。即ち、キリストと教會とは、頭と四肢との如く一である。もし我等、肢が生命を有せんと欲せば、之を頭より受け、頭によりて、頭と共に、頭